

MOSTLY

【月刊】モーストリー・クラシック

http://mostly.jp/

2 vol.285
FEBRUARY 2021

C O N T E N T S

- 88 マンスリー・ベルリン・フィル ⑮ マーラー交響曲全集がリリース
- 90 ヴィルフリート・和樹・ヘーデンボルクのウィーン・フィル便り ⑩
- 91 2020年回顧 ベスト・コンサート編
- 94 2020年回顧 ベスト・CD・DVD 編
- 97 2020年回顧 編集部編
- 98 STAGE
- 98 広瀬悦子 ピアノ 99 天羽明恵 ソプラノ
- 100 高関健 指揮
- 101 東西南北 いずみシンフォニエッタ大阪定期演奏会「飛翔する感性」
- 102 オーケストラ新聞
京都市響の常任指揮者兼芸術顧問、広上淳一が退任
大阪4オケが2021年度シーズンプログラム共同記者発表会
- 104 連載 音楽から見たロシア ⑳ マリーナ・チュルチェワ
子供のアルバムと低迷期の兆し
- 106 外山雄三の「オーケストラと暮らして60年」 ④
- 108 音楽プロデューサー 中野雄の音楽人間模様
稀有の名教師=ピアニスト・田村宏
- 110 東条碩夫の「音楽巡礼記」 2020年11月
- 115 連載 いけたく本舗 — 私が出会った演奏家たち ⑨ 池田卓夫
マリス・ヤンソンス 指揮
- 116 諸石幸生の「歴史的な名盤とオーディオ」 ⑩
- 118 音楽に抱かれる悦び ② 和田博巳
- 120 巨匠「名盤」列伝 アンタル・ドラティ 前編 山崎浩太郎
- 122 許光俊の「名曲のツボ」 ヴァレーズ:「アメリカ」
- 123 私のお薦めコンサート 平井洋／伊熊よし子
- 124 連載 鍵盤の血脈 井口基成 ⑥ 中丸美繪
高級クラブ「エスポワール」の女性
- 133 CD&DVD ジャンル別に新譜をCheck!
- 142 連載 私の夢のコンサート 岸純信



連載

- 111 公演レビュー
- 128 Book 「ベートーヴェン」他
- 129 Movie 「私をくいとめて」
- 130 Theater 「ハンナのくぼん」
- 131 Art 「奇想の国の麗人たち」展
- 132 Ballet ウヴェ・ショルツ・セレクションⅡ
- 137 海外公演ここが聴きどころ
- 140 ニュース・アトランダム
- 143 Concert Selection
- 146 FM&TV INFORMATION
- 148 バックナンバーのご案内
- 150 HOTEL'S INFO
- 151 読者プレゼント
- 152 読者アンケート
- 153 読者の声
- 154 次号予告 編集後記

特集

ウィンナ・ワルツとニューイヤー・コンサート

シュトラウス一家の音楽

DVD & CDプレゼント 抽選

MOSTLY

モーストリー・クラシック

2 vol.285
FEBRUARY 2021

ウィンナ・ワルツと ニューイヤー・ コンサート

シュトラウス一家の音楽



シュトラウス1世&2世
ヨーゼフ&エドゥアルト
「美しく青きドナウ」

「ラデツキー行進曲」
リッカルド・ムーティ指揮
ニューイヤー・コンサート2021

オペレッタ「さくらもも」
「メリー・ウィドウ」
19世紀のウィーン

DVD
CD
プレゼント
抽選

表紙: シュトラウス2世、ニューイヤー・コンサート

ワルツはオーストリアの民俗的なレントラーを起源とするといわれている。その後、回転を特徴とするこの舞曲はワルツという名前で様式化されていった。この様式化にはいくつかの段階があったように思える。

ワルツの第1世代

— シューベルトのワルツ —

シューベルトはレントラーとワルツの両方作曲しているが、その舞曲はきわめて短く素朴で、民衆的な要素を強くしている。それは彼が作曲した「16のレントラーとエッセイズ」作品67、D734や、「感傷的なワルツ」作品50、D779によく示されており、この音楽から連想されるのはひなびた、しかしとても健康的な舞曲である。

このシューベルトのワルツは、シューマンやブラームスに受け継がれて、シューマンは「感傷的なワルツ」の中

フランツ・シューベルト
(1797~1828)



の1曲を「シューベルトの主題による変奏曲」の主題に用い、さらにこの変奏曲の「マエストロ」の部分で「謝肉祭」作品9の「前口上」に転用している。またブラームスは、自らシューベルトのレントラーやワルツを編曲するだけでなく、その表現を下地に「ワルツ集」作品39を作曲している。ブラームスのこの曲集は、素朴な民俗的な特質をよく反映している。

ワルツの第2世代

— ヨハン・シュトラウス1世とランナーのワルツ —

1820年代のウィーンの舞踏会場の雰囲気は、シューベルトの素朴なワルツとは大きく異なる。このころからウィーンではワルツ文化が大きく開花する。ワルツが人々の最高の娯楽となったのである。この頃にウィーンには「アポロ・ホール」や「オデオン・ホール」など立派な舞踏会場が建設され、ウィーンを訪れたドイツの旅行者の手記によると、毎晩5万人が舞踏会場に詰めかけた。それは当時のウィーンの人口の4~5人に1人である。

また、19世紀前期のウィーンの舞踏熱について次のような報告も残されている。「ウィーンの婦人たちのダンス熱は大変なもので、どんなことも、その楽しみをやめさせることはできない。どうしても家にじっとし

ワルツは明らかに舞踏会での王者であった。
舞踏会はたんに踊りの楽しみだけではなく、
「鹿鳴館」の舞踏会にも象徴されるように、
ここは外交の場であり、政治の場であり、
商取引の場でもあった。

ウィンナ・ワルツと
ニューイヤー・
コンサート

< 特集 >



ヨーゼフ・ランナー(1801~43 右)と
シュトラウス1世(1804~49)の銅像

シュトラウス1世とともに、ウィーンをワルツ王国とした立役者である。

そして、ランナーのライヴァルであったヨハン・シュトラウス1世(1804~49)によって、ウィーンのワルツのもう一つの様式が完成する。素朴で民衆的なシューベルトのワルツとは異なり、躍動的で陽気で実際の舞踏の楽しみを満載した彼らのワルツは、ワルツ王国ウィーンの顔を作り上げたと言っても過言ではない。

この時期のウィーンの舞踏会場では急速回転をして猛スピードで踊るダンスが流行した。「ラングハウス」という舞踏会場はこの急速ダンスで有名であった。このダンスについてこのように報告されている。

「ふつうは、息もつかせぬスピードで、休みもなしに6回か8回は会場を踊り回らなければならなかった。どのカップルも、ほかのカップルに勝とうと努め、肺の溢血のためにやつと熱狂からさめるといいうのも、まれではなかった」。この流行は「危険」とのこと、当局からしばしば禁止令が出されるほどであった。

また、舞踏会場は男女の愛を交わす場所ともなっていた。グラスブレナンナーという人はこう報告している。「ウィーンでは……狂騒的な乱舞がみられるだけだ。女たちは男の腕に触れるだけで、熱に浮かされたように胸を躍らせる。それから男の胸に自分の胸をくっつけ、頭を男の肩にのせ、男の動き一つ一つと、あの扇情的な音楽に合わせて、自分たちの艶めかしい姿態にうっとりとなつて、果てしなく踊り続ける」

また、1824年に書かれた舞踏曲集「オーストリア本場のレントラー曲集」という副題を持つ曲集のタイトルは「びつたりくっついて」で、男女がくっついて踊っている絵がその表紙画を飾っている。

ウィーンのワルツの第3世代

— ヨハン・シュトラウス2世 —

この2人に続いてウィーンのワルツの第3世代を作り上げたのがヨハン・シュトラウス2世(1825~99)である。彼は第2世代の踊るためのワルツを継承しつつ、その独自の芸術性を追求した。彼はワルツに、有名な「美しく青きドナウ」や「朝刊」や「ジャーナリスト」、「皇帝円舞曲」など、オーストリアに起こったさまざまな出来事を題材にした時事性を与えた。

ウィンナ・ワルツの誕生

ウィンナ・ワルツというのは、第1拍を長く引き伸ばした独特のリズムを取り入れたワルツで、このワルツを耳にした人はたちまちにしてウィーンの風景を思い浮かべるほどに、ウィーン様式を象徴している。しかし、ヨハン・シュトラウス2世の創作したワルツが、このリズムで踊られたかどうかははっきりとしくなく、その起源にも諸説ある。

このウィンナ・ワルツでは第1拍が引き伸ばされることによって、大きなターンが実現され、女性のスカートが大きな弧を描いて舞うことになる。いやまじに華麗さが演出できるだけではなく、男女がより身体的に密着して踊ることになり、ますます人々に愛好されるようになったのである。

恒例の「ニューイヤー・コンサート」では、この思い入れたっぷりの付点リズム付きのワルツで会場は大いに盛り上がるのである。ウィーンの人々は何ゆえにこのリズムに、これほどまでに気分を高揚させるのであろうか。

ワルツは明らかに舞踏会での王者であった。舞踏会はたんに踊りの楽しみの場ではない。「鹿鳴館」の舞踏会にも象徴されるように、ここは外交の場であり、政治の場であり、商取引の場でもあった。こうした外交や政治の駆け引きがウィンナ・ワルツによって演出されたのである。ワルツを踊ることができなければ、世界は動かないと言っても過言ではない。



鹿鳴館での舞踏会の様子を描写した浮世絵。楊洲周延「貴顕舞踏の略図」(1888)

Viennese Waltz
New Year's Concert

ワルツと オーストリアの近代史

世紀末のウィーンに鳴り響いたワルツの甘美さは、人々にとって社会の不安や現実からの逃れる麻酔薬であったのかもしれない。この演奏会の背景には、19世紀後半以降のオーストリアの経験したさまざまな歴史が息づいているのである。

文 西原稔 ◎ 桐朋学園大学名誉教授
text by Minoru Nishihara

オーストリアの都ウィーンをもっとも代表するものと言えば、甘いチョコレート・ケーキ「ザッハー・トルテ」とウィーン・ワルツかもしれない。街角から流れる甘く揺れるようなワルツはいつからウィーンの風景の一部となったのであるか。そしてウィーンを象徴する最大のイベントはニューイヤー・コンサートではないだろうか。ここで鳴り響く陽気なワルツには何が秘められているのだろうか。

「会議は踊る」

19世紀前期の舞踏熱を象徴するのが、いわゆる「会議は踊る」である。これは、ウィーン会議では、会議よりもロビー外交がほとんどで、舞踏会が連日連夜、開催されていたことを物語るエピソードであるが、この舞踏熱は会議に列席した王侯君主や外交官だけではなく、ウィーン中が舞踏の興奮の



ウィーン会議の風刺画。オーストリア皇帝フランツ1世（左から3番目）と右隣にロシア皇帝アレクサンドル1世

つばの中にあつたのである

「会議は踊る」という言葉が象徴するように、ワルツは外交の重要な手段であった。19世紀前期から後半にかけてのウィーンで、舞踏会のための音楽の作曲で最も貢献したのはヨハン・シュトラウス1世および同姓同名のその息子、そしてそのほかのシュトラウス一族

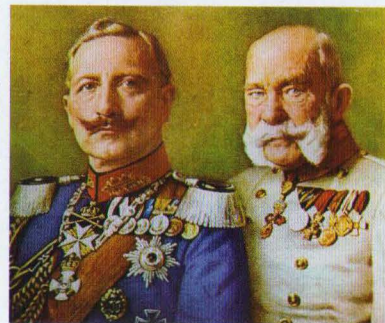
の音楽家である。この時代のウィーンの歴史においてシュトラウス一族のワルツは、オーストリアという国の外交や政治、経済の激動を映し出している。この一族の作曲するワルツはある種のリアリティーを持っていた。

ウィーン3月革命と シュトラウス親子

1848年3月、パリでの2月革命を受けて、ウィーンで革命が起こる。この革命はヨーロッパの新たなレジームの再編の引き金となった。この革命が起こるとそれに連動して各地で独立蜂起が勃発する。オーストリア・ハプスブルク家が支配していた北イタリアのロンバルディア地方で独立運動が起こると、ラデツキー将軍率いるオーストリア軍がそれを制圧する。その戦勝記念の音楽が、ヨハン・シュトラウス1世の作曲した「ラデツキー行進曲」である。同じくハンガリーでも独立運動が起こるが、それを制圧したのがイェラチッチ将軍で、同じくシュトラウス1世は「イェラチッチ行進曲」を作曲して、ウィーンの戦勝ムードを高めた。しかし、オーストリアが対外的な戦争で勝利したのは、これが事実上最後であった。

ワルツと フランツ・ヨーゼフ1世の時代

オーストリアのワルツの文化が生み出されたのは皇帝フランツ・ヨーゼフ1世の時代である。1830年に生まれ、



ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世（1859～1941、左）とオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世（1830～1916）

にシュトラウスの音楽による演奏会が開催された。これがその後のニューイヤール・コンサートにつながる演奏会である。この当時のウィーンの人々が懐かしく回顧したのはオーストリアの最後の勝利の思い出「ラデツキー行進曲」であった。何ゆえにウィーンの人々はこの行進曲に強い思いを寄せたのであろうか。

ニューイヤール・コンサート

では、ヨハン・シュトラウス1世やシュトラウス2世、そのほかのシュトラウス一族の名ワルツやポルカ、行進曲が華やかに鳴り響き、拍手大喝采で盛り上がる。世紀末のウィーンに鳴り響いたワルツの甘美さは、人々にとって社会の不安や現実からの逃れる麻酔薬であったのかもしれない。この演奏会の背景には、19世紀後半以降のオーストリアの経験したさまざまな歴史が息づいているのである。

ウィーンを流れるドナウ川



1916年に没したこの皇帝の68年におよぶ長い在位期間に、オーストリアの社会は大きな変化を経験する。そしてその中で育まれたのがワルツやポルカなどのウィーン独特の文化である。彼が経験した最大の試練は、1859年のイタリア独立戦争である。この戦争でオーストリアは、フランスの支援を得たイタリアとの戦争で敗れた。それを払拭すべく、この戦争の直後の1860年にシュトラウス2世はワルツ「加速度」を作曲している。この作品は政府が殖産興業に努めた当時のオーストリアの政策を反映している。この作品のピアノ初版には蒸気機関や熱気球などが描かれ、それが軽快なワルツで踊られたのである。

その後、1866年、ドイツ語圏での雄略を決するプロイセンとの戦争（普墺戦争）が起こるが、オーストリアはこの戦争でも敗北を喫する。このプロイセンとの戦争の敗北はオーストリアの人々を深く落胆させた。ヨハン・シュトラウス2世作曲の「美しく青きドナウ」は、この敗戦後の意気消沈した雰囲気や打撃を打破すべく、指揮者のヘルベックの提案によって彼に委嘱された作品で、元来は男声合唱とオーケストラのための作品であった。その後、彼の代表的なワルツとして広く流布し、ウィーン・ワルツを代表する名作として知られるようになった。

プロイセンとの敗戦後のオーストリアでは経済の振興策がとられ、鉄道建設によって一時の好景気が訪れる。この鉄道景気に沸くオーストリアを活性化させたのがシュトラウス2世の弟のエドゥ

オーストリアの落日と ニューイヤール・コンサートの 始まり

1914年、オーストリアの皇太子が暗殺され、それが引き金になって第1次世界大戦が勃発する。そして16年フランツ・ヨーゼフ1世が没する。この戦争での敗戦後、第3帝国が登場し、オーストリアはナチス・ドイツに飲み込まれていく。

ウィーンでは1939年の大晦日

ラデツキー将軍像＝1890年代のウィーン



シュトラウス家の ファミリール・ヒストリー

文 萩谷由喜子 ◎ 音楽評論家
text by Yukiko Hagiya

黒い巻き毛のヨハンとの 馴れ初め

わたしの洗礼名はマリア・アンナ・シュトラウム。19世紀幕開けの年の8月30日に、ウィーンの宿屋兼居酒屋の娘として生まれた。父の店に入りに育ったわたしは、いつしかギターを手にして歌うようになり、店の看板娘となった。

その頃、父の店に回ってくるワルツ楽団の一つに、ヨーゼフ・ランナー楽団があった。わたしと同じ年のランナーは、著名なミヒャエル・パーマー楽団にいたのだが、3つ年下のヨハン・シュトラウスとともにそこを飛び出し、他に何名かを加えて新たな楽団を結成していた。

ウィーン会議を機にワルツが隆盛を極めていた当時は、どこのレストランでも居酒屋でもワルツ楽団は大歓迎だったから、彼らは1晩にいくつもの店を巡演していた。颯爽とヴァイオリンを奏する2人のハンサムな姿に、ウィーンの女性たちは老いも若きも夢

ヨハン2世の 母アンナが語る 家族の 葛藤と結束



ヨハン・シュトラウス2世

中になったものだ。

2人のうち、わたしは黒い巻き毛を持つシュトラウスのほうに心を惹かれた。1825年の初夏、わたしは身ごもっているのに気づき、彼にそっと打

ワルツの新曲は人々に受けられない意味がない。ヒットを続けること。まるで20世紀のポピュラー音楽ではないか。当時のクラシックとは一味違った音楽でありながら、今日までたくましく生き残って人々を魅了している。「ワルツ」がファミリール・ビジネスというシュトラウス家を取り仕切った、1世の妻にして3兄弟の母であったアンナに、このユニークな音楽と家族の歴史をじっくり語ってもらおう。



ヨハン1世の最初の妻で、シュトラウス3兄弟の母アンナ

ち明けた。

「そりゃ、すてきだ。ちゃんと祝福されて生まれてくるようにしなくちゃね」

ヨハンはきっぱりとそう言い、わたしたちはこの年の7月11日に結婚式を挙げる。ヨハンは式のとすぐに演奏旅行に出してしまったので、甘い蜜月生活は味わえなかったが、10月25日、玉のような男の子が生まれてきた。この子こそ、のちに世間様が「ワルツ王」と呼んでくださる長男ヨハン2世である。

■ 楽才を芽生えさせる長男、 もう一つの家庭を持つ夫

2年後には次男のヨーゼフが生まれ

た。

この年、夫は些細なことから、相棒のランナーと仲違いし、ランナー楽団から独立して自分の楽団を持った。

前々から、両雄並び立たず、といった傾向はあったし、夫が給料の値上げを要求してもランナーが応じてくれなかったり、夫の書いた新作ワルツをランナーが勝手に借用したり、といった問題もあったようだ。ランナーにしてみれば、後輩の若造を対等に扱ってやっているのに恩知らずだ、という思いもあったのだろう。そんな互いの不満がついに爆発したのだ。

人集めから、出入りできるダンスホールやレストランの開拓まで、夫は懸命に奔走していて、あまり家に帰ってこ

ない。わたしはと言えば、育児に手一杯だった。1829年には長女アンナが、31年には次女テレゼも生まれた。わたしは1人で、必死に子どもたちを育てていた。

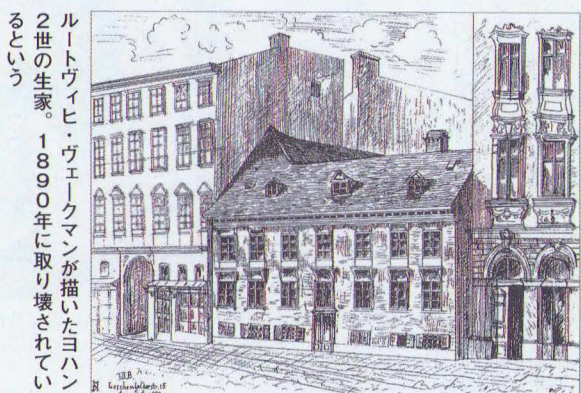
1832年8月、子どもたちを連れて、実家の父がサルマンスドルフに持つ別荘へ遊びに行ったときのことだった。別荘にあった小さなピアノを、満6歳のヨハンがすっかり気に入ってしまい、ひとしきりあれこれと鳴らしては上機嫌である。やがて、

「ママ、きてよ」と呼ぶので、そばへ行くと、息子は聴いたことのないワルツらしき曲を弾いてみせた。

「ママ、これ、ぼくが作曲したワルツだよ」

「まあ！ 一つのまにそんなことができるようになったの！」

わたしは驚いたが、そうだ、これはきちんと残しておかなければ、と気がついた。わたしは息子にもう一度弾いてもらって、それを五線紙に書きとりながら、目頭を潤ませていた。単なる



ルートヴィヒ・ヴェークマンが描いたヨハン2世の生家。1890年に取り壊されてしまった。

みのように思えたのだ。

この子は今に父親以上の音楽家になってくれる。そうなれば、虫の居所が悪いと、すぐに手を上げる夫に頼らなくても生きていくことができる。ヨハンの楽才は、わたしと子どもたちの自立の道を照らす希望の光に見えた。

わたしはその記念すべきワルツを「Erster Gedanke 最初の楽想」と名づけ、ヨハンの音楽家への出発点として大切に保存した。そしてその日から、ヨハンを父親以上の音楽家に育て上げることがわたしの指針となり、ヨハンと次男ヨーゼフにピアノを習わせ始めた。

1834年に生まれた3男フェルディナントは育たなかった。けれども、翌35年3月15日に生まれた4男エドゥアルトはすくすくと大きくなった。

ところが、なんとエドゥアルト誕生からわずか2カ月後の5月18日に、夫にはもう1人、子どもが生まれていたのだ。母親はエミリー・エトランプッシュというって、帽子作りをしていた若い女

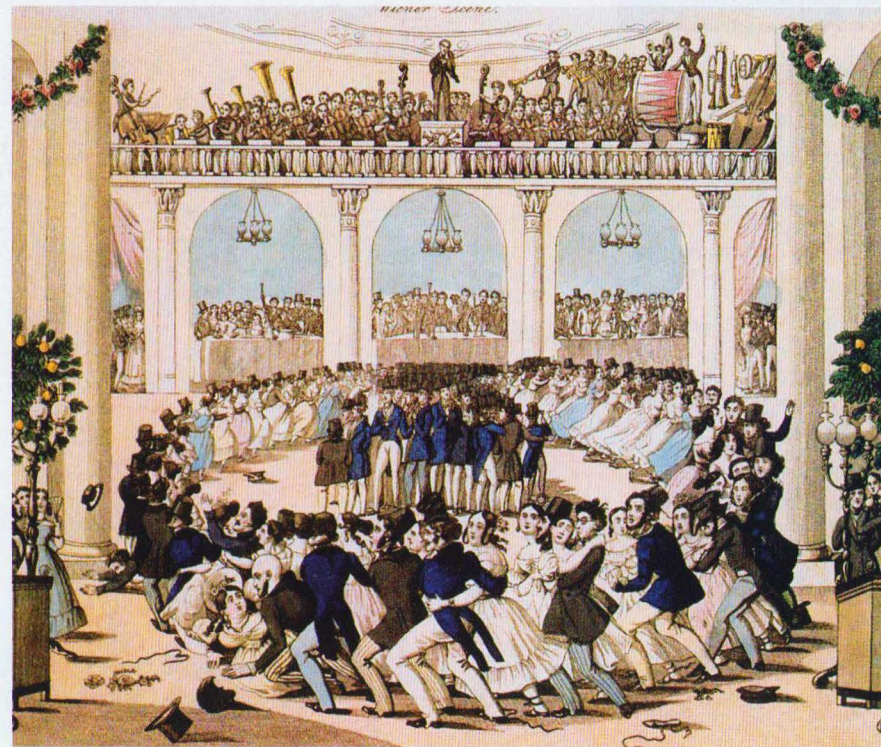
■ わたしが夫に 対抗する意思を 固めた小事件

ヨハンとヨーゼフはぐんぐんピアノの腕をあげてくれた。夫も2人がピアノを習っていることには気づいたが、情操教育の一環と理解して、咎め立てはしなかった。ただし、わたしにはこの釘を刺した。

「ピアノくらいは習わせてもよいが、俺は子どもたちを音楽家にする気はないからな。音楽で飯を食うってことはお前が考えているほど生易しいものじゃない。おまえたちは、俺の血と汗で養われてるんだってことを忘れるな。こんな心身をすり減らす仕事は、俺にし

シュトラウス家 略年表

- 1750年頃 ハンガリー生まれのユダヤ人ヨハン・ミヒャエル・シュトラウスがロッゲンドルフ伯爵家の従僕としてウィーンに移住。キリスト教に改宗し壁紙職人として自活。
- 1790年代 ヨハン・ミヒャエルの次男フランツ・ボルギアス、レオポルトシュタットで居酒屋奉公、やがて自店「聖フロリアン」を持つ。
- 1801年 8月30日、アンナ・シュトラウム、居酒屋の娘としてウィーンに生まれる。
- 1804年 3月14日、ヨハン1世、フランツ・ボルギアスの長男として誕生。
- 1808年 フランツ・ボルギアス、ワイントラウベン通りに転居。同地に居酒屋「よき羊飼」を開店。
- 1814年 9月から翌年6月までウィーン会議。ウィナ・ワルツ隆盛。
- 1815年 フランツ・ボルギアスの妻バルバラ病死。フランツは再婚。
- 1816年 居酒屋の経営不振を苦にフランツ・ボルギアス、ドナウ川に入水自殺。
- 1817年 ヨハン1世、製本屋の徒弟奉公に出されるがまもなく奉公先を辞め、楽師ポリシャンスキーからヴァイオリンを学ぶ。
- 1819年 ヨハン1世、ダンス楽団パーマー・オーケストラの一員となり、3歳年上の先輩ヨーゼフ・ランナーと出会う。ランナーは同団を辞めて独立、ヨハンも従う。
- 1825年 7月11日、ヨハン1世、アンナ・シュトラウムと結婚。10月25日、長男ヨハン2世誕生。
- 1827年 8月20日、次男ヨーゼフ誕生。ヨハン1世、ランナー楽団から独立、シュトラウス楽団を持つ。
- 1829年 長女アンナ誕生。
- 1831年 次女テレゼ誕生。



ヨハン1世の音楽によって「大ガロップ」を踊る人々

かできないことだ。子どもたちは銀行家か弁護士にしたいと思っている」それは夫の本音だったし、彼なりの子どもたちへの愛情だったとは思いうたしに、プロの音楽家の世界は厳しい。生半可な者では勝ち残れない。でも、子どもたちには確かな才能がある。それ

れを何とかして伸ばしてやりたい。ヨハンは10歳ともなると近所の子どもたちにピアノを教えるようになり、その月謝を貯めて、自分のヴァイオリンを買った。彼は、父親のようにヴァイオリンを弾きながら指揮もするウィーン・ワルツの音楽家になりたかった

「ふざけるな。誰がヴァイオリンを習うていいと言った！ アンナ、おまえがやらせたのか。俺の言いつけに背いて、よくもこんなことをさせやがって。俺を舐めるなよ」夫は息子を庇おうとするわたしにも拳を振り上げた。嵐が去ったあと、わたしは息子を抱きしめてしばらく涙に暮れていたが、そのうちにこんこんと闘志が湧き上がってきた。

わたしは母方の祖父マルティン・ジャン・ローバーはルクセンブルクの出身で、理髪師から居酒屋主人となった男だったが、この祖父のことを、決闘事件に巻き込まれたためにウィーンに逃れてきた、スペインの大公に仕立て上げたのだ。子どもたちはわたしの言葉をつゆ疑わず、自分たちはスペイン大公の末裔なのだと思われ、その名譽を汚すまいと、誇りある行動を心がけてくれた。だから、これくらいの作り話は許されてもいいのではなからうか。

「こんなばばはシュトラウス1世、おはようシュトラウス2世」

1844年10月15日、レストラン、ドゥマイヤー亭にはその晩6時から催される息子のデビュー演奏会を聴きに大勢の聴衆が詰めかけていた。19歳の誕生日を10日後に控えた息子は華麗な自作自演で彼らを魅了した。きわめつきは、最後に演奏した夫の作品「ローレライラインの歌」だった。自分たち兄弟とこのわたしを捨てた父親の作品

を敢えてデビュー演奏会で取り上げた息子の切ない心情に、人々は熱い涙を流した。息子の完全な勝利だった。夫、いや、45年に正式に離婚が成立したので元夫だが、彼も負けてはいなかった。父親と息子はウィーン・ワルツの王者の座を賭けて覇を競う。ウィーンの人々は、やんやとこの親子対決を観戦し、「おやすみランナー、こんばんはシュトラウス1世、おはようシュトラウス2世」という有名な言葉を生んだ。1848年、メッテルニヒ宰相に対する革命の火の手があがった。この保守反動宰相の側について「ラデツキー行進曲」を書いた元夫はメッテルニヒの失脚とともに人気が凋落する。失意の彼は、翌49年ロンドンへ演奏旅行に出掛け、くたびれ果ててエミリーエの家に戻った。すると、旅行で疲労困憊した体に、エミリーエの娘の猩紅熱が感染した。



25歳ころのヨハン・シュトラウス2世

1844年7月9日、長男ヨハンはドレクスラー先生から「通奏低音の授業修了」の証明書を受けとられた。理論はこれでよし。あとは実技だ。わたしは、宮廷歌劇場のヴァイオリニスト、アン・ト・コルマンにヨハンのヴァイオリン演奏技術の仕上げを頼んだ。こうして楽団旗揚げの準備はほぼ整った。ただ、ヨハンは未成年だったの

息子のデビューのために恥をしのぶ

でランナー楽団とシュトラウス楽団が人気を二分することで保たれてきたウィーン・ワルツ界のバランスが崩れ、ランナー楽団の分までオファーを受けることになったシュトラウス楽団に、大きな負担がかかることになった。夫はますます多忙を極めて心身を疲弊させ、その疲弊の癒やしを、エミリーエとの家庭に求めた。わたしと子どもたちのところへは音信が絶えた。

で、保護監督者の同意がないとプロ音楽家としてスタートを切るのには難しい。わたしは息子に説いて、新楽団の規模、活動場所、演奏予定曲目、収支見込みなどの概要を簡条書きにし、品行方正な活動を誓う一文を添えた申請書類を作成させ、監督官庁に楽団創設を申請した。気がかりは、この申請を知った夫が息子の計画を妨害することだった。未成年の息子の父親として、異議申し立てをすることが可能な立場なのだ。わたしは、恥をしのんで捨て身の作戦に出た。

自分から離婚の申請をしたのだ。これにより、ウィーンの人々は、わたしが夫から遺棄された哀れな妻であることと、息子がその父親に対抗して今新たな楽団を起こそうとしていることを知り、どちらの側につくかが大きな話題となった。離婚申請作戦は奏功し、当局は我が家の事情を察して、息子の申請を受理してくれた。

■シュトラウス家 略年表

- 1832年 ヨハン2世の最初の作曲作品「最初の楽想」を母アンナが書きとり保存。
- 1834年 三男フェルディナント生まれ、同年に死す。ヨハン1世、賭博罪で罰金刑。
- 1835年 3月15日、四男エドゥアルト誕生。5月18日、ヨハン1世の愛人エミリーエに長女誕生。以下計7人の庶子誕生。
- 1843年 4月14日、ヨーゼフ・ランナー没。
- 1844年 10月15日、ヨハン2世ドゥマイヤー亭でデビュー演奏会。
- 1845年 ヨハン1世、アンナ夫妻離婚成立。
- 1846年 ヨハン1世、宮廷舞踏会音楽監督に就任。
- 1848年 3月革命。ヨハン1世、「ラデツキー行進曲」作曲。
- 1849年 9月25日、ヨハン1世没。ヨハン2世はシュトラウス楽団を自分の楽団に吸収。宮廷舞踏会音楽監督の称号は得られず。
- 1852年 ヨハン2世、宮廷舞踏会で初めて演奏。ドイツ、オランダ、ベルギーへ演奏旅行。
- 1853年 急病のヨハン2世に代わり技師だった弟ヨーゼフがシュトラウス楽団を指揮。
- 1855年 エドゥアルト、ハーブ奏者としてデビュー。
- 1856年 シュトラウス楽団、パブロフスクで最初の演奏会開催。
- 1862年 8月27日、ヨハン2世、銀行家トデスコ男爵の内妻イェッティ・トレプツと結婚。
- 1863年 ヨハン2世、念願の宮廷舞踏会音楽監督に就任。
- 1866年 オーストリア、普仏戦争に敗北。
- 1867年 ヨハン2世、「美しく青きドナウ」作曲。ウィーン男声合唱協会により初演。
- 1869年 ヨハン2世とヨーゼフ、「ピツィカート・ポルカ」を合作。

9月25日、わたしと子どもたちが駆けつけたとき、エミリーエが家財を持ち去ってがらんとした家の粗末なベッドの上で、かつて一世を風靡した「ウィーナ・ワルツの父」は、冷たい骸となっていた。45歳だった。

ヨーゼフとエドゥアルトを楽団に引き入れる

ヨハンは、父親の作ったシュトラウス楽団を自分の楽団に吸収し、名実ともに「ワルツ王」と呼ばれるようになった。ただ、フランツ・ヨーゼフ皇帝の覚えがあまりめでたくなくて、父親の持っていた宮廷舞踏会音楽監督の称号は他者に奪われてしまった。それでも1852年には称号無しのまま、宮廷舞踏会で初めて演奏し、ドイツ、オランダ、ベルギーへの長期演奏旅行も成功させた。

しかし、激務は急速にヨハンの体をむしばんでいった。医者からは長期休養が必要と進言されたがそれも出来ずにいるうち、1853年7月、カフェ・シュベールでの演奏会を前にしてヨハンは急病に倒れてしまった。

わたしは前々から、シュトラウス楽団の維持はヨハン一人の手に余ると考えていたので、次男ヨーゼフに兄を助けてやってほしいと頼み込んでいた。人前に出る事を好まないヨーゼフは製図が得意で数学的な頭を持っていたの

で、工芸学校を出て技師となっていたのだが、この子も小さい頃からピアノを習い、かなり達者に弾けた。「ヨーゼフ、おまえが兄さんの代わりに指揮をするのよ。シュトラウス家のためにはそれしかないの」やさしいヨーゼフは兄のピンチを見捨てることができず、この母の頼みを聞き入れてくれた。そして、これを機に、指揮者、作曲家に転身してヨハンの片腕となってくれた。

ヨーゼフは「オーストリアの村燕」「天体の音楽」などのワルツや、「鍛冶屋のボルカ」、ヨハンとの合作の「ピツィカート・ボルカ」など全部で280曲ほどの作品を書いたが、それらは詩情豊かで、描写力に優れ、機知とユーモアにも富んでいて独特の魅力がある。

こうしてヨーゼフを音楽家にしただけでは、わたしもヨハンもまだ安心できなかった。シュトラウス楽団の活動規模は広がり、もう一人、身内の協力者が必要となっていたのだ。

「ハーブ奏者がいれば、うちの楽団のレパートリーが広がるんだがなあ」ヨハンのほやきを聞いたわたしは、四男エドゥアルトにハーブを学ばせ、1855年2月にこの子をシュトラウス楽団のハーブ奏者としてデビューさせた。エドゥアルトは69年に代表作となるボルカ「テープは切られた」を発表して世評を確立する。

けれども、この子にだって他にやりたいことはあったわけで、強引に音楽家

にしてしまったこの母と兄に対して生涯複雑な思いを抱き続けたことは間違いない。その無念さの総決算が、1907年の、シュトラウス楽団の全楽譜焼却事件なのだ。思い切ったことをしてくれたものだが、彼の胸中を思うと、責めることはできない。

ともあれ、弟2人の応援を得て3兄弟で運営するようになったシュトラウス楽団はますます発展し、1856年にはロシアの鉄道会社と契約を結んで、夏毎にパロフスクの駅舎で演奏会を開く、という大きなビジネスも手掛けるようになった。

ヨハンの選んだ意外な花嫁

気がつけば、ヨハンは独身のままだつしか30代半ばに差し掛かっていた。世間では、ワルツ王が一体どんな花嫁を迎えるのか、かまびすしく取りざたする。わたしの望みは、家柄のよい上品なお嬢さんと結婚してくれることだったとい

うのに、1862年8月27日、ヨハンは銀行家トデスコ男爵の内妻イエッティ・トレフツと結婚してしまっ

た。ヨハンより7つも年上のイエッティは非常に人気のあった歌姫で、トデスコ男爵の内妻に納まるまでには何人かの私生児ももうけていた。太っ腹な



ヨハン2世と最初の妻、イエッティ

オーストリアの落日、神のわたしへのお召し

1866年、オーストリアは普仏戦争に負け、ウィーンに暗いムードが漂っ

トデスコ男爵は息子と彼女との仲を知ると快く2人の結婚を認め、持参金までイエッティに持たせた。でも、わたしの忤怛たる心中を察して欲しい。ところが、息子の選択は大正解だったのだ。劇場にも社交界にも太いパイプを持つイエッティは、息子の活動範囲を格段に広げ、息子を上層へと押し上げてくれたのだ。息子が夢にまでみた宮廷舞踏会音楽監督の称号も、イエッティが宮廷に働きかけてくれたおかげでもたらされた。しかも、息子の演奏旅行中に彼女と生活を共にしてみると、これがまた気配り上手で心やさしい、よくできた嫁だった。



ヨハン2世と3番目の妻、アデーレ

で亡くなった。よほど寂しかったのか、ヨハンはその半月後に出会ったアンゲリカという女優志望の小娘に熱を上げてしまい、5月にその小娘を妻とするが、数年後、アンゲリカは男と出奔する。いなくなってくれて幸いだった。だつて、そのあとヨハンは、28歳年下のアデーレ・ドイッチェを3度目の妻に迎えて、幸福な晩年を送ることができたのだから。

1899年6月3日、肺炎を悪化させたヨハンは、アデーレの腕の中で73歳の生涯を閉じた。この3人目の嫁は1930年まで生きて、ヨハン亡き後のさまざまな実務を完璧に処理してくれた。

3人の息子のうち、ヨハンは実子を持たなかったその子孫はいない。次男ヨーゼフは一人娘カローリーネのみ遺した。

四男エドゥアルトの長男はヨハンと名づけられ、セミクラシックの指揮者、作曲家として活動し1939年に没し

た。エドゥアルトの次男ヨーゼフは自動車工場経営者となったが、その長男エドゥアルトは指揮者、作曲家となり、演奏旅行で日本へもたびたびお邪魔していたから、年配のクラシック・ファンの中には、もしかしたら、指揮者エドゥアルト・シュトラウスの名をご記憶の方もいらっしゃるかも知れない。

1969年4月6日に59歳で没したこのひ孫エドゥアルト2世が、今のところ、わがシュトラウス家の最後の音楽家である。



ウィーン中央墓地にあるヨハン・シュトラウス2世の墓

天国からの追記

これから先は、天国のわたしの目に

■ シュトラウス家 略年表

- 1870年 2月23日、アンナ・シュトラウス没。7月22日、ヨーゼフ・シュトラウス没。
- 1871年 2月10日、ヨハン2世のオペレッタ第1作「インディゴと40人の盗賊」がアン・デア・ウィーン劇場で初演。
- 1872年 エドゥアルト、兄から譲られた宮廷舞踏会音楽監督に就任。ヨハン2世、ボストン演奏旅行、帰路、ドイツでハンス・フォン・ビューローとヨハネス・ブラームスに会う。
- 1874年 4月5日、ヨハン2世のオペレッタ「こもり」をアン・デア・ウィーン劇場で初演。
- 1878年 4月7日、イエッティ没。5月28日、ヨハン2世、アンゲリカ・ディトリヒと再婚。
- 1882年 アンゲリカ、愛人と出奔。ヨハン2世、アデーレ・ドイッチェと同居を開始。
- 1884年 ヨハン2世、デビュー40周年。ウィーンの特別市民に推される。オペレッタ「ジプシー男爵」に着手。
- 1887年 8月15日、ヨハン2世、アデーレと正式結婚。
- 1888年 ヨハン2世、パイロイト祝祭劇場訪問。
- 1889年 ヨハン2世の「皇帝円舞曲」がベルリンで初演。
- 1892年 ヨハン2世、ワルツ「もろびと手とり」を作曲、3月27日に楽友協会で初演してブラームスに献呈。
- 1894年 ヨハン2世のデビュー50周年が世界中で祝われる。
- 1899年 5月22日、ヨハン2世、宮廷劇場で「こもり」序曲を指揮。6月3日没。
- 1900年 エドゥアルト、引退表明。
- 1901年 エドゥアルト、シュトラウス楽団を解散し、宮廷舞踏会音楽監督を辞任。
- 1907年 エドゥアルト、シュトラウス楽団の楽譜をすべて焼却。
- 1916年 12月28日、エドゥアルト没。
- 1930年 アデーレ・シュトラウス没。

(萩谷由喜子 作成)

貴族が社会を牽引していた18世紀は去り、19世紀は庶民の音楽が芽生え始めた。ウィーンの市庁舎前の公園の一角にヴァイオリンを手に持つヨーゼフ・ランナー（1801〜43）とヨハン・シュトラウス1世（1804〜49）が並んで立っている銅像がある。

19世紀初期にウィンナ・ワルツを萌芽させた人物である。ともに自力で音楽を学び、パーマー楽団に所属していたが、一緒に独立した。1820年頃はレントラーやドイツ舞曲といった民俗舞曲から「ウィーンの舞曲」としてワルツが発展する時代であった。

初期の編成はヴァイオリン2本、ヴィオラ1本、コントラバス1本であった。きわめて小さな編成である。そのうちに聴衆の要求に応じて編成の面でも大きくなった楽団は2分して、ランナー楽団とシュトラウス楽団になる。より多くのレストランや居酒屋に行けるようになった。どちらの楽団も人びとの心を浮き立たせ、飛躍させる効果があった。

次第にシュトラウス楽団が売れ始め、初めは温厚であった2人に関係にも影が忍び寄り、ついに1828年には「ワルツ合戦」と呼ばれる仲たがいが生じるのである。ヴァイオリンの弓や譜面台が飛んだというのだが、乱闘が起きたという証言はない。

ただし、街を揺るがすほどの論争だったのであろう。当時ウィーンにいた19歳のシヨパンは「ウィーンでは太陽は登りたがらない。ランナーとシュトラウス、それに彼らのワルツが、すべてを陰らせてしまふのだ」と述べている。

「夢想家のランナーと情熱家のシュトラウス」と呼ばれ、ウィーンの聴衆は二分され、各々のファンは自らの長を応援した。そして、ワルツの隆盛とともに謝肉祭には多くの舞踏会が開かれた。1824年に宮廷は舞踏会を開くことになり、音楽監督にはランナーが選ばれた。

ランナー & シュトラウス1世

～ウィーンのワルツを形作った2人～

文 若宮由美
日本ヨハン・シュトラウス協会理事
text by Yumi Wakamiya

ヨハン・シュトラウス父 (1804~1849)
ウィナー・ガイゲン
四重奏団
収録：2003年
(Winton Records)
WG-030915-17
※輸入盤



タンツ・シグナーレ
ラルフ・クリング (指揮)
アルト・ヴィーナー・シュトラウス・アンサンブル
収録：2003年
(edition hera)
LC-02927 ※輸入盤



ヨーゼフ・ランナーのウィーン舞曲
アンサンブル・ウィーン
収録：2004年
(VMS/Zappel Music) VMS-134
※輸入盤



「夢想家のランナーと情熱家のシュトラウス」と呼ばれ、ウィーンの聴衆は二分され、各々のファンは自らの長を応援した。

文 若宮由美
日本ヨハン・シュトラウス協会理事
text by Yumi Wakamiya

ヨハン・シュトラウス1世の「ラデツキー行進曲」



左上 1848年、独立の機運が高まっていた北イタリアの鎮圧に成功したオーストリアの老将、ヨーゼフ・ラデツキー伯爵 (1766~1858)

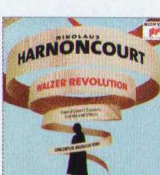
1848年、ヨーロッパにおいては歴史的な波が訪れる。それは「諸国民の春」と呼ばれるものである。まず2月にフランスにおいて王政を打倒する革命が起こり、翌月にはオーストリアでもいわゆる「3月革命」が勃発した。その結果、14年のウィーン会議で外相を務め、長年行政を牛耳ってきた74歳のメッテルニヒが失脚し、民衆は新しい政権を喜んだ。

しかし、その間にオーストリア支配下の各地で独立運動が起こり、北イタリアもその一つであった。ヴェルディが戦いに参加したもののこの戦いである。対するオーストリアは、当時82歳のヨーゼフ・ラデツキー將軍を総大将としてイタリアに送り、7月25日にカストッツァで大きな戦火を残し、1849年3月23日にナヴァラの戦いで勝利して、ロンバルディアを取り戻したのである。

ヨハン・シュトラウス1世は1846年から宮廷舞踏会音楽監督であった。当然、体制側であったが、その頃は自由思想に共感を示し、「学生軍団行進曲」op.223や「自由行進曲」op.226を作曲している。革命運動は次第に先鋭化してゆき、戸惑ったのはヨハン1世やウィーンの大多数の市民であった。

そのような中で「ラデツキー行進曲」

オーストリア軍の祝勝のために書かれたこの行進曲は大成功を収め、ヨハン1世は不動の地位、つまりはオーストリア体制の第一人者と認められたのである。



ワルツの革命
ニコラウス・アーノンクール (指揮)
ウィーン・コンツェントウス・ムジクス
収録：2012年 (ソニー) SICC-1535



ニューイヤー・コンサート2020
アンドリス・ネルソンス (指揮) ウィーン・フィル
収録：2020年 (ソニー) SIXC-29 ※BD

この曲は大成功を収め、ヨハン1世は不動の地位、つまりはオーストリア体制の第一人者と認められたのである。ピアノ版の表紙に「偉大な將軍と：帝室陸軍に敬意を表して捧げる」と書き記されている。

行進曲は主要部にトリオを挟み込む形で書かれている。そして、トリオ部分には民謡（古いウィーンの踊り）（いわゆる「ティネルの歌」）の旋律が引用されている。（古いウィーン踊り）は、兵士たちがイタリアからウィーンに帰還した際に歌っていたといわれる曲で、3拍子の旋律が行進曲に編曲されている。

1918年に帝政が廃止され、現在のオーストリア共和国になっても「ラデツキー行進曲」は国家を象徴する曲であり、国家的な行事や式典で演奏され続けている。その始まりは38年にナ

チス・ドイツによるオーストリア併合があり、国を奪われたオーストリア人の不満をためないようにシュトラウス家のワルツやポルカを利用したナチスの戦略にある。

シュトラウス家の出身はユダヤ系であることは明らかであるのに、出生を検査し、細工までしてシュトラウスの音楽を守った。そして、有名なウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートで、この曲がアンコールの最後の曲として演奏され、その中で拍手が打たれるには、ボスコフスキーが指揮者を務めた第2次大戦後のことである。

ウィーン・フィルが演奏するためには、オーケストラレ・シヨンを要する必要がある。最初のシュトラウス楽団は編成の小さなものだったからであり、そうした変更が各パートで何度も行われ、それと同時にヨハン1世の原典譜は消失したとみられていた。

しかし、1978年に断裁寸前であった楽譜の山の中からヨハン1世の原典版が発見された。それを発表したのが、2001年のニューイヤー・コンサートの冒頭でアーノンクールが演奏したものである。

近年、ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートではナチス党員であったL・ヴェニンガー（1879〜1940）の編曲（1914）ではないかという点であった。それを精査し、いまのオーケストラレ・シヨンがヴェニンガー版とは違うものとして、2020年のネルソンスのニューイヤー・コンサートで示した。

父と息子との葛藤、 広がっていくビジネス

ヨハン・シュトラウス2世(1825~99)は「ワルツ王」と呼ばれるが、幼い時には複雑な家庭環境の中で育った。父と母は次第に疎遠になっていき、父は息子を音楽家にはしないと考えて、まったく子どもの成長にも無関心であった。だが、息子はついに1844年10月15日にデビューをすることになる。

父から圧力を受けていた飲食店はこぞつて出入り禁止をするなか、新興のカジノ・ドームマイアーが場所を提供してくれた。それは市内から離れたシェーンブルン宮殿のそばにあり、ワルツ(記念の詩) op. 1などが初演された。

新聞は「こんばんはシュトラウス1世、おはようシュトラウス2世」と評した。かくして父と子は対立状態が続く、体制側の父と反体制側の息子という構図は続く。(統一の調べ) op. 62 (1849)では序奏を持たないワルツが書かれている。

この構図に終止符が打たれたのは父の死によってである。1849年以後、分裂していたシュトラウス楽団はひとつになり、仕事は増えていった。そこで、弟たちも仕事に引き入れ、ますます家内興業の様相は深まっていく。当時、演奏の場は街中のレストランやビアホール、そして謝肉祭の時の職種ごとの舞踏会、屋外での祝祭など、多岐にわたった。

1854年には23歳の皇帝フランツ・ヨーゼフと16歳のバイエルン公妃エリザベットの婚礼にあたっては、(ミルテ

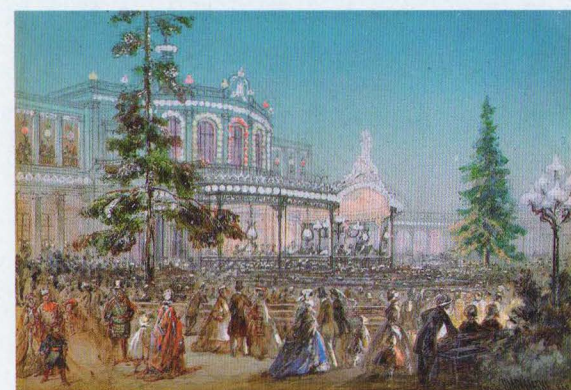
の冠) op. 154を献呈し、序奏ではオーストリアの皇帝讃歌と「バイエルンの歌」が盛り込まれた。

1856年、「ワルツ・ビジネス」の一環としてロシアのツァールスコエ・セロ鉄道会社と契約を結ぶ。この会社は、サンクトペテルブルク近郊のパヴロフスクという終点の駅に、ヴァクサル駅という鉄道の施設を作り、社交場とした。夏の間、ヨハン2世はシュトラウス楽団をヨーゼフとともにウィーンに残し、1人でロシアの管弦楽団を指揮した。ここでの契約金は莫大であった。パヴロフスクでの演奏は1865年まで10年にわたって続けられ、それに69年と86年を加えられた。

ロシアで発表された曲を、ウィーンでは別の題名で聴かせることもしばしばであった。それはワルツには珍しいが、ボルカウランゼーブル(クラップフェンの森) op. 336では元は(パヴロフスクの森)であった。

そして、今度のウィーン・フィルによるニューイヤー・コンサートでは(ニコ殿下のボルカ) op. 228が演奏されるが、同曲の1859年のロシア初演に対し、ウィーンに戻ってから60年2月13日にゾフィーエンバートにおいて開かれた、シュトラウス兄弟の慈善演奏会「モンスター・コンサート」で初めて奏された。

これにはヨーゼフ、エドゥアルトも加わり、3人そろっての50曲以上も演奏され、ヨハン2世にとっては幸せの絶頂というべき瞬間だったろう。ワルツとしてはヨハン2世の(治療針) op. 232と(判決) op. 233、ヨーゼフの(偶然) op. 85をはじめ、14曲が



パヴロフスクの駅の建物を使ったヨハン・シュトラウス2世の演奏会

演奏された。

音楽として聴いて楽しむワルツを！

1861年4月1日にデアナバートでコンサートワルツ(夢想) op. 253を初演した。シュトラウス楽団は業当初から舞踏会や巡業に比べて、コンサートでの演奏が多かったため、舞踏会で踊るためだけのものではなく、音楽として聴いて楽しむためのものを作った。こうとする意思があった。

この傾向は初めヨーゼフに見られ、(愛の真珠) op. 39 (1857)であり、序奏のテンポはゆっくりとしたもので、第1ワルツとともに踊るテンポの3/4拍子になる。その1年後、この形式をヨハン2世は(思考の飛翔) op. 215で取り入れた。序奏は2/4拍子で、第1ワルツで3/4拍子になる。しかし、これはワルツという記載だった。

それが(夢想)で初めてコンサートワルツと呼んだのだ。これはすぐウィーンの人々に受け入れられなかったが、後にはコンサートワルツとは名付けなくとも、1回目は聴くための回、踊るには2回目以降という方式がとられるようになった。

「傑作の時代」の名曲たち

ロシアでの毎年の仕事が途切れると同時に、ヨハン2世は「傑作の時代」に入っていく。1867年に(美しく青きドナウ) op. 314、(芸術家の生活) op. 316、1868年に(ウィーンの森の物語) op. 325、1869年に(酒・女・歌) op. 333を生みだしていく。とくに(ウィーンの森の物語)は「演奏会用のワルツ」であり、オーケストラの真ん中にツイターを配置し、序奏ではエンス河畔やシュタイアーマルクの民謡や舞踊をウィーン音楽と結び付け、第1ワルツではレントラー風のワルツに

戻ってくるのである。6月19日にフォルクスガルテンでの演奏会で初演されたのであるが、この時はワグナーの(ニュルンベルクのマイスタージンガー) (1868年6月21日ミュンヘン初演) も一部が演奏されている。

1870年1月にはウィーン楽友協会の建物で完成し、シュトラウス家は開場コンサートを1月15日に開くことになった。皇帝ヨーゼフ・フランツが出席している。兄弟3人が揃うと、誰が1番のワルツをとるに大きな問題になる。当然のように、ヨハン2世がワルツをとり、(楽しい人生) op. 340、ヨーゼフがボルカ・フランゼー(芸術家からご挨拶) op. 274、エドゥアルトがボルカ・マズルカ(氷の花) op. 55を初演した。

そして3月からシュトラウス家の演奏会が始まる。しかし、これが3人揃った最後の華々しい演奏会であった。

新たに組み込んだ オペレッタからの借用も

1870年7月22日に弟ヨーゼフが世を去る。ヨハン2世は大変なショックを受けてしばらくは仕事も手がつけられなくなる。この年はウィーン楽友協会のコンサートも始まったが、ヨハン2世は次第にダンス音楽から退き、オペレッタの作曲を始める。そして舞踏会にワルツなどが必要になった際はオペレッタからモティーフを借りて、舞曲にしていくのが多くなる。

(南国のばら) op. 388もそうした曲である。1880年10月1日に《女王のレースのハンカチーフ》をアン・デ



1882年、ワルツ「春の声」のソロ・パートを歌ったコロラトゥーラ・ソプラノ、ピアンカ・ピアンキ(本名：ベルタ・シュヴァルツ、1855~1947)。ウィーン宮廷歌劇場の名歌手として活躍した

ア・ウィーン劇場で初演し、11月7日にエドゥアルトが指揮するウィーン楽友協会の「日曜コンサート」で(南国のばら)は初演された。

1882年、(春の声) op. 410はまた別の謂れを持つ。リストと共演し、即興でまとめたものを、コロラトゥーラ・ソプラノ歌手のピアンカ・ピアンキによって3月1日にアン・デア・ウィーン劇場で歌われ、成功を収めた。これは短い序奏に3つのワルツが連なる。いまでも「皇室アルバム」(毎日テレビ)などのテーマ音楽として親しまれている。

1894年10月14日には「ヨハン・シュトラウスの50周年祝賀演奏会」がウィーン楽友協会で開催された。ヨハン2世はこの演奏会に出席した。その他、街中の名だたる娯楽場で、例えばフォルクスガルテン、クアロン、造園協会、

ニューイヤー・コンサート
1951~54
クレメンス・クラウス(指揮)
ウィーン・フィル
収録：1951~54年
(Eloquence)
4827363 (2CD)
※輸入盤、
Decca 原盤



ニューイヤー・コンサート2002
小澤征爾(指揮) ウィーン・フィル
収録：2002年
(ユニバーサル) UCCD-4891/92 (2CD) ※ Decca 原盤

ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団
~再建50周年記念コンサート・ライブ
アルフレート・エシュヴェ(指揮)
ウィーン・ヨハン・シュトラウス管
収録：2016年
(キングインターナショナル) KKC-9391 (BD)
※輸入盤、C Major 原盤



新ウィーン楽派によるヨハン・シュトラウス
2世のワルツの転写・リビジョン
(ベルク編曲「酒、女、歌」、
シェーンベルク編曲「南国のばら」ほか)
トーマス・クリスティアン・アンサンブル
収録：2009年
(MDG) 603 1590-2 ※輸入盤

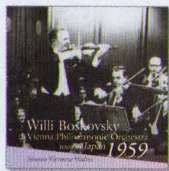


「春の声」がこだまし、「南国のばら」は咲いて、 「美しく青きドナウ」が今日も流れる…

~ヨハン・シュトラウス2世の名曲群~

文 若宮由美 ©日本ヨハン・シュトラウス協会理事
text by Yumi Wakamiya

ワルツという舞踊音楽を音楽史上最も輝かせた存在、ヨハン・シュトラウス2世。「ワルツ王」と呼ばれるのも当然か。誰もが知る優雅な旋律、心躍らせる快活なリズム、そしてウィーン独特の情緒(それが半ば幻想であっても)…。彼の類稀な感性とアイデアが生み出した名曲はあまりに多い。



1959年 ボスコフスキー、
ウィーン・フィルの日本ツアー／
シュトラウス・アルバム
ヴィリ・ボスコフスキー（指揮）
ウィーン・フィル
収録：1959年
（キング）KKC-2168



ウィーナ・ワルツ大全集
ロベルト・シュトルツ（指揮）
ベルリン響、ウィーン響
収録：1966、69、71年
（Sony）88985465542
（12CD）
※ Eurodisc 原盤

ヨハン2世のワルツ

「美しく青きドナウ」

文 若宮由美
日本ウィーン・シュトラウス協会理事
text by Yumi Wakamiya

ヨハン・シュトラウス2世のもっとも有名なワルツは「美しく青きドナウ」OP・314である。これはオーストリアの第2国歌と呼ばれるほど愛されている。しかし、その前に初演された前年のことに目を向けておこう。それは1866年のことである。

ロシアでの仕事も一段落したヨハン2世は、〈ウィーンのボンボン〉OP・307を1月28日のホーフブルク内の宮廷舞踏会場で初演する。パウリーネ・メッテルニヒ侯爵夫人（1836～1921）に献呈された。同夫人はパリ駐在大使の妻であり、ウィーンにおいては熱心な音楽家、つまりはワーグナー、リスト、グノーなどのパトロンであり、社交界の指導者であった。これは翌年のパリ万博に向けての先行投資であった。

翌1867年初め、ヨハン2世はオペレッタ（同曲は完成せず）を作曲して

いたが、ウィーン男声合唱協会とのかねてからの約束のため、急遽、この曲を仕上げた。

2月15日にディアナサールで初演されたワルツの歌詞は、協会関係者のヨーゼフ・ヴァイルのものであり、「楽しくやろうぜ、ウィーンのみんなー」という猥雑な内容だったが、前年の普墺戦争の負けに屈しないという、力強い愛国心の表明であった。

ただし、合唱曲の初演の直前になっても、題名は決まらなかった。「美しく青きドナウ」の題名は誰が決めたかもわかっていない。わかることは、ハンガリーの詩人カール・イシドール・ベックの「美しく青きドナウ」の一節を借用したことである。

ウィーンから眺めるドナウ川の色は濁った茶色で、美しい青色になるとはドナウ川がハンガリー平原に入っただけと言われている。ヴァイルの歌詞には

ドナウ川のさざなみを思わせる繊細な出だしから、悠々たる大河となる構成は、この曲が単に踊るためのワルツではなく、じっくりと耳を傾ける「演奏会用ワルツ」であることを示している。



ウィーンとは切っても切れない関係のドナウ川。ドイツ南西部のシュヴァルツヴァルトから東に向かい、10カ国を通過して黒海に流れ込む国際河川。フランツ・ヨーゼフの治世時、1862年に大規模な河川工事が行われた

そもそも「ドナウ」という言葉はない。

この合唱曲はさしたる成功を収めることもなかった。歌詞と長いコーダを取り去って、3月10日にフォルクスガルトンで管弦楽版を演奏するが、これも思うような成果は上げられなかった。その頃のヨハン2世はロシアの鉄道

会社との契約のこともめ、パリ万国博覧会に行くか、そのためにはどの楽団と契約を結ばよいかで心を迷わせていた。ヨーゼフもパリに行く気だったが、結局はビルゼ楽団と組んでヨハン2世が夫婦でこの仕事をこなすことになった。急いでヨハン2世はベルリンに行き、そこで契約を交わした後、パリに向かっている。

《美しく青きドナウ》はこの地で大成功が収め、逆輸入の形でウィーンに入ってきた。ヨハン2世自身はパリからロンドンへ向かっているが、ロンドンでも大成功を収め、プロムナード・コンサートを何十回と繰り返し演じた。ドナウ川のさざなみを思わせる繊細な出だしから、悠々たる大河となる構成は、この曲が単に踊るためのワルツではなく、じっくりと耳を傾ける「演奏会用ワルツ」であることを示している。

やがて1890年になって、「ドナウは青く美しい、谷や岸辺を抜けて静かに流れ行く」という格調高い歌詞となった。90年7月2日にゲルネルトの新しい歌詞で、前と同様のウィーン男声合唱協会が歌った。

同協会会員であるゲルネルトの詩は抒情詩となり、「オーストリア第2の国歌」と呼ばれるようになった。日本では堀内敬三が「はるかに滙てなく／ドナウの水は往く／美しい藍色のドナウの水は常に流れる」と訳される。

「弟ヨーゼフの方が私より才能がある」(ヨハン2世)

ヨハン・シュトラウス2世には、2歳下のヨーゼフ(1827〜70)と10歳下のエドゥアルト(1835〜1916)がいた。

最初、ヨーゼフは技師として働いていたが、父の死後、父と子で分散されていた活動が兄1人の肩にかり、そのせいで病気になる兄を助けるため家業を手伝うこととなる。1853年8月29日にはヘルナルス教会祭で「最初にして最後の曲」op.1というワルツを作るが、結局はシュトラウス楽団を率いるまでになった。

ヨーゼフが楽団の面倒をみるようになると、兄ヨハン2世は日常的なオーストラ演奏を自らが行わなくてはならなかった。いやいや音楽家になったよう



ヨハン1世の次男、ヨーゼフ(左)と四男、エドゥアルト・シュトラウス

ヨハン・シュトラウス2世の弟 ヨーゼフ& エドゥアルト の名曲 (ツィラー、 コムザーク2世、 レハール)

ウィーンの名士としてあまりに輝かしい存在だったヨハン2世。彼の名声を支えた2人の弟のことを忘れるわけにはいかない。とりわけ次弟ヨーゼフの音楽的才能は兄が認めるほどのものがあつた。そして19世紀後半から20世紀初頭のウィーンの音楽界を彩った他のワルツの作り手にも目を向けてみよう。

文 若宮由美 ◎日本ヨハン・シュトラウス協会理事
text by Yumi Wakamiya

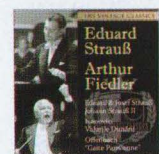
ち破るものとなる。舞踏会では献呈者、つまりこの場合は医学と関係のある題を付けるべきなのに、無関係な題名が与えられた。しかし、「フレンデン・ブラット」紙が「タイトルに比べれば、このワルツはずっとよい」と書いており、成功したことがわかる。

これは伝統的なワルツによるもので、序奏に5つのワルツと後奏がつく。序奏の部分に1931年の映画《会議は踊る》の中にも使われた。序奏の出だし部分に、上行する音形が緩やかに続き、静かな星空を思わせるのが、特徴である。ヨーゼフのワルツは、《ディナミデン》op.173や《うわごと》op.212など多数あるが、兄のものよりは、ロマン派の正当な交響曲を思わせるものが多い。

夏にはロシアに赴いて、鉄道の施設で演奏することが続いていた。演奏は



ヨーゼフ・シュトラウス:
ワルツ集
ウィリ・ボスコフスキー(指揮)
ウィーン・フィル
収録:1976年ほか
(ユニバーサル) UCCD-9935
※ Decca 原盤



ヨハン2世、ヨーゼフ、
エドゥアルト・シュトラウス:
作品集
エドゥアルト・シュトラウス(指揮)
東京響
収録:1958年
(ユニバーサル) TYGE-60014
※ TBS VINTAGE CLASSICS

ロシアの楽団であつた。ところが、1870年からは鉄道会社は別の指揮者(ビルゼ)に頼むことにしていた。焦ったヨーゼフは同年夏にそのビルゼがいたワルシャワに向かうが、指揮台の上で倒れ、それがもとで死去する。

ヨハン2世から仕事を引き継いだ
末弟エドゥアルト

末弟のエドゥアルトは、ヨーゼフの死後、ヨハン2世がオペレッタの作曲に精力を傾けるため宮廷舞踏会音楽監督の職も辞したので、それから30年間、その仕事を引き継ぐことになる。そして、1870年3月より新築された楽友協会で「日曜コンサート」を開き、ヨハン2世の作品もこの場を通して上演していく。

1873年にはウィーン万博がブラタリ公園で開催され、音楽パビリオンは日本の展示会場のすぐ近くにあり、ワルツなどを響かせた。そして、OP.300を発表した1901年にシュトラウス楽団を解散し、07年10月に楽団

が保有していた楽譜を大量に焼却処分した。

エドゥアルトの作品はワルツ(粋な心)op.75など多作であるが、今日演奏される作品は少なく、《テーブは切られた》op.45や《ブレイキもかけずに》op.238といったボルカ・シュネルが多い。

ワルツ王のライバル、ツィラー

エドゥアルトが辞めた宮廷舞踏会監督を務めたのが、ツィラー(1843〜1922)である。かつて蜜月だった楽譜出版者ハスリンガーとの関係が悪化し、ヨハン・シュトラウス2世と契約を結ばないようにキャンペーンをしていて、ツィラーは彼に担がれ、ワルツ王のライバルに仕立て上げられ、1863年11月21日にウィーンのデ・アナバードでデビューする。

しかし、当初はヨハン2世のライバルは弟ヨーゼフであり、徐々に実力を発揮したしたのはヨーゼフの死後である。そして1885年に有名な歩兵第4連隊「ホッホ・ウント・ドイチュマイスター」の楽長になる。

ワルツとして有名なのがレントラー風の《ウィーン娘》op.388。1888年にドレーアー・エタプリッスメントで歩兵第4連隊によって初演された。もう1曲は、90年の《ウィーン市民》



ワルツ「ウィーン娘」[ウィーン市民]がよく知られるカール・ミヒャエル・ツィラー

op.419は新築された市庁舎のために開かれたウィーン市舞踏会で初演。他に《王妃》op.177や《山の子どもたち》op.444、《古いウィーン》op.377がある。ツィラーは第1次大戦の戦禍により財産をほとんど失い、1918年に宮廷舞踏会監督もなくなった。

シュトラウス家とツィラーの話はさておき、1892年にウィーンの楽譜出版社グスタフ・レーヴィは「音楽の街から」と題するピアノ曲を発売した。ここにはウィーンで活躍した10名の作曲家の作品が収められている。

バイヤー(1852〜1913)、ツィブルカ(1842〜94)、ヨハン・ネボムク・フックス(1842〜99)、ローベルト・フックス(1847〜1927)、ヘルメスベルガー2世(1855〜1907)、コムザーク2世(1850〜1905)、ミレツカー(1842〜99)、アドルフ・ミュラー2世(1839〜1901)、ヨハン・シュトラウス2世、スッペ(1819〜95)である。当時、ウィーンで有名だった10名の作曲家をあげ、ワルツをはじめ、レントラー、ガヴォット、行進曲などを題名付きで収めている。

これは当時流行のやり方で、誰にでも演奏できる曲を買わせるように仕組まれている。ダンス音楽、軍楽、それに劇場音楽の分野の巨頭が集積しており「金の時代」を代表する面々である。

軍楽隊出身のコムザーク2世

この中のカレル・コムザーク2世は今年のウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートでも取り上げられる。ワル



ワルツ「バーデン娘」が有名なカレル・コムザーク2世

ツ(バーデン娘)は1898年夏にバーデン・バイ・ウィーンのクアパレスで初演された。序奏は行進曲で始まり、途中でシュランメル風の3拍子になり、ワルツへとつながっていく。

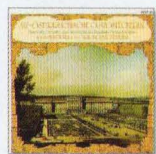
コムザーク2世は「ボヘミアの楽士」として有名で、父カレル1世から軍楽隊の基礎を学び、1882年にオーストリア帝国の首都ウィーンの第84歩兵連隊の軍楽隊長に就任した。なんととても軍楽に弦楽器を導入したことで有名である。

体調を崩し、バーデンに居を移したが、軍楽の活動も続け、その他の時間はバーデンでクア・オーケストラやウィーン楽友協会黄金ホールでの人気の演奏会を指揮した。他にも《新しき生活》op.210、《五月の魔法》op.306などのワルツ20曲以上を残した。

「銀の時代」の代表的作曲家、
レハール

「金の時代」から時代が下って「銀の時代」に活躍したフランツ・レハールはオペレッタの主要作曲家である。しかし、まだオペレッタ作曲家として有名になる前にはウィーンの社交界のために舞踏会を指揮していた。

1902年1月27日にメッテルニヒ侯爵夫人の舞踏会のために作曲され、自身の指揮でゾフィーエンザールにお



アルター・エスター
ライヒツェグー・テシュケリン
が演奏する
ツィラーのメロディー
マックス・シェンヘル(指揮)
オーストリア放送管
収録:1991年
(ドイツ) TECC-25093 ※原盤



カレル・コムザーク:
ワルツ集/マーチ集/
ボルカ集1
クリスティアン・ボラック(指揮)
ラズモフスキー響
発売:2001年
(Marco Polo)8.225175 ※輸入盤

いて披露された「金と銀」はその舞踏会のテーマだったという。ヨハン・シュトラウス2世の《ウィーンのボンボン》もそうだったように、長年にわたりメッテルニヒ侯爵夫人はウィーン社交界を牽引する人物として名高い。

1905年に《メリー・ウイドウ》を発表し、その中で歌われたハンナとダニロの二重唱《唇は語らずとも》は、新しいウィーン・ワルツを指し示した。帝国の崩壊後は、舞踏会といった19世紀の華やかな舞台は過去の中に埋もれていき、ノスタルジーのみが残った。

「メリー・ウイドウ」を発表した
翌年のフランツ・レハール



シュトラウス一族以外の

ウィenna・ワルツの作曲家たち

当然ながらシュトラウス一族のほかにも何人もの人気作曲家がおり、多数の作品が生み出された。しかもそれはウィennaにとどまらず、ヨーロッパ各地の作曲家がウィenna・ワルツに影響を受け、そのスタイルの流れを引く作品を書いている。

ウィenna・ワルツといえばシュトラウス一族がまっさきに思い浮かべられるだろうが、19世紀の音楽界において一世を風靡したこのジャンルには、当然ながらシュトラウス一族のほかにも何人もの人気作曲家がおり、多数の作品が生み出された。しかもそれはウィennaにとどまらず、ヨーロッパ各地の作曲家がウィenna・ワルツに影響を受け、そのスタイルの流れを引く作品を書いている。本稿ではそうしたシュトラウス一族以外の作曲家について触れてみたい。

ウィenna・ワルツを確立したランナー

ウィenna・ワルツの誕生と確立にあたって、ヨハン・シュトラウス1世とともに決定的な役割を果たしたのがヨゼフ・ランナー（1801〜43）である。ヴァイオリンを独学で習得した彼は、12歳の時にワルツや舞曲を演奏していた指揮者ミヒャエル・パーマーに誘われて彼の楽団の一員となった。

この楽団には遅れてシュトラウス1世も加わっていることは注目されよう。そして18歳の時にパーマーの楽団から独立して三重奏団を結成、その後しばらくしてやはりパーマーの楽団から離れたシュトラウス1世がヴァイオラ奏者

として加わって四重奏団となり、さらにメンパーを増やしてランナーの楽団はオーケストラへと発展する。

ランナーはこの楽団を指揮者として率いる一方、作曲家として新しいワルツのあり方を開拓していった。個別のワルツを単に続ける従来の形ではなく、序奏とコーダの間に幾つかのワルツを効果的に組み合わせた有機的な纏まりのある性格的作品としてのワルツを追求し、各作品には題名を付けていった。

ランナーの楽団ではやはり指揮者を務めたシュトラウス1世も、彼とともにこうした新しいスタイルを追求、こうしてウィenna・ワルツのスタイルは彼ら2人によって作り上げられていく。1825年にシュトラウスがランナーの楽団から独立して自らの楽団を結成して以後は、2人はライバルとして人気を



ヨゼフ・ランナー（1840年
美術史美術館蔵）

二分しながら、20年代後半から30年代にかけてウィenna・ワルツを発展させていくことになる。

2人を比較すると、シュトラウス1世がリズムの多様性やリズムの作り出す力感を求めたのに対して、ランナーは旋律や和声の濃やかな表現を重んじたといえる。一概には言えないものの、よりダイナミックな印象を与えるシュトラウスに比べると、ランナーのワルツは甘美でデリケートな情感を感じさせる。代表作の「ロマンティックな人々」など、センチメンタルで表出的な序奏はどこかオペラ的なものがあり、その後も情感豊かな旋律主題を持つワルツが続く。「宮廷舞踏会」「シェーンブルンの人々」などそうした彼の美質が現れた名品だ。

シュトラウスのライバル、フィリップ・ファールバッハ父子

1843年にランナーが死去、翌年にヨハン・シュトラウス2世がデビュー、そして49年のシュトラウス1世の死去により、ウィenna・ワルツの世界はシュトラウス2世による黄金時代を迎えることになるが、すでにこの時点でランナーやシュトラウス1世の活動に刺激されて、ウィenna・ワルツのジャンルには優れた才能が少なからず出現してい

フィリップ・
ファールバッハ2世



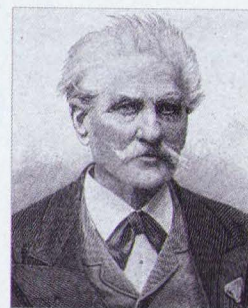
フィリップ・
ファールバッハ1世

時に父の楽団に加入、ほどなく指揮者兼作曲家として活動を始め、後年は楽団を継いでめざましい活躍ぶりを示した。その名声はウィennaのみならず広くヨーロッパ中に知れ渡り、パリ万博やパリのオペラ舞踏会にも招かれて演奏している。ヨゼフ・シュトラウスの死に際して作曲されたワルツ「シュトラウスの思い出」は、彼の美質が現れた情感豊かな曲である。

ファールバッハ父子の作品（父子のどちらの作かわからない曲も結構ある）は今日では演奏される機会がほとんどないが、いかにもウィenna氣質を思わせる粋な作風に当時の人気の秘密が窺い知れる。

ウィenna以外のワルツ作曲家たち

ウィenna・ワルツの人気はウィennaに



ヨーゼフ・グングル

ハンス・クリスチャン・
ロンビ



とどまらず、早くからヨーロッパ各国に広がった。これにはシュトラウス父子が積極的に楽団を引きつれて各地に演奏旅行を行ったことが大きく、その影響ですでに19世紀半ば前くらいからパリのフィリップ・ミュザール（1793〜1859）、ボヘミアのヨゼフ・ランナー（1802〜81）など、各国でワルツ作曲家が活躍するようになった。

ハンガリー出身のヨゼフ・グングル（1809〜89）は1843年にベルリンで自らの楽団を設立し、ベルリンのシュトラウスとも呼ばれた。49年にはアメリカにも演奏旅行を行うなど、国際的な成功を収めた音楽家だった。

一方、北欧のシュトラウスとの異名を持つのがデンマークの作曲家ハンス・クリスチャン・ロンビ（1810〜74）である。1843年にコペンハーゲンのチボリ公園設立とともにこの公園のホルの楽団の終身指揮者・作曲家となり、夥しい数のワルツ、ポルカ、ギャロップをこの楽団のために作曲した。



エミール・
ヴァルトトイフェル

て挙げられるのが、フランスのエミール・ヴァルトトイフェル（1837〜1915）である。フランスのワルツ王と呼ばれた彼は、シュトラウス父子のスタイルを踏襲しつつも、フランス風の粋なエスプリともいえるべき独自の色合いを添えた作品を残した。ワルツ「スケートをする人々」や「女学生」はとりわけよく知られている。



フベンティーノ・
ローサス



ヨシフ・
イヴァノヴィチ

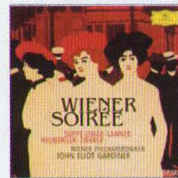
ルーマニアの作曲家ヨシフ・イヴァノヴィチ（1845〜1902）は軍隊隊長として活躍、多数のワルツや行進曲などを作曲したが、今日ではワルツ「ドナウ川のさざ波」のみでその名が知られているといつてよい。この曲にみられるどこか民族的な哀愁の漂う表現は、本家ウィennaのものとは一味違ったものを感じさせる。

ヨーロッパを超えて新大陸で花開い

た。とりわけ重要なのが、ランナー、シュトラウス1世に続く、第三の作曲家といわれたフィリップ・ファールバッハ1世（1815〜85）である。

ファールバッハは10歳の時にシュトラウス1世の楽団にフルート奏者として加わり、作曲も手掛け、シュトラウスの楽団でそのいくつかが演奏されたという。20歳の時に自らの楽団を結成、これはたちまち評価を得て、宮廷舞踏会にもしばしば出演するようになった。シュトラウス1世死後には彼の後を継いで宮廷舞踏会音楽監督に就任している。活動期間が長かっただけに、シュトラウス2世からライバルと見なされたほどの大きな人気を得た音楽家だった。

彼の息子のフィリップ・ファールバッハ2世（1843〜94）も12歳の



ウィーンの夜会
スッペ、レハール、ランナー、
ホイベルガー、ツィーラー作品集
ジョン・エリオット・ガーディナー（指揮）
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
（ユニバーサル）POCG-10253



ザ・ベスト・オブ・ロンビ
ロンビ作品集
ジャルダール・ベッリンカンビ（指揮）
チボリ交響楽団
（Naxos）8556843



カーレンベルクの村で
ファールバッハ作品集
ウィーン・ピーター・マイヤー・ゾリステン
ペーター・シュミードル（クラリネット）
デューター・フルーリー（フルート）
（カメラータ）30CM-411

たワルツの例としては、メキシコの作曲家フベントイノ・ローサス（1868〜94）の作品があり、ワルツ「波濤を越えて」は時を越えて親しまれ続けている。

ウィンナ・オペレッタの作曲家たち

ウィンナ・ワルツは19世紀後期にはオペレッタの重要な要素のひとつとなった。ウィーンのオペレッタを確立したのはフランツ・フォン・スッペ（1819〜95）だが、そこにワルツをふんだんに持ち込んで、いわゆるウィンナ・オペレッタのスタイルを決定づけたのは後期のヨハン・シュトラウス2世だった。そして以後多くの作曲家たちがワルツを軸に置くオペレッタを作曲するようになる。

このスッペとシュトラウスの時代がウィンナ・オペレッタ黄金時代で、この時期にこの2人と並ぶオペレッタの作曲家といわれたのが、「食食主」ガスパローネで知られるカール・ミレツカー（1842〜99）だった。さらに「小鳥売り」のカール・ツェラー（1842〜98）、「オペラ舞踏会」のリヒャルト・ホイベルガー（1850〜1914）な

どが活躍するが、このホイベルガーの「オペラ舞踏会」（1899）にみられるように、世紀末から20世紀前期にかけてのオペレッタは、失われつつある時代への郷愁のようなものが作品に漂うようになり、そうした雰囲気を出すのに劇中のワルツが重要な役割を果たすこととなる。もはやかつてのように単独でワルツを楽しむ時代ではなく、ウィンナ・ワルツは主にオペレッタの中で生き続けていくのである。

この時期は黄金時代に続くウィンナ・オペレッタの白銀時代ともいわれ、その代表的作曲家がフランツ・レハール（1870〜1948）だった。彼の「メリー・ウイドウ」はオペレッタ史上に輝く傑作で、その中のワルツにみられる芳醇さと憂愁が溶け合った響きは白銀時代のオペレッタの特質を如実に示している。

さらに「ワルツの夢」のオスカ・シュトラウス（1870〜1954）、ハンガリー出身では「チャールダーシュの女王」のエメリヒ・カールマン（1882〜1953）、チェコ出身では、「ドル王女」のレオ・ファル（1873〜1925）、「ポーランド気質」のオスカ・ネドヴァル（1874〜1930）、「白馬亭」のラルフ・ベナツキー（1884〜1957）らが白銀時代のウィンナ・オペレッタの伝統を継承、ワルツの伝統もそこで最後の輝きを放っていた。



ウィンナ・ワルツ集
行進曲 & ポルカ
ロベルト・シュトルツ（指揮）
ベルリン交響楽団、ウィーン交響楽団
（Sony）88985465542（12CD）



スケートをする人々
〜ワルトトイフェル作品集
ウィリー・ボスコフスキー（指揮）
モンテカルロ国立歌劇場管弦楽団
（ワーナー）WPCS-28038



レハール：ワルツ集
ウィリー・ボスコフスキー（指揮）
ウィーン・ヨハン・シュトラウス
管弦楽団
（ワーナー）WPCS-23025

文 許光俊 ©ドイツ文学
text by Mitsutoshi Kyo



ワルツのステップを描いた絵
(1816年)

ワルツはなぜ3拍子なのか

私が何を言いたいかというと、西洋音楽における3拍子とは、イチ、ニ、サン、が同等なのではなくて、強いイチがあつて、それに引きずられて、ニ、サン、が生じるのだ。そして、このような3拍子は歩くための拍子ではないのだ。



ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756~91)
バーバラ・クラフト画

点リズムや流れるような下降音型を持ち、バロックのフランス風序曲の影響が見える。フランス風序曲とは、要するに王様が堂々と登場するのをイメージした音楽と考えてよい。豪華な衣服を着た王様が家来を引き連れて姿を現す。だから、ティンパニが打つ付点リズムの重々しい2拍子。だが、モーツァルトはそんな荘重な序奏を書いてから、軽快な3/4拍子の快速部分へとつなげた。まるで重たいかつらを取って踊り出すみたいだ。古めかしい序奏と、モダンな主部というコントラストだ。

■祝祭的な空間での踊り

古典派の交響曲では第3楽章としてはメヌエツトが置かれる。3/4拍子の舞曲である。先ほど挙げたモーツァルトの40番などは例外で、これが始まると、どこかくつろいだ雰囲気になる。ことに古楽器演奏の時代が到来するまでの演奏では、古楽器の奏者たちは、これが本来踊るための曲、それも決して上品なものではなく、民衆的な踊りだったことを示すような演奏を行うことがしばしばある。

ワルツもまた、メヌエツトと同じように本来は決して高級な踊りではなかった。南ドイツの民衆由来であり、しかも身体をくっつけて踊るのが下品と見なされた。西洋の踊りというところ、社交ダンス、つまり抱き合つて踊るというイメージが流布しているが、いいえどうして、ひとりひとりが踊るか、せいぜいのところ、手をつないで踊るのがもともとの姿なのだ。リュリのオペラ「アテイス」復活上演などを見ると、それがよくわかる。胸元の開いたドレスの女性が男の腕に抱かれて…なんというのは、もつとあとの時代のこと。ただし、である。踊りが踊られるのは、ある特別の祝祭的な空間、時である。各種の祭や結婚式、または、酒場のようにアルコールによつて人々の心が浮き立った場所において踊りは踊られたのである。そこでは通常のルールや限界が破られるからこそ、祭なのである。恋はしばしば踊りの場と結び付けられていた。踊りの場合は、男女が知り合い、関係を深める場でもあった。2拍子のように安定的でない3拍子はそのためにはかつこうのBGMだった。メヌエツトよりもゆつくりしたワルツは、なおさらよかった。速度が速ければ、踊りの身体性が強まる。男女が目を見つめ合ったり、手を握った手、腰を抱いた手に



イギリスの画家ウィリアム・ホガースが1745年に描いた舞踏会。男女は密着していない

西洋の舞曲には、2拍子系、3拍子系、4拍子系など実にたくさん種類がある。しかも、おのおのの舞曲が、時代とともに拍子を変えたり、性格や特徴に変化を起したりしている。だが、いずれにせよ3拍子系の舞曲は多い。ワルツ、メヌエツトはもとより、サラバンド、クーランツ、シチリアーナ、レントラー…。なぜ3拍子で踊りたいのか？

識しないようにしたほうが歩きやすい。つまるところ、私が何を言いたいかというと、西洋音楽における3拍子とは、イチ、ニ、サン、が同等なのではなくて、イチが強いということ。ニ、サン、はおまけだということ。イチの子分だということ。まずはそれだ。強いイチがあつて、それに引きずられて、ニ、サン、が生じるのだ。そして、このような3拍子は歩くための拍子ではないのだ。

■踊りは不安定な動き

では、何のため？ 踊るためだ。踊りは、人間の通常の生活のために必要な行為からはみだしている。踊りのためには余剰のエネルギーが必要だし、踊りは余剰の運動なのだ。その余剰の象徴が3拍子なのだ。

そして、踊りとは不安定なものである。それは通常の人間の動きよりも、大きかったり、速度があつたりする。片足で立ったり、飛んだりする。

3拍子がどれほど鮮烈な効果を持つか。たとえば、モーツァルトの交響曲第40番。焦燥感がある第1楽章は2/2拍子だ。疾走するような第4楽章も同じく2/2拍子だ。が、それらには含まれている第2楽章は6/8拍子、3/4拍子という3拍子系である。3拍子にすることで不安定なゆらぎ、迷い、どっちつかずの感じがくつきりとなる。

交響曲第39番はそれとは違う設計を持つ。第1楽章は長く堂々たる序奏を持つが、これは2/2拍子だ。付

そつと力をこめるためには、速すぎない踊りが好適だった。

■身体性が薄いベートーヴェン

チャイコフスキーは、交響曲第5番の第3楽章でワルツを用いた。また、第6番「悲愴」の第2楽章では5拍子の変則的なワルツを書いた。彼は、ワルツ、あるいは3拍子が揺れ動く不安定な音楽であることをよく知っていた。同じような不安定感、バレエ諸作品や、オペラ「エフゲニ・オネーギン」の



ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827)
Joseph Willibrord Mähler 画
1815年

ワルツにもよく表れている。逆に、ベートーヴェンが書く3拍子は、そこからはるか隔たっている。交響曲第9番のスケルツォ楽章は確かに3拍子なのだが、きわめて快速に演奏するように指示されているので、指揮者は普通の3拍子のように振らず、むしろ2拍子のようなのだ。

また、「英雄」交響曲では、3拍子が使われることが多い第2楽章が葬送行進曲だから、第1楽章が3拍子となっている。その第1楽章をフルトヴェングラーのような人はゆつたりめのテンポで雄大に演奏したし、その魅力が独特なことは認めるけれど、本来は、アレグロ・コン・ブリオ、つまりもっと速めの生き生きとした精力的な音楽が構想されていたはずだ。そして、そのように演奏したならば、強弱弱という3拍子らしい拍節感をもっと強調された音楽として響くのである。

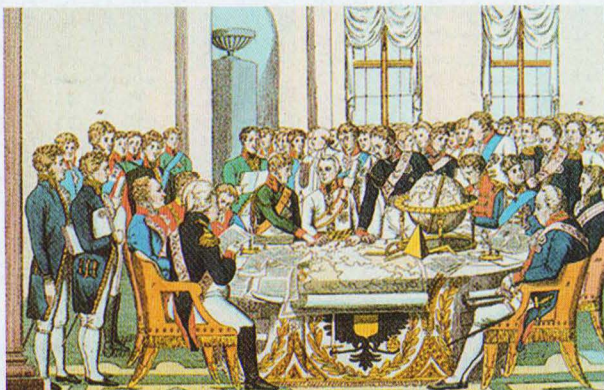
ただし、この音楽で踊りたくなる人はいないだろう。ベートーヴェンの3拍子は、身体性が薄くなっている。踊れる3拍子を書いたのは、バッハ、チャイコフスキー…、踊れない3拍子を書いたのはベートーヴェン、ブルックナー…と考えるのもおもしろい。

ウィーン会議開催!

というわけで、「会議は踊る、されど進まず」の名言句で有名なウィーン会議から話を始めよう。19世紀初頭、フランス革命の精神である「自由・平等・友愛」を錦の御旗に掲げてヨーロッパ中を戦闘状態に巻き込んだナポレオンが、1814年について失脚。旧弊な体制の象徴として幾度となく戦を仕掛けられ、広大な領土のそこかしこを狙われてきたオーストリアのハプスブルク家は、ここで一挙に面目を施そうとする。

その表れこそ、帝都ウィーンで国際会議を開くと同時に、会議に集まってきた各国の君主や政治家に、ハプスブルク家の文化力の素晴らしさを見せつけようというもの。結果、1814年から15年にかけて催されたのがウィーン会議である。ただし、ナポレオン憎しという点だけで一致していた各国の利害は、領土の再配分等をめぐって紛糾し、昼間の会議は遅々として進まない。それに比べて、舞踏会をはじめとする夜のアトラクションは活況を呈し、先ほどのような揶揄の言葉が生まれた。

という次第なのだが、それこそ「会議は踊る」という往年の映画で描かれたウィーン会議の舞踏会では、ワルツのシーンがしばしば登場した。あるいはヨハン・シュトラウス2世の死後、彼の遺したダンス音楽を寄せ集めて、こられたウィーン会議を舞台に作られた



ウィーン会議は、ナポレオン後の欧州の勢力争いが議題だったため、会議の方は紛糾が続いた。

オペレッタ「ウィーン気質」でも、こぞという場面でワルツが用いられた。

会議はワルツを踊ったか?

ところがこれは、どうやら後世が作り上げたイメージに過ぎない。少なくともウィーン会議の際に催された公式のアトラクションでは、メスエットに代表される18世紀以来の雅やかな宮廷舞踊が、依然として舞踏会の中心を占めていたようだ。

たしかにそう考えれば合点がゆく。ウィーン・ワルツの確立に大きな影響

19世紀後半のウィーンとシュトラウス一家

落日のハプスブルク帝国とともに

を与えた曲として、カール・マリア・フォン・ウェーバーが作曲した「舞踏への勧誘」が、しばしば引き合いに出される。ただし彼がこの曲を作ったのは、1819年。ウィーン会議が終了して4年後の話であって、そうなるこの会議でワルツが踊られたという話は、かなりの眉唾ものということになる。



カール・マリア・フォン・ウェーバー (1786~1826、トーマス・ローレンス画)。名曲「舞踏への勧誘」を書くのはウィーン会議が終わって4年後のこと

ウィーンの19世紀は、前半と後半の主に2つに分けられる。ナポレオン・ボナパルト戦争後の保守反動の時代と都市改造に伴う自由主義の時代と。これら2つの時代にまたがって花開いたのが市民向けのダンス音楽であり、その象徴ともいえるシュトラウス・ファミリーの栄華に他ならない。

文 小宮正安 ◎ヨーロッパ文化史研究
text by Masayasu Komiya

ただし、公式プログラムでこそ扱われなかったものの、ウィーン会議の際にウィーンでワルツがまったく演奏されなかったか、というところではない。むしろ、何しろ、近代的国際会議の走りといわれるだけのことはあって、物見遊山で超VIPを一目見ようとしたり、彼らを相手に一山当てようと目論んだりする人々で、ウィーンはごった返していた。

しかもそうした人間を相手に、私的なアトラクションが街のそこかしこで行われてゆく。このような中に、庶民を中心に人気を博し始めていたワルツを中心とした舞踏会……というよりもダンス・パーティーと呼んだほうがよい……が催されていた。

ウィーン体制とダンス・ブーム

というわけで、当時ドイツ東部のドレスデンで活躍していたウエーバーがこのことを聞き知り、それがやがて『舞踏への勧誘』へと結実していったのだらう(そもそも彼は若い頃から、音楽修業をウィーンで行うなど、この街の音楽をよく知っていた)。そうでなくても、ウィーンのワルツ・ブームはウィーン会議後ますます盛り上がり、ウィーンのダンス音楽といえはワルツ、といった状況さえ生まれてゆく。

というのも、ウィーン会議の終了後、いわゆる「ウィーン体制」と呼ばれる保守反動体制が、この街を中心にヨーロッパ全土に確立されたからである。

簡単にまとめてしまえば、反ナポレオンⅡ反フランス革命を標榜する各国の君主が、革命の理念だった「自由・平等・友愛」を頭から押さえた。またそうした状況の下、政治的な自由を徹底して奪われた市民階級は、そのエネルギーを自らのささやかな楽しみに振り向けるしかなかった。

そこで生まれたのが、一大ダンス・ブームである。ダンスであれば、政治的なお咎めを受けることはなさそうだし、というのがその理由。いっぽうの体制側も、市民がダンスに打ち興じることに對しては、よほどのことがない限り目をつぶった。鬱積した政治的な不満を、彼らがダンス音楽に打ち興じることで発散してくれるのであれば、これほど好都合なことはない。

街中には、様々なダンスホールが次々とお目見えしていった。あるいは自宅で、家族や親しい友人を招いて行われるダンス・パーティーも盛んだった。

時代の変化とワルツの台頭

その時、市民がもっとも好んだのがワルツだった。「ワルツ」(ドイツ語で「Walker」)は、元々、「転がまる」(ドイツ語で「walzen」という言葉からきて、転がまわるように踊るその様が、時に風紀紊乱ということで、18世紀以降しばしば取り締まりの対象になっていた。だが、時代は確実に変化を遂げつつ

あった。ウィーン体制の下で市民の政治的な自由が抑圧されたのも、それだけ彼らの力が伸びていったためである。また当時は貴族の中にも、市民との協同や、市民のライフスタイルに興味を示す者も徐々に出現し始めていた。となると、勃興を遂げつつあった市民の間で大人気のワルツに、興味を示す貴族が出てきてもおかしくない。

こうして1820年代に入ると、政治的には保守的な貴族の間でも、舞踏会のレパートリーにワルツを採り入れる場合が徐々に増えてくる。またいっぽうの市民の側も、これまで以上にワルツに対する熱を高めていった。となるとワルツの演奏のみならず、それを作曲することに精を出す音楽家が増えてくるのも当然というもの。

友人たちが企画する音楽の集い「シューベルティアデー」の後半に行われるお約束のダンス・パーティー用に、ワルツを書いたフランツ・シューベルトだけにとどまらない。後世から「芸術音楽家」と見なされる多くの音楽家が、ワルツを始めとするダンス音楽を数多く書いたのも、当然の成り行きだった。

何重もの「ワルツ合戦」

もちろん、ダンス音楽に特化した活動を行う音楽家も登場するようになる。1810年代に早くも頭角を現し、29年には宮廷で行われる舞踏会……元々は仮面舞踏会 Redoute から生まれたことから「レドゥーテ」と呼ばれてい

た……の指揮者になったヨーゼフ・ランナーは、典型的な存在である(ただし、別項で書いた「宮廷舞踏会音楽監督」というポストが作られたのは、彼の死後のこと)。あるいはランナーの後輩だったヨハン・シュトラウス1世も、20年代にダンス音楽家として独立を果たす。

この2人が繰り広げたのが、世に名高い「ワルツ合戦」だ。しかもランナーが1843年に世を去った後、新たなワルツ合戦が勃発する。これぞ、シュトラウス1世と2世の親子の間に繰り広げられたものだ。しかも背後には、シュトラウス1世が愛人宅に入り浸るようになり、本宅を顧みなくなったことに対する彼の妻アンナの復讐劇が絡んでいた。となると、政治的に鬱屈した日々を送っていたウィーンの人々にとって、恰好のゴシップネタにもなる出来事ではなかったか。

とはいえ、宮廷舞踏会音楽監督の地位にまで昇りつめたシュトラウス1世の圧倒的な存在に比べ、デビュー当時のシュトラウス2世はいきおい影が薄かった。それが大きく変わったのが、1840年代後半のこと。1848年、政治的な不満をついに爆発させた市民階級は革命を起こし、ウィーン体制を打倒する。さらには翌49年、愛人との間にもうけた子供から猩紅熱を感染されて、シュトラウス1世があつてなく死去。それまで彼の率いていた楽団はシュトラウス2世の下に組み込まれ、ウィーンのダンス音楽界の地図は確実に

19世紀後半のウィーンとシュトラウス一家 落日のハプスブルク帝国とともに



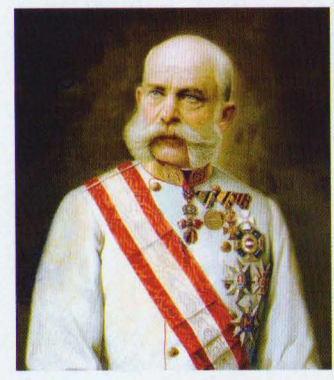
皇帝位に就いて5年、若きフランツ＝ヨーゼフ1世はウィーンの都市改造などの改革を積極的に推し進めた(1853年)

80歳の老皇帝フランツ＝ヨーゼフ1世。4年後には第1次世界大戦を控え、ハプスブルク帝国もいよいよ最終章を迎えることに...

に代わりつつあった。そしてウィーンの社会そのものも。

ウィーンの都市改造、新たなワルツの出現

これを象徴するのが、1848年の革命を機に新たにハプスブルク家の当主となり...ということはオーストリア帝国の皇帝に即位した、フランツ＝ヨーゼフ1世である。即位当初の彼は、革命の鎮圧に走り、戒厳令を出すなど、ウィーン体制も真つ青の反動体制を敷いた。ただし世の中が徐々に落ち着きを取り戻し、これから新たに始まる近代社会においては市民の力が不可欠であることを悟るようになると、彼は大胆な改革を推し進めてゆく。



ある。いずれにしても、モノや人や情報を大量かつ迅速に行き来させるような都市を目指し、中世以来ウィーンを囲んでいた古い城壁を取り壊され、その跡にはモダンな環状道路や新たな建物造られた。またそれによって、市民たちはこれまでになく活発な経済活動を展開できるようになった。さらに彼らは議会にも多数進出するようになり、自由主義の旗の下に政治的なイニシアティヴも手に入れてゆく。そうした成長著しい市民階級を得

意先として、シュトラウス2世も次々と、ワルツをはじめとするダンス音楽を発表してゆく。しかも、フランツ・リストやリヒャルト・ワーグナーといった当時の前衛音楽家の作品から多くを学び、ダンス音楽の世界にもこの時代が求める「進歩・進化」の気風を導入した。「踊るワルツ」にとどまらない、「聴くワルツ」の出現である。

さらに1873年、帝国の名譽挽回のために近代都市生まれ変わったウィーンを世界に喧伝すべくこの街で万国博覧会が開催されるが、開幕から数日も経たないうちに株価の大暴落に見舞われた。

ただし、ダンス音楽家としての絶頂期を迎えていた1871年、シュトラウス2世はオペレッタ作曲家に転身する。ダンス音楽家として多忙になりすぎた挙げ句、弟のヨーゼフやエドゥアルトにもこの世界に入ってもらわねばならず、またそうならそうならで、彼らとの確執が頻繁に起こるようになった。特にヨーゼフはそのあおりで、元々病弱だったところに多大なストレスが加わり、70年に急死してしまっただけである。

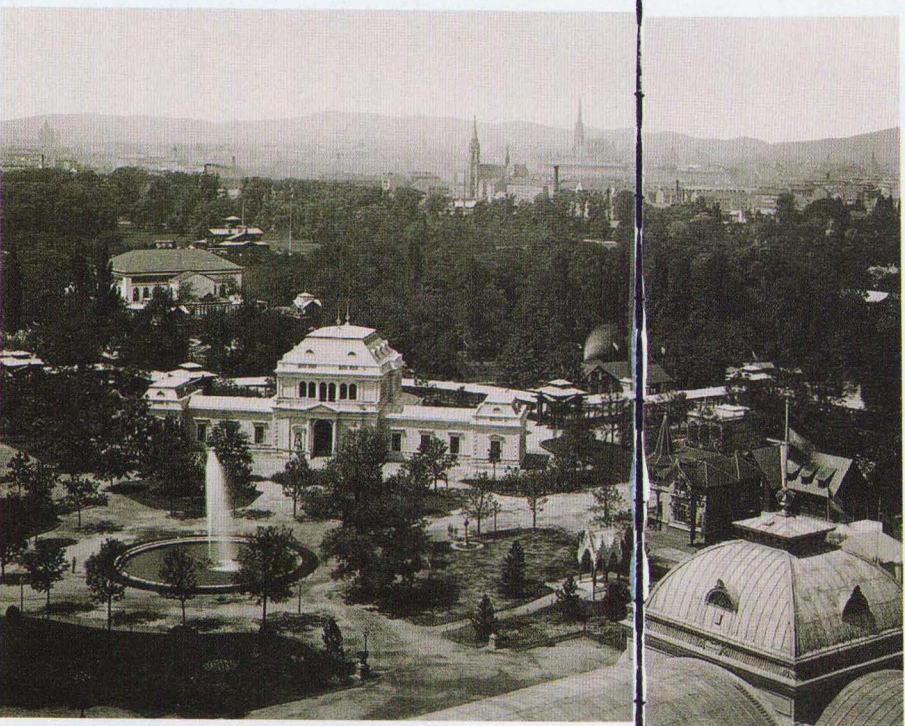
またウィーンそのものが、華やかな都市改造の裏側で様々な影に直面するようになりつつあった。この街を都とするオーストリア帝国自体の力の低下に伴い、諸外国相手の戦争に負け続け

「ワルツ」の帝都ウィーンの落日

そんな時代の空気が、「芸術音楽」の作り手にも大きな影響を与え、ワルツという形となって彼らの作品にも採り入れられてゆく。ヨハネス・ブラームスしかし、グスタフ・マーラーしかり。

シュューベルト以来の伝統が受け継がれたといえるし、あるいはシュトラウス2世の目指した「聴くワルツ」の在り方が刺激になったともいえよう。いずれにしても、ヨーロッパに数ある都市の中で、ウィーンこそは「ワルツ」の象徴的な存在となった。この古くからの帝都は、ワルツの調べとともに19世紀後半を支えてきた市民階級の、あるいは彼らを下から支えてきたオーストリア帝国そのものの落日を映し出す鏡と化したのである。

ウィーンでは、19世紀前半をノスタルジックに回顧する風潮が生まれる。政治的にみれば保守反動の暗黒時代だったにも関わらず、まだ素朴な響きを宿していたワルツを、少しずつ頭角を現し始めた市民階級が満喫していた時代。まさしくこうした風潮を映し出すかのように、シュトラウス2世が最後に完成させた曲も、19世紀前半の流行歌のメドレーだった。そして、こうした「昔はよかった」的な眼差しは、かのウィーン会議でワルツが踊られたという「伝説」をも生み出していったのである。



ウィーンのプラター公園。1873年、万博が開幕したが、まもなく株価の大暴落に見舞われた

ウィーン、ハプスブルク家、シュトラウス一家 略年表

- | | | | |
|-------|---|-------|--|
| 1801年 | ヨーゼフ・ランナーがウィーン郊外に生まれる(〜43)。 | 1857年 | 皇帝の勅命によりウィーンの都市改造が始まる。 |
| 1804年 | ヨハン・シュトラウス1世がウィーンで生まれる(〜49)。ベートーヴェンが「英雄交響曲」を作曲。 | 1863年 | シュトラウス2世が宮廷舞踏会音楽監督に任命。 |
| 1814年 | ナポレオン失脚後のヨーロッパの「新秩序」を話し合うウィーン会議が翌年にかけて行われる(会議は踊る)。オーストリア外相メッテルニヒ(後に宰相)が主導する保守反動的な「ウィーン体制」が19世紀半ばまで続く。 | 1866年 | 普墺戦争でオーストリアがプロイセンに敗れる。 |
| 1819年 | ミヒャエル・パーマー楽団にシュトラウス1世が入団、既にヴァイオリン奏者として団員だったランナーと出会い、友人に。後に、共に独立して楽団を作る。 | 1867年 | オーストリア＝ハンガリー二重帝国が成立。シュトラウス2世がワルツ「美しく青きドナウ」を作曲。 |
| 1824年 | ランナーが宮廷のレドゥーテ指揮者に任命。ベートーヴェンが「第九」を初演。 | 1870年 | ヨーゼフ・シュトラウス没。享年42。 |
| 1825年 | ヨハン・シュトラウス2世がウィーン郊外で生まれる(〜99)。 | 1871年 | シュトラウス2世がオペレッタの作曲に乗り出す。 |
| 1827年 | 2世の弟ヨーゼフが生まれる。ベートーヴェン没。翌年にはシュューベルト没。 | 1872年 | エドゥアルトが宮廷舞踏会音楽監督に任命。 |
| 1828年 | かつての同僚だったランナーとシュトラウス1世の「ワルツ合戦」が熾烈に。 | 1873年 | ウィーンで万国博覧会が開催。株価が大暴落。 |
| 1830年 | 後のオーストリア帝国皇帝フランツ＝ヨーゼフ1世が生まれる。 | 1874年 | シュトラウス2世がオペレッタ「こころ」を初演。 |
| 1835年 | オーストリア皇帝フランツ1世が崩御、フェルディナント1世(1793〜1875)が後を襲う。シュトラウス2世の弟エドゥアルト(〜1916)が生まれる。 | 1885年 | シュトラウス2世がオペレッタ「ジプシー男爵」を初演。 |
| 1843年 | ランナー没。 | 1897年 | マーラーがウィーン宮廷歌劇場の芸術監督に(〜1907)。シュトラウス2世と親交のあったブラームスが逝去。 |
| 1844年 | シュトラウス2世がデビュー | 1899年 | シュトラウス2世没。 |
| 1846年 | シュトラウス1世が宮廷舞踏会音楽監督に任命。 | 1905年 | レハールのオペレッタ「メリー・ウィドウ」が初演。 |
| 1848年 | 3月革命によりフェルディナント1世が退位、甥にあたる18歳のフランツ＝ヨーゼフがオーストリア皇帝に即位。シュトラウス1世が「ラデツキー行進曲」を作曲。 | 1914年 | 皇位継承者のフランツ＝フェルディナント夫妻がサラエボで暗殺され、第1次世界大戦が勃発。 |
| 1849年 | シュトラウス1世没。 | 1916年 | フランツ＝ヨーゼフ1世が崩御。エドゥアルト・シュトラウスが逝去。 |
| | | 1918年 | オーストリアの敗戦によりハプスブルク帝国は崩壊。 |

(編集部編)

シュトラウス一家が切望した

「宮廷舞踏会音楽監督」とは？

ハプスブルク家の長い歴史の中でも、わずか4人しか任せられなかった「宮廷舞踏会音楽監督」。このポストこそ、皇帝をはじめ貴族中の貴族が集う場に音楽家として招かれるという最高の誉れだったのだ。

文 小宮正安 ◎ヨーロッパ文化史研究
text by Masayasu Komiya

ハプスブルク家の都として栄えたウィーン。この街の宮廷文化、さらには宮廷舞踏会の歴史も長い。となると、シュトラウス・ファミリーの代名詞ともいえる「宮廷舞踏会音楽監督」という栄えあるタイトルも、昔から存在するようにも思ってしまうのだが…。

実のところこのポストは、1846年に初めて作られたものにすぎない。歴代の面々を挙げてみると、46年から49年まではヨハン・シュトラウス1世（1803〜49）、63年から71年までは彼の長男のヨハン・シュトラウス2世（1825〜99）、72年から1901年まではヨハン1世の末っ子で、ヨハン2世の末の弟エドゥアルト・シュトラウス（1835〜1916）、08年から18年まではカール・ミヒャエル・ツィラー（1843〜1922）。

インターネット上には誤った情報がかさねて出ているが、ハプスブルク家の長い歴史の中でも、宮廷舞踏会音楽監督に任じられた音楽家は、たった4人だけである。このポストがダンス音楽家にとって、いかに貴重で稀少なものだったかがよく分かる。

1846年といえば、ハプスブルク家の支配力が下り坂にあることがはつきりと見え始めた頃。同家としては、伝家の宝刀である文化力…その中には舞踏会文化も含まれる…を維持する一方、余計な経済的出費は抑えたいところだった。

そこで、これまでのように宮廷丸抱えの芸術家を削減してゆく一方で、宮廷に關係する芸術家については「積極的な外注」を行ってゆく。いわば市井のダンス音楽家にすぎなかったシュトラウス1世が、宮廷舞踏会音楽監督に任命され、彼の率いる楽団を連れて宮廷舞踏会に出演できるようになったのも、そうした流れのお陰だった。

しかも19世紀半ばを過ぎると、宮廷舞踏会自体が2つに区別されてゆく。貴族はもちろん功績のあった軍人や役人、裕福な市民階級が参加できる「宮廷舞踏会（ホーフ・バル）」と、皇族と緊密な關係者限定の「宮廷での舞踏会（バル・バイ・ホーフ）」。

必要となった。

「宮廷舞踏会音楽監督」は、これら両方の舞踏会に参加することが務めだった。とりわけこの「宮廷での舞踏会」に関わる点こそ、彼らにとってみれば、皇帝をはじめ貴族中の貴族が集う場に音楽家として招かれるという最高の誉れだった。

いわば、「宮廷お墨付き」という最高の箔を得たダンス音楽家ということになる。となれば、よくわかるだろう。シュトラウス1世の死後、名実ともに彼の後継者たる「シュトラウス・ファミリー」を築く必要のあったシュトラウス2世にとって、宮廷舞踏会音楽監督の地位を手に入れることがいかに重要だったかが。そして、舞台作品の創作に力を注ぐべく、自らその任を退いた後も、弟のエドゥアルトにそれを継がせたが。

エドゥアルトは、晩年、ダンス音楽家を引退したため、その任はツィラーに受け継がれる。だが1918年、ハプスブルク家の支配が終焉を迎え、帝政が崩壊すると、このポストも消滅した。ツィラーが失意の中に息を引き取るのは、わずかその4年後である。



宮廷舞踏会音楽監督にとって最高の栄誉だったのは、上級貴族のみが許される「宮廷での舞踏会」に参加することだった。後方の舞台上に監督とオーケストラが陣取っている

ニューイヤー・コンサートの 歴代指揮者

アンドリス・ネルソンス(1978〜)が指揮した
今年のニューイヤー・コンサート Photo: Terry Linke



ボスコフスキーの時代にウィーンのどちらかといえばローカルな催しから、
全世界に中継される国際的なイベントに発展した演奏会、
その価値をより高めるにもマゼールの知名度の高さは魅力的だった。

文 岡本 稔 ◎音楽評論家
Text by Minoru Okamoto

■マゼールで大きな転機

1955年から79年まで、四半世紀の長きにわたってニューイヤー・コンサートを率いてきたヴィリー・ボスコフスキーが降板し、ロリン・マゼールがそのあとを継ぎ、このコンサートは大きな転機を迎えた。それまでこのコンサート率いていたクラウス、クリップス、ボスコフスキーはすべてウィーンに生まれ、その地で音楽を学んだ生粋のウィーンっ子。その精華ともいえるべきシュトラウス一家の音楽は完璧に体に沁みこんでいるといえるだろう。

それに対し、マゼールはウィーンの伝統とはまったく無関係の偉大な才能だった。ユダヤ系でロシア、ハンガリーの血をひき、フランスに生まれ、アメリカで教育を受けたマゼール、幼いころから天才の名をほしいままにし、10代でアメリカのいくつもの名門オーケストラの指揮台に立つなど、その才能はとびぬけていた。ヴァイオリンを巧



ロリン・マゼール (1930~2014)

みに弾くとともに、作曲の才にも秀でていた。ヨーロッパの名門との客演も若いころから数多いものの、ウィーン・フィルとのかわりにはさほど密接ではなかった。そうした彼にウィーンの伝統の粋ともいえるべき演奏会を任せるといふのは大英断だったといえるだろう。こうした方針の大転換を行った背景としては、ボスコフスキーの後継となるウィーン・スタイルの指揮者が全く見当たらなかったことが大きな要因として考えられる。マゼールの知名度の高さは魅力的で、全く個性の違う組み合わせから新たな転換を図るというオーケストラの判断は理解できる。

ボスコフスキーの時代にウィーンのどちらかといえばローカルな催しから、全世界に中継される国際的なイベントに発展した演奏会、その価値をより

- アバド(1988、91年)
- クライバー(1989、92年)
- メータ(1990年など計5回)

1988年と91年を担当したクラウディオ・アバドはウィーンで学んだ経験があり、ウィーンの情緒を的確に表出できる指揮者。シュトラウス一家の

ズービン・メータ (1936〜)
Photo: Terry Linke



高めるにもマゼールの知名度の高さは魅力的だった。マゼールが初めてウィーン・フィルの演奏会を指揮したのは1962年5月の定期演奏会。以後、ウィーン、ザルツブルクの演奏会を中心に370もの演奏会を指揮している。その回数はヘルベルト・フォン・カラヤンの303を大きく上回る(ウィーン・フィルの公式ホームページによる)。

マゼールといえば、知的で、時に作爲的とも感じられるワザビが効いた解釈が身上。それがウィーン・フィルの持ち味と化学反応を起こし、ほかの指揮者では味わうことのできない独自の音楽が特徴的だった。それが最も顕著に感じられるのが1982年から89年に収録されたマラーの交響曲全集だろうが、一連のニューイヤーも彼らしい才気とウィットに富んだ演奏で傾聴に値する。

■カラヤンの登場

次なる大転換は1987年に訪れる。帝王カラヤンの登場だ。ウィーン国立歌劇場、ウィーン・フィルと長年の深い関係を持ち続けた指揮者だが、ニューイヤー・コンサートは専任の指揮者がいたこともあって、登壇する機会はなかった。カラヤンが初めてウィーン・フィルを指揮したのは、1934年8月21日のザルツブルク音楽祭の演奏会。ドビュッシーとラヴェルという意外なプログラムだった。

1956年から64年まで、ウィーン国立歌劇場の芸術監督をつとめ、その



ヘルベルト・フォン・カラヤン
(1908〜89)

職を辞したのちもザルツブルク音楽祭やレコーディングで密接な関係を保ち、最晩年にはベルリン・フィルとの関係悪化もあって、その最良の理解者となった。カラヤンといえば、オペラや大曲の名解釈者であるとともに、小品の聴かせることも卓越した能力を持つ指揮者だった。序曲集やオペラの間奏曲集、さらにはマーチ集でも比類ない手腕を発揮した。

しかし、そうした小品の名解釈者という評価はもっぱらレコーディングを通して確立されたもの。演奏会でそうした曲目をまとめて取り上げる機会は皆無で、アンコールなしを貫いたカラヤンは、そこで触れるチャンスもなかった。ウィーン・ワルツをまとめたディスクも名盤の誉れが高かったが、生のコンサートで集中して演奏する機会はなかった。

■毎年異なる指揮者で現在のスタイルに

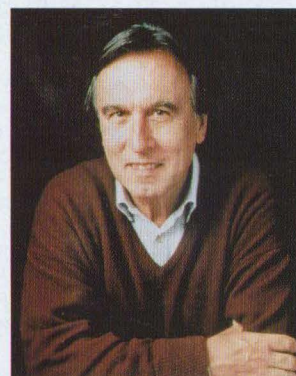
1987年のニューイヤー・コンサートでは、曲目は名曲を揃えたものだったが、ワルツ「春の声」では、キヤスリーン・パトルを迎えて史上初の独唱者を交えた演奏となった。カラヤンのワルツやホルカはいずれも極めて格調が高く、ウィーンの情緒にも満ち溢れ、珠玉の輝きを放っている。

カラヤン以降、毎年異なった指揮者が登壇する現在のスタイルになる。ボスコフスキーの時代に国際中継されるようになったコンサートは、マゼールのもと、その知名度を高めてきた。しかし、さらに多くの世界の聴衆にアピールするには毎年異なる大物を呼ぶことによって、話題を発信し続けるのが得策という判断があったのだろう。

その結果、コンサートの性格はかなり変貌する。オーケストラのウィーン的な味わいは、さまざまな大物指揮者の個性と反応し、若干薄められることになり、「ウィーン」のワルツやホルカを愛する人には残念に思われるところもあったかもしれない。

登壇する指揮者の国籍も多岐にわたる。注目すべきはウィーン生まれの指揮者が皆無ということ。オーストリア出身の指揮者はいるものの、カラヤンはザルツブルク生まれ、カルロス・クライバーの国籍はオーストリアだが、居住したことはなく、ニコラウス・アーノンクールはベルリン生まれでグラ

クラウディオ・アバド
(1933~2014)



作品の録音がなかったアバドだが、生来の誠実さをもつて作品に臨む姿勢は高く評価された。91年にはロッシーニ、シューベルト、モーツァルトの作品も加え、自らの個性も強く投影した。

1989年と92年はカリスマ、カルロス・クライバーの登場。曲目については強く独自色を出すことはなかったものの、聴きなれた作品に大きな生命力を与えるのはクライバーならでは。ウィーン・フィルの持ち味を活かしながら、彼の個性を明確に示した。92年には自らラッパを吹くパフォーマンスを見せるが、緊張しているのは映像からも明らか。細やかな神経の持ち主であるクライバーが残した一期一会の記録である。

1990年、95年、98年、2007年、15年はズビン・メータが担当した。1990年にはヨハン・シュトラウスI世の「インド人ギャロップ」を入れるほか、曲目について新機軸を盛り込んだメータだが、オーケストラの持つ伝統を壊すことはなかった。ウィーンで



カルロス・クライバー (1930~2004)

学んだ経歴がそこでも活かされていた。5回も登壇した背景には、ウィーンを知り尽くしたメータへの信頼があったのは間違いない。メータは最も良い意味での職人性をもつ指揮者。そして、ゴージャスな独自のサウンドを持

つ人である。そうした持ち味はニューイヤー・コンサートでもいかに発揮されていた。

リッカルド・ムーティは1993年、97年、2000年、04年、18年、そして21年のコンサートを担当。ムーティについては別の項で詳述させていたきたい。

■アーノンクール (2001、03年)
■小澤征爾 (2002年)
■ヤンソンス (2006、12、16年)

2001年のニューイヤー・コンサートにはアーノンクールが登場、03年にも再びタクトを執った。01年は「ラデツキー行進曲」のオリジナル版で開始するという意表を突いたオープニング。ランナーの曲を3曲いれるとともに、ヨハン・シュトラウスII世の「電磁気のリカ」ワルツ「もろ人手をとり」といった珍しい曲目もプログラムに加えた。

1980年以降の歴代の指揮者

数字は登場回数

- 1980 ロリン・マゼール ①
- 1981 ロリン・マゼール ②
- 1982 ロリン・マゼール ③
- 1983 ロリン・マゼール ④
- 1984 ロリン・マゼール ⑤
- 1985 ロリン・マゼール ⑥
- 1986 ロリン・マゼール ⑦
- 1987 ヘルベルト・フォン・カラヤン ①
- 1988 クラウディオ・アバド ①
- 1989 カルロス・クライバー ①
- 1990 ズービン・メータ ①
- 1991 クラウディオ・アバド ②
- 1992 カルロス・クライバー ②
- 1993 リッカルド・ムーティ ①
- 1994 ロリン・マゼール ⑧
- 1995 ズービン・メータ ②
- 1996 ロリン・マゼール ⑨
- 1997 リッカルド・ムーティ ②
- 1998 ズービン・メータ ③
- 1999 ロリン・マゼール ⑩
- 2000 リッカルド・ムーティ ③
- 2001 ニコラウス・アーノンクール ①
- 2002 小澤征爾 ①
- 2003 ニコラウス・アーノンクール ②
- 2004 リッカルド・ムーティ ④
- 2005 ロリン・マゼール ⑪
- 2006 マリス・ヤンソンス ①
- 2007 ズービン・メータ ④
- 2008 ジョルジュ・ブレートル ①
- 2009 ダニエル・バレンボイム ①
- 2010 ジョルジュ・ブレートル ②
- 2011 フランツ・ヴェルザー＝メスト ①
- 2012 マリス・ヤンソンス ②
- 2013 フランツ・ヴェルザー＝メスト ②
- 2014 ダニエル・バレンボイム ②
- 2015 ズービン・メータ ⑤
- 2016 マリス・ヤンソンス ③
- 2017 グスターボ・ドゥダメル ①
- 2018 リッカルド・ムーティ ⑤
- 2019 クリスティアン・ティーレマン ①
- 2020 アンドリス・ネルソンス ①



ニコラウス・アーノンクール
(1929~2016)

アーノンクールにとってウィーンの音楽はレパートリーの核となる最も重要な分野。彼にとって、シュトラウス・ファミリーの曲は、単なる娯楽音楽ではない。あの鋭い眼差しで指示を送る姿には鬼気迫るものがある。しかし、そこから生まれる音楽は温かみも

兼ね備え、決して理詰めのものではない。ウィーン交響楽団のチェリストをつとめていた時代に、ウィーン・フィルのエキストラも経験している彼にとって、オーケストラを知り尽くしているという利点もある。私が現地で観た唯一のニューイヤーであり、決して忘れない体験だった。

2003年のプログラムもブラームスの「ハンガリー舞曲」やウエーバー（ペルリオーズ編）の「舞踏への勧誘」を入れるとともに、シュトラウス一家の珍しい作品も組み入れ、彼ならではのこだわりをみせた。そのプログラムが見事な調和を形成しているのには驚かされる。

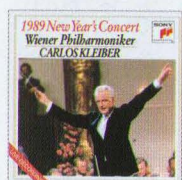
2002年に日本人として初めて小澤征爾が招かれた。優美な音楽を必ずしも得意としていない小澤にとつて、この経験はあまり名譽にならなかった印象がある。この年の秋からウィーン国立劇場の音楽監督に就任するなど、ウィーンに急接近した小澤だが、持ち味の豊みかけるような迫力から生まれるエキサイティングな音楽とウィーンの持ち味はミス・マッチという印象を抱くのは私だけだろうか。

それに対し、2006年、12年、16年に指揮したマリス・ヤンソンスはオーケストラと相思相愛の仲であることを直ちに印象付ける出来だった。年によってチャイコフスキーのバレエ音楽を組み入れるなどプログラミングにも工夫が凝らされ、最も良い意味でのエンターティナーという一面を見せてくれた。

ヘルベルト・フォン・カラヤン (1987)
(ユニバーサル)
UCCG-90688



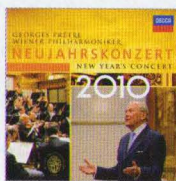
カルロス・クライバー (1989)
(ソニー)
SICC-40032



クラウディオ・アバド (1991)
(ユニバーサル)
UCCG-4177



ジョルジュ・ブレートル (2010)
(ユニバーサル)
UCCD-1256



ニューイヤー・コンサート
DISC

■プレートル (2008、10年)
■バレンボイム (2009、14年)
■メスト (2011、13年)

2008年には、83歳のジョルジュ・ブレートルが登場、ウィーン・フィルには1966年より定期的に客演している巨匠が、「フランス」というテーマのもと軽妙洒脱な音世界を展開した。組み入れられたボルカ・フランセーズは追隨を許さない味わいに富む。初回の大成功を受けて10年にも再びフランスの息吹をウィーンにもたらした。

2009年には大御所ダニエル・バレンボイムが登場、14年にも再び招かれていた。極めて音楽的ではあるがやや重厚すぎる印象もぬぐえない。2011年、13年はメストが担当。清潔感のあるみずみずしい音楽を奏でた。17年にはグスターボ・ドゥダメルが若さのほとばしる音楽を聴かせ、19年にはクリスティアン・ティーレマンが

ニコラウス・アーノンクール (2001)
(ワーナー)
WPCS-10650



マリス・ヤンソンス (2016)
(ソニー)
SICC-1974



彼ならではの重厚な響きを展開、そして20年にはアンドリス・ネルソンスがウィーン・フィルと息がぴったりと合った演奏を聴かせた。それぞれの個性が浸透したウィーン音楽はいずれも清新な印象がある。

※ネルソンス、アーノンクール、メータ、ヤンソンスの写真はウィーン・フィルのホームページより

2021年のニューイヤー・コンサートを指揮するリッカルド・ムーティはなんと6回目。今回の登板で、存命している指揮者の中で最多記録になる。本稿では、この指揮者とウィーン・フィルとの関係について考察してみたい。

私がムーティとウィーン・フィルの演奏に大きな感銘を受けたのは、1975年にカール・ベームに帯同して初来日した時だった。その際にはベームのチケットをおさえるだけで手いっぱい、ムーティは聴けなかった。FMで放送された演奏を聴いて、ベームとは全く違った颯爽としたスタイルの音楽に魅了された。なかでも、ブラームスの交響曲第4番は名演というべき出来だった。30代前半のムーティのタクトに、ウィーン・フィルの名物奏者たちが真剣に向かっていることが、録音から手にも取るように分かった。

■早くから才能に目を付けたウィーン・フィル

ムーティは1941年7月28日にナポリで生を受けた。父は医者だったが、テノールの美声の持ち主で、音楽を心から愛していた。5人の息子たちにも音楽教育を施し、3男のリッカルドは、3歳でピアノを弾き出した。ナポリ大学では哲学を専攻するが、ナポリ音楽院の院長のヤコポ・ナポリにピアノを師事。半ば偶然に指揮する機会を与えられ、それを天職と感じたという。

ミラノ音楽院でアントニオ・ヴォットーのもとで学び、1965年にアングエリク・管弦楽団を指揮してデ

ニューイヤー・コンサートを6回目の指揮 リッカルド・ムーティと ウィーン・フィル



(ウィーン・フィルのホームページより)

彼のウィーン・フィルを指揮した回数は445回という。演奏会自体の数がさほど多くないこのオーケストラをこれほど頻繁に指揮した指揮者はいないだろう。

文 岡本稔 ©音楽評論家
text by Minoru Okamoto

ビュ、67年にはグイド・カンテルリ国際コンクールで第1等賞を獲得した。70年から71年のシーズンにはワイレンツェ歌劇場とミラノ・スカラ座でベリニの「清教徒」を異なる歌手たちとほぼ同時に演奏するなど、まさに飛ぶ鳥を落とす勢いの活躍を見せた。

ウィーン・フィルはそうした彼の才能にいち早く目をつけていた。1971年8月には、ザルツブルク音楽祭の祝祭小劇場で上演されたドニゼッティの「ドン・パスカワレ」でこのオーケストラにデビューした。ウィーン・フィルが重用する指揮者はウィーンで学んだ経歴を持つ人が大半で、ムーティは珍しい例といえるだろう。

その後、コンサートもいくつか指揮するが、まとまって演奏したのは1975年の日本ツアーが初めて。オーケストラからいかに大きな信頼を得ていたかがわかる。公式ホームページによると、彼のウィーン・フィルを指揮した回数は445回という。演奏会自体の数がさほど多くないこのオーケストラをこれほど頻繁に指揮した指揮者はいないだろう。

■ニューイヤー・コンサートは1993年から

モニー・バル（ウィーン・フィル舞踏会）での、レズニチエクの歌劇「ドン・デリアナ」序曲の指揮に始まる。85年の第45回ウィーン・モニー・バルでは、スッペのオペレッタ「美しきガラテア」を取り上げている。そのほかは、演奏旅行のアンコールで取り上げた程度。そのため、ウィーン音楽をまとめて取り上げたのは1993年のニューイヤー・コンサートが初めてということになる。

J・シュトラウス二世「ジャナーリスト」「外交官」「すみれ」「何か小さなもの」、ランナー「シユタイル風舞曲」、J・シュトラウス一世「シユペアル・ガロップ」で始まるコンサートは耳慣れない作品のオン・パレード。後半になってJ・シュトラウス二世「エジプト行進曲」、ヨハン二世&ヨゼフ・シュトラウス「ピツィカート・ポルカ」なども登場するが、かなりひねった選曲だ。こうした珍曲を隠れた名作として聴かせるところがムーティとウィーン・フィルの真骨頂だ。

1997年も方針は変わらない。J・シュトラウス二世「モーター・ワルツ」、J・シュトラウス二世「ポルカ」「帝都はひとつ、ウィーンはひとつ」、ヨゼフ・シュトラウス「キャリアのポルカ」、J・シュトラウス二世「ポルカ」「インドの舞姫」、ワルツ「人生を楽しめ」「パトロネス・ポルカ」、ポルカ「蜃気楼」「ロシア行進曲」といった具合だ。

■変化球勝負

2000年のミレニアムでも、変化球勝負。J・シュトラウス二世「入江



リッカルド・ムーティ
photo: Terry Linke



ニューイヤー・コンサート2018
(ソニー) SIBC-217
CDは SICC-2151



ニューイヤー・コンサート・コンプリート・ワークス
(エクステンディッド・エディション)
(Sony) 19439764562

のワルツ」「ヘレネン・ポルカ」「アルビオン・ポルカ」「ワルツ「愛の歌」「チャール・ダーシュ、ポルカ「駅伝馬車」といった曲目が続く、後半でもヨゼフ・シュトラウス「とんぼ」、ポルカ「訴訟」、ポルカ「芸術家の挨拶」、ワルツ「マリエン・クレング」といった曲目が織り込まれている。

2004年はどうだろう。J・シュトラウス二世「喜歌劇「くるまば草」」行進曲「とても美しかった」、J・シュトラウス一世「シユベアル・ポルカ」「小夜鳴き鳥のワルツ」「フレデリカ・ポルカ」「カチューシャ・ギャロップ」と前半はヨハン・シュトラウス一世の曲が多く取り上げられ、その後もJ・シュ

トラウス二世「サタネッラ・ポルカ」、ヨゼフ・シュトラウス二世「スケートのポルカ」、エドゥアルド・シュトラウス・ポルカ「喜んで」「ポルカ「三色すみれ」」などが入っている。選曲に関して、研究者が入っているのかもしれないが、その労力は大変だと思われる。

2018年を見てみよう。秘曲探しの程度はやや緩和されたものの、ヨゼフ・シュトラウス「ワルツ「ウィーンのフレスコ画」、J・シュトラウス二世「ポルカ・フランセーズ」「花嫁がし」、ポルカ・シユネル「心うきうき」、J・シュトラウス一世「マリアのワルツ」「ヴィルヘルム・テル・ギャロップ」といった曲目も並ぶ。回数を重ねるに従い、ムーティのタクトは円熟の度合いを高め、それぞれの作品の魅力をありのままに引き出すようになったことが実感される。

2021年は、J・シュトラウス二世「ワルツ「春の声」、ポルカ「クラップフェンの森で」「皇帝円舞曲」と珍しく名曲揃い。第一部、第二部の冒頭にスッペが置かれるのも新機軸だ。しかも「詩人と農夫」も含む。一方、こだわりの見せており、コムザーク・ワルツ「バーデ娘」、カール・ツェラーとカール・ミレツカールの曲もニューイヤー・コンサート初登場。そもそも、ともに1842年生まれ、2人の作品が取り上げられるのは今回が初めてだという。

ニューイヤー・コンサート2021の演奏曲

1. ファティニツツア行進曲 (スッペ)
2. ワルツ「音波」 (ヨハン・シュトラウス2世)
3. 「ニコ殿下のポルカ」 (ヨハン・シュトラウス2世)
4. ポルカ・シユネル「憂いもなく」 (ヨゼフ・シュトラウス)
5. ワルツ「坑夫ラング」 (ツェラー)
6. ギャロップ「賢沢三味」 (ミレッカー)
7. 喜歌劇「詩人と農夫」序曲 (スッペ)
8. ワルツ「バーデン娘」 (コムザーク)
9. 「マルゲリータ・ポルカ」 (ヨゼフ・シュトラウス)
10. 「ヴェネツィア人のギャロップ」 (ヨハン・シュトラウス1世)
11. ワルツ「春の声」 (ヨハン・シュトラウス2世)
12. ポルカ・フランセーズ「クラップフェンの森で」 (ヨハン・シュトラウス2世)
13. 「新メロディ・カドリーユ」 (ヨハン・シュトラウス2世)
14. 皇帝円舞曲 (ヨハン・シュトラウス2世)
15. ポルカ・シユネル「恋と踊りに夢中」 (ヨハン・シュトラウス2世)

●以上のほかアンコール曲(3曲)を予定
●ニューイヤー・コンサート初演奏の作品(1, 2, 5, 6, 8, 10)
※2021年のニューイヤー・コンサートは無観客で行われる。ソニークラシカルは1月1日の公演をライブ収録し、1月8日にデジタル配信を開始、国内盤CDの発売は1月27日の予定。

ニューイヤー・コンサートの創始者、 クレメンス・クラウス

文 山崎浩太郎 演奏史譚家
text by Koutaro Yamazaki



ワーグナー：
楽劇《ニーベルングの指環》
クレメンス・クラウス（指揮）
パイロイト祝祭管
アストリッド・ヴァルナイ
（ブリュンヒルデ）、
ハンス・ホッター（ヴォータン）、
ヴォルフガング・ヴィントガッセン
（ジークフリート）ほか
収録：1953年、
パイロイト祝祭ライブ
（Documents）
600253（13CD）



ニューイヤー・コンサート 1951~54
クレメンス・クラウス（指揮） ウィーン・フィル
収録：1951~54年
（Eloquence）4827363（2CD）
※ Decca 原盤



**1954年
ニューイヤー・コンサート**
クレメンス・クラウス（指揮）
ウィーン・フィル
収録：1954年
（Opus 蔵）OPK-7006

「アラベラ」などR・シュトラウスのオペラの初演者としても知られるが、やはりJ・シュトラウス一家のワルツの演奏は格別。そのセンスのよさ、優美と気品、さりげない情緒などは、ニューイヤー・コンサート創始者ならではの魅力だ。

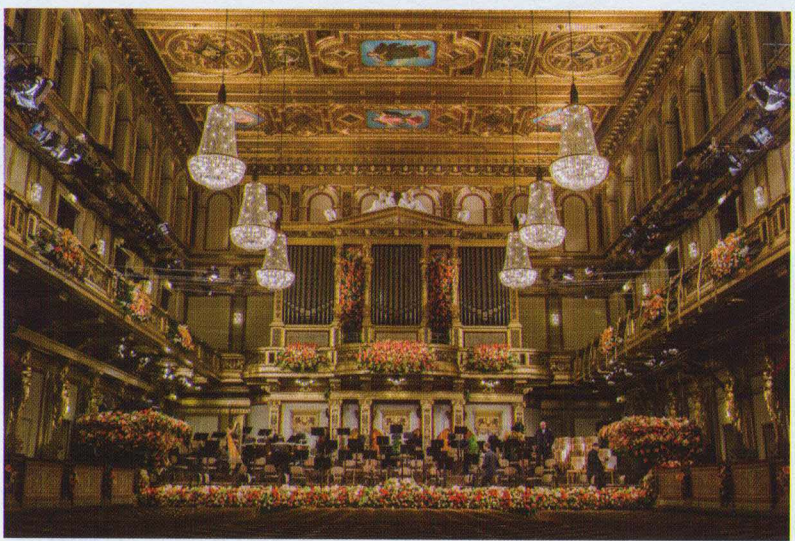
ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートの創始者として名高い指揮者クレメンス・クラウスは、ウィーン宮廷劇場のバレリーナ、クレメンティヌ・クラウスの私生児として、1893年にウィーンに生まれた。父親は高位の貴族とも噂されたが、現在はギリシャ系の富豪バルタツィ家の一員、ヘクトールが真の父親と考えられている。ウィーン少年合唱団をへて、ウィーン音楽アカデミーで学び、生粋のウィーン子として音楽を身につけたクラウスが、ウィーン・ワルツを自らの一部のように愛していたことは、想像にかたくない。しかし、忘れてはならないのは、クラウスは決してワルツだけの指揮者ではなく、それどころか、20世紀前半のドイツ語圏の重要な指揮者、歌劇場

クレメンス・クラウス
Clemens Krauss (1893~1954)
生粋のウィーンっ子で、10歳でウィーン少年合唱団に、その後、ウィーン音楽院に入る。作曲をヘルマン・グレーデナーに、音楽理論をリヒャルト・ホイベルガーに学んで1912年に卒業。ブルノを皮切りに各歌劇場でオペラ指揮の経験を経る。24年、フランクフルト市立歌劇場の総監督、29年、ウィーン国立歌劇場の音楽監督に就任。30年、ウィーン・フィルの最後の常任指揮者。35年、ベルリン国立歌劇場、37年、バイエルン国立歌劇場の音楽監督、41年、ザルツブルク音楽祭の総監督となる。37年にはウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートを始める。戦後はナチスとの関係を疑われるが、47年に活動再開。ウィーン・フィルを中心に数々の名演・名盤を残す。54年、メキシコ演奏旅行中に客死。享年61。

リン国立歌劇場とバイエルン国立歌劇場の音楽監督を歴任し、ザルツブルク音楽祭の監督も務めた。また、リヒャルト・シュトラウスの信頼を得て師事し、そのオペラ「アラベラ」と「カプリッチョ」の初演を指揮しただけでなく、後者では作詞まで担当して、親交の篤さを示している。スケールは大きくないが、ウィーン・フィルと1950年代前半にセッション録音したりリヒャルト・シュトラウスの交響詩集などでは、師匠譲りのセンスのいい軽快な指揮ぶりを聴かせてくれる。しかしその本領は、交響曲などの演奏会よりも歌劇場でこそ発揮された。適切なフレイジングで歌手の呼吸を助かし、その持てる力を最大限に引き出していく能力と、ドラマに対する卓越

したセンスは、1953年パイロイト音楽祭での「ニーベルングの指環」全曲に、典型的に発揮されている。また、1944年にバイエルン国立歌劇場のアンサンブルと放送録音した「さまよえるオランダ人」では、意外なほどに激しい指揮ぶりを聴かせてくれる。どちらも、不世出の名ワーグナー歌手ハンス・ホッターとの共演というのが嬉しい。歌劇場での大活躍の一方で、いわば息抜きのように得意としたのが、シュトラウス一家のワルツ演奏会だった。ウィーン・フィルとは1929、33、39、42、43年と夏のザルツブルク音楽祭で行って好評を博したが、同種の演奏会をウィーンでも年末年始の時期に開催することにした。1939年大晦日が最初で、41年からは元旦に移されて、現在まで続くニューイヤー・コンサートとして定着することになる。レコードでは、50年から53年にかけて、英デッカがセッション録音したシリーズが有名だ。そのセンスのよさ、優美と気品、さりげない情緒などは、クラウスならではの魅力である。また、生涯最後となった1954年は全曲目のライブ録音が残されており、曲によっては喝采に迎えてもう1回演奏したりするなど、現代の定型とは異なる、ウィーン・ローカルだった時代のニューイヤー・コンサートを聴くことができる。

2016年のニューイヤー・コンサートに向けてステージは花で飾られた



ウィーン・フィル楽団員にとっての ニューイヤー・コンサートと ウィーナ・ワルツ

文 ヴィルフリート・和樹・ヘーデンボルグ 〇ウィーン・フィル・ヴァイオリン奏者
text by Wilfried Kazuki Hedenborg

私達の宝物を国境と言葉の壁を越えて音楽で伝える

「いつかは僕も！」と夢を大きくしていました。2000年10月、ティールマンとの録音セッションをエキストラとして弾かせて頂いたのがウィーン・フィルとの舞台経験の始まりです。翌年の3月1日に入団、それ以来、楽友協会とオペラ座は自宅以上に時間を過ごすことが多いのでは？ という空間になり、思い出がたきさん詰まっている場所です！

2002年元旦、小澤征爾先生とのニューイヤー・コンサートが私にとっての初ニューイヤー・コンサートとなったのです！ 子供の頃から憧れていたウィーン・フィルとテレビで拝んできた楽友協会大ホールで、学生の頃に「ボクの音楽武者修行」を読んで尊敬していた小澤先生と共に舞台上に上がり、ボルカ、ワルツを始め、ウィーン独特のダンス音楽を演奏するコンサートは一生忘れることのない感動の瞬間でした！！

ニューイヤー・コンサートは花のほのかな香りとホール内の特殊な雰囲気はもちろん、輝かしい、華やかなプログラムも他の演奏会のプログラム構成とは、曲の種類、性格だけでなく、曲の数、譜面の準備を含めて全ての面でかけ離れていて特別な演奏会です。演奏者として第1部は、思ったよ

り早く新鮮に終わってしまいましたが、第2部は長くて大変。曲数が多いだけでなく、拍手の合間のみが、どんな変わっていく曲目に対応していく上で必要な頭の切り替えに与えられる短い時間。照明もLEDに変わり、そこまで熱くはないですが、緊張感の高いホール内の聴衆だけでなく、生中継で見下されている世界中の皆様にも、いかにリラックスして演奏しているかのように、ウィーンの宝物といっても過言でない1曲1曲の香りを届けられるか。

最初の1音から最後の1音の余韻まで、録音だったら何度録り直しても満足いくまで追求出来る自分の理想の表現を、この演奏会ではいかに「ワンテーク」で伝えられるか？ プログラムが終わりに近づき、アンコールも終わり、「美しく青きドナウ」「ラデツキー行進曲」に入ってやっと聴衆と溶け合い、新年のスタートを盛大にお祝い出来る心境に辿り着くのでは、と感じます。

2020年は色々あり過ぎ、大変な一年ではありましたが、21年のニューイヤー・コンサートでまた私達の宝物を、国境と言葉の限界を感じない音楽で皆様にお伝えさせていただきます！！ よろしくお祈りします。

ウィーン・フィルの団員としてのニューイヤー・コンサートとウィーナ・ワルツは、どういふ存在なのか。父がヴァイオリン、母がピアノ、兄弟3人はヴァイオリン、チェロとピアノを弾く音楽一家。子供の頃は練習（ヴァイオリンとピアノ）と勉強（オーストリアの学校と並行して毎週土曜はミュンヘンの日本語補習校、そして海外子女教育の通信教育）以外は

ニューイヤー・コンサートの バレエを楽しむには？

文 守山実花 ◎バレエ評論家
text by Mika Moriyama

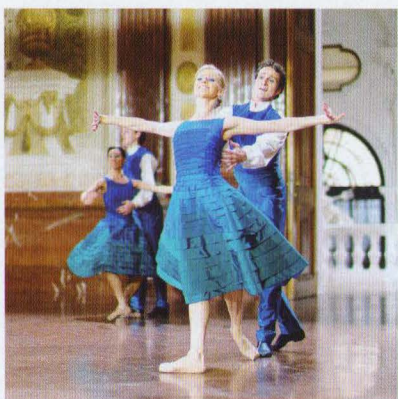
ニューイヤー・コンサートにとってバレエはただの添え物？
なるほど、ここの音楽ファンにとってはそうかもしれない。
でも、ウィンナ・ワルツだって元々はダンスのための音楽。
とびきりのダンサーたちが音楽にのって舞い踊るのは、
ごく当たり前のこと。まして気鋭の振付家が腕を振るえば…。

ク

ラシック・ファンにあまり歓迎
されているとは思えないのが、
ニューイヤー・コンサートにお
けるバレエの存在。バレエ好きからして
も、どうもワンパターンに過ぎると思う
こともあるくらいだから、バレエより臨
場感あふれるホールの中継を見たいと思
うのは当然のことだろう。

ワンパターンになるのには訳がある。
バレエ・シーンの映像は、国会議事堂や
美術史美術館などいわゆる名所でのロ
ケーション収録で、建物全体を映し、カ
メラが寄っていき、扉が開いて中へと進
み、館内の様々な場所を移動していく
のが基本パターン。踊りとともに建物内
部を見せることも重要なのだ。

そのせいか現代の若者が建造物に足
を踏み入るとタイムスリップして束の
間雅やかなダンスを楽しむ、という似た
り寄ったりのプロットが反復されている。
音楽はワルツやポルカ、リノリウムを
引き詰めた舞台の床とは異なり、大理
石や石畳はダンサーの足にとっては大き
な負担であり、超絶技巧などは組み込



2012年ニューイヤー・コンサートの「美しく青き
ドナウ」に出演したウィーン国立バレエのオルガ
エジナ(左)とロマン・ラジク。場所はベルヴェ
デーレ宮殿、振付はダヴィデ・ボンバナ、衣裳は
クリストフ・クレマー

みにくい。

ヴァレンティノ、ヴィヴィアン・ウエ
ストウッドといったファッション・デザ
イナーが担当することもある衣装をど
う見せるのかも問われる、と振付家に
とっては制約の多い仕事であることは間
違いない。

が、基本的構成は守りながら、いか
に独創的な振付や演出を行うのが振
付家の腕の見せ所。2004年(リッカ
ルド・ムーティ)にボリス・エイフマン
が担当した「加速度ワルツ」では、ゲス



2002年
小澤征爾指揮
(キング) KIXM-70
※BD



2004年
リッカルド・ムーティ指揮
(DG) 0730979
※DVD、輸入盤



2005年
ロリン・マゼール指揮
(DG) 0734020
※DVD、輸入盤

2012年
マリス・ヤンソンス指揮
(ソニー) SIBC-158
※DVD



2020年
アンドリス・ネルソンス指揮
(ソニー) SIXC-29 ※BD

トのホセ・カレーニョの技巧、現代感覚
そして盤石のサポート力と表現力をたっ
ぷりと見せだし、06年(マリス・ヤンソ
ンス)はジョン・ノイマイヤー振付でハ
ンブルク・バレエ団のダンサーがゲスト
出演。シックで洗練された感覚のワルツ
「親しい仲」など深い印象を残した。

2012年(ヤンソンス)はヴェルヴ
エデーレ宮殿から3作品が生中継され、
「燃える恋」はクリムトの「接吻」が動
き出すという趣向(振付ダヴィデ・ボン
バナ)だった。

別撮りの録画であることが多いが、2
012年のように生中継の場合もある。
02年(小澤征爾)は、ウラジミール・マ
ラーホフがラクロワの衣装をまとい踊っ
た「美しく青きドナウ」は遠隔同期収
録だった。ウィーン国立歌劇場バレエの
ゲスト・プリンシパルだったマラーホフ
の登場回数が多い。

2005年(ロリン・マゼール)、レ
ナート・ツァネラ振付のポルカ・マズル
カ「心と魂」では秘蔵っ子で売り出し中
のポリーナ・セミノワと共演。

ニューイヤーの映像からはマラーホフ
の美質である細部まで優美かつ繊細な
表現、音楽性、天性のロマンティック気
質を味わうことができる。

群舞はウィーン国立歌劇場バレエ団が
出演。同団の歴史は宮廷バレエ時代にさ
かのぼるが、20世紀後半以降はゲストと
して踊ったルドルフ・ヌレエフ、マラー
ホフ、そして2010年から芸術監督を
務めたマニエル・ルグリと深く結ばれ
発展した。

ルグリ監督時代には、イリ・ブベニチ
エクや前述のボンバナなどコンテンポラ
リーの振付家が起用され、現代バレエの
動向を反映し、優美一辺倒ではない動き
のヴァリエーションがもたらされるよう
になった。

またルグリ(自身は1997年にゲス
トとして登場)はゲストよりもカンパニ
ーのダンサーを積極的に起用、構成にも
様々な工夫が見られ、ルグリ時代の最後
を飾る2020年(ネルソンス)ではオ
ペラ座時代の同僚ジョゼ・マルティネス
を振付家に迎え、映像作品として完成
度の高いものを作り上げている。

「どうにもしようのないことを、忘れられる人は幸せ！」

「こうもり」の第1幕、元カレのアルフレードと人妻のロザリンデは、ダンナの留守にトカイワインを飲みながら、乾杯する。「どうにもしようのないことを、忘れられる人は幸せ」と歌いながら。

1874年4月5日に曲が初演されたとき、このフリーズが大人気になったという。どうにもしようのないこととは？ じつは当時のウィーンは暗い時代だった。フランツ・ヨーゼフ1世の治世下、大規模な都市改造が行われ、リング通りの建設や立派な建物が建てられ、ウィーンは一時パブル景気に沸いた。

しかし、ハプスブルク帝国の落日には歯止めがかけられず、起死回生の手段として1873年に開催されたウィーン万博も失敗に終わった。初日から8日後に株が大暴落したのだ。「暗黒の金曜日」といわれ、自殺者が急増、さらにコレラも蔓延して3000人が亡くなった。

それから11カ月後、人々は、どうにもしようもないことを忘れるために、こぞ劇場の扉を開けたのだ。

「ワルツ王」の新生面を開いたオペレッタ

「こうもり」が誕生するきっかけは、オッフェンバックだった。1860年代に「天国と地獄」がウィーンで大ヒット。64年にオッフェンバックがウィ

を持って余しているロシアの公爵で、招かれるのはフランス人やハンガリー人を名乗る偽名の人々。女優と名乗る女中もいる。

ここは世界各国から集まった仮装舞踏会なのだ。一晚中浮かれて踊り明かし、朝になれば夢が覚め、現実が待っている。パブル後には崩壊があるのを誰もが知っているけれど、浮かれずにはいられない。

「こうもり」がいつの世も変わらぬ人気を保つのは、「人生の機微」をみごとに映し出しているからだ。いろいろあった人生も「あれもこれもシャンパンのせい」にして、幕引きするのもウィーン気質だ。

「こうもり」の表・裏
過激な演出も

「こうもり」はお話が能天気だし、音楽は軽快で美しいメロディーが満載だ。澁刺とした序曲から「さあ、楽しむぞ！」というウキウキ感に満たされる。原作は大阪日恒例の晩餐会だから、世界各国の歌劇場では大晦日から元旦にかけて上演されるのが通例だ。

かつては2幕に豪華なゲストが勢揃いする祝祭ムードの演出が多かったのだが、近年は少し変化が起きている。作品には執念深いファルケ博士が画策する「こうもりの復讐」というテーマも潜んでいるからだ。

インを訪れたとき、ヨハン・シュトラウス2世にオペレッタの作曲を薦めたという。それまで父の後を継いで宮廷舞踏会の音楽監督を務め、「ワルツ王」といわれたシュトラウス2世だが、流行の新しい舞台ジャンルに果敢に挑戦する。

3作目が「こうもり」だった。シュトラウスに曲を依頼したのは、アン・デア・ウィーン劇場の支配人マックス・スタイナー。彼はフランスで大評判になっていたメイヤックとアレヴィが書いたボードヴィル「レヴェイヨン」(大舞踏会)の上演権を買い、カール・ハフナーとリヒャルト・ジュネに台本を依頼した。



1900年ごろのアン・デア・ウィーン劇場。1874年に「こうもり」が初演された(カール・ヴェンツェル・ザイチェク画)

DATA

喜歌劇「こうもり」 Die Fledermaus

台本: カール・ハフナー&リヒャルト・ジュネ

作曲: 1874年

初演: 1874年4月5日、アン・デア・ウィーン劇場

あらすじ

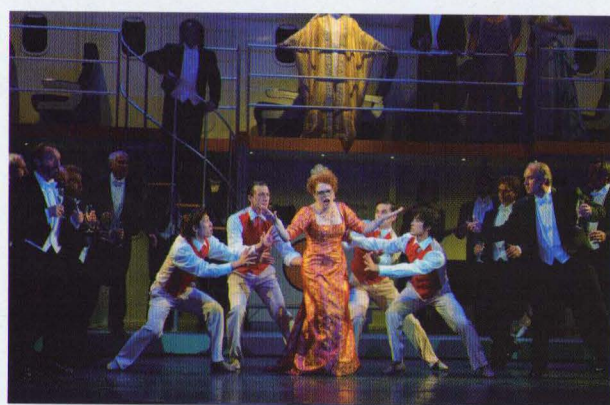
役人を殴って数日の禁固刑を申し渡された金持ちのアイゼンシュタイン。その夜から刑務所に入ることになっているが、友人のファルケが、今晚オルロフスキー公爵邸で仮装舞踏会があるから、そこで楽しんでから刑務所に入っては？と提案。2人は喜び勇んで赴くことに。妻のロザリンデは、うわべは夫の身の上を心配するものの、かつての恋人アルフレードとの逢引きする絶好の機会、と喜ぶ。召使のアデーレもまた、お婆の病気をでっちあげ、暇をもらって舞踏会に向かう。それぞれの思わくが舞踏会でもつれ合っ

人生を楽しむ
ウィーン気質が反映

ウィーンは「三拍子の都」といわれる。街中にワルツが流れ、冬になると至るところで舞踏会が開かれる。いまでも1シーズンに400回以上もの舞踏会が開かれるという。ワルツがウィーンで人気になったのは1800年ごろ。郊外には何百人も何千人も収容できる巨大なダンス・ホールが次々と誕生し、14年のウィーン会議は「会議は踊る、されど進まず」と揶揄された。

1844年にデビューしたシュトラウス2世はいくつものダンス・ホールを掛け持ちする超売れっ子の指揮者だった。70年頃に彼が作曲したワルツは「酒・女・歌」「人生を楽しむ」など、ウィーンっ子の人生観にぴったりの曲ばかり。辛いことには目をつぶって、人生を楽しむ。ウィーン気質が市民に浸透している。「こうもり」誕生の土壌はすでに出来上がっていたのだ。

物語の主人公アイゼンシュタインは銀行家。どうやら財産の利子で暮らしているらしい。陽気なウィーン娘のお手伝いさんもある。見せ場は第2幕。ウィーン郊外の温泉地(バーデン?)で、謎の夜会が開かれる。招くのは金



2012年、ザルツブルク・ランデステアターで上演された「こうもり」の舞台から ©Asher Smith

仮装舞踏会がファルケが念入りに練った復讐劇だった。

作品に潜む毒の部分の拡大解釈し、物語を換骨奪胎して、とんでもない舞台に仕上げたのが、お騒がせ演出家のハンス・ノイエンフェルスだった。2001年のザルツブルクでこの舞台を観て度肝を抜かれた。

舞台はナチを想わせる軍服が乱舞し乱痴気騒ぎ。ドラッグあり、セックスあり、障害者差別あり、教会否定ありと、世の中のタブーを全部出して、お上品なザルツブルクの聴衆に爆弾を落としたのだ。ノイエンフェルスは「こうもり」のゆるま湯的偽善世界を暴き出し、聴衆に苛酷な現実世界を突き付けたのかも知れない。

1998年に来日したベルリン・コミッシェ・オーパーのハリー・クプ

ヘルベルト・フォン・カラヤン(指揮)
ウィーン・フィル&ウィーン国立歌劇場合唱団、ヴァルデマル・クメント(アイゼンシュタイン)、ヒルデ・グーデン(ロザリンデ)、エリカ・ケート(アデーレ)、ヴァルター・ペリー(ファルケ)、エーヴェルハルト・ヴェヒター(フランク)、ほか、ゲスト:レナター・テバルディ、ビルギット・ニルソン、マリオ・デル・モナコ、ほか
収録: 1960年 (ユニバーサル) UCCD-3940 (2CD)

発売当時から大評判になった超豪華ゲストが登場する特別バージョン。ゲスト部分は別にローマで録音されたという。今では信じられないレジェンドがずらりと第2幕で得意曲を披露する。

カルロス・クライバー(指揮)
バイエルン国立歌劇場管&合唱団、エヴァーハルト・ヴェヒター(アイゼンシュタイン)、パメラ・コバーン(ロザリンデ)、ヴォルフガング・ブレンデル(ファルケ)、ブリギッテ・ファスベンダー(オルロフスキー)、ほか、オットー・シェンク(演出)
収録: 1986年12月30日、31日、バイエルン国立歌劇場ライブ (DG) 0734015 (DVD)

なんといってもクライバーの指揮がすばらしい。それにライブ。ヴェヒター、ブレンデル、ファスベンダーと歌手も豪華。第2幕の「雷鳴と電光」もまさに稲妻が光るよう。

テオドル・グシュルバウアー(指揮)
ウィーン国立歌劇場&合唱団、ベルント・ヴァイクル(アイゼンシュタイン)、ルチア・ポップ(ロザリンデ)、エーリッヒ・クントツ(フランク)、ブリギッテ・ファスベンダー(オルロフスキー)、ワルター・ペリー(ファルケ)、エディタ・グルペローヴァ(アデーレ)、ほか、オットー・シェンク(演出)
収録: 1980年、12月31日、ウィーン国立歌劇場ライブ (TDK) TDBA0089 (DVD)

ヴァイクルのアイゼンシュタインと、グルペローヴァのアデーレが巧い。ロザリンデはポップと豪華。ウィーンの正統派の華やかで楽しい「こうもり」だ。

アンドレ・プレヴィン(指揮)、ウィーン・フィル&ウィーン国立歌劇場合唱団、ヴォルフガング・ブレンデル(アイゼンシュタイン)、キリ・テ・カナワ(ロザリンデ)、トム・クラウゼ(フランク)、ブリギッテ・ファスベンダー(オルロフスキー)、リチャード・リーチ(テノール)、オラフ・ペーア(ファルケ)、エディタ・グルペローヴァ(アデーレ)、ほか
収録: 1990年 (Decca) 4784159 (2CD)

セッション録音ということもあり、音質が素晴らしい。ウィーン・フィルの演奏も。当時の大スターがずらりと顔を揃えている。テ・カナワとブレンデルは2人とも美声で素晴らしいコンビ。リーチも若々しい声を聴かせる。ここでもグルペローヴァが大活躍。

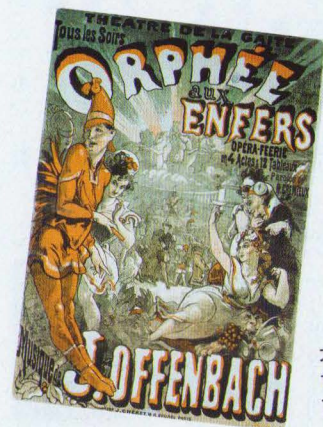
しゃれでファンタジーに溢れた夢の舞台。天才のみが成し得た傑作だ。

「こうもり」は、お決まりの古びたギャグやお約束のオチを楽しむエンターテインメントではあるけれど、内部には真綿に包まれた猛毒を内蔵する取扱注意のキケン作品でもある。

シャンパン飲みつつ耳に心地よいメロディを聴いているうちは天国。でも、くれぐれも「こうもりの復讐」にはご用心！

自作のオペレッタがウィーンで好評、
同地を訪れていたオッフェンバック。
既にワルツ王として一世を風靡、
劇場側からオペレッタの作曲を要請されていたが、
躊躇していたシュトラウス2世に、
「貴男もオペレッタを書いてみればどうか？」と
背中を押したのはオッフェンバックだった。

オペレッタから オペレッタへ



大がかりな改訂を施した
1874年版「地獄のオル
フェ」のポスター

～オッフェンバック、
そしてパリとウィーン～

●パリという大都会だからこそ
生まれた舞台芸術

日本では喜歌劇と訳すオペレッタ
Opérette。セリフのやりとりを交えな
がら、世相を皮肉り、男女の化かし合
いを笑うといった、ドラマを明らかに
楽しみ味わう舞台芸術である。

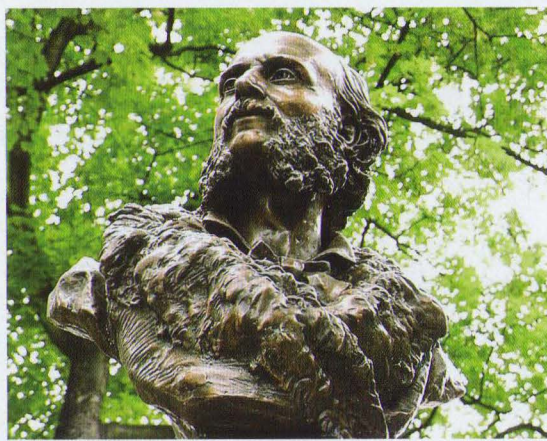
オペレッタの発祥は19世紀中盤のパ
リにおいて。世界中から人が訪れる花
の都では、様々な気質の人間がすれ違
うが、そこに生じる一方的な優越感や
コンプレックス、もしくは勝手な偏見
を「田舎くさい」と一刀両断し、面白
おかしく洒落のめすのがオペレッタ。
大都会だからこそ生まれた舞台芸術な
のだ。

オペレッタは仏語でオペレット
Opéretteになる。フランスでは18世
紀からオペラ・コミック様式（セリフ
入り仏語オペラ）の人気が高く、ハッ
ピーエンドの筋立てを基本とすること
で市民層に広く愛された。それゆえ、
もっと砕けた雰囲気のもと、毒のある
笑いを追求するオペレットは「オペラ・
コミックの不肖の娘」と呼ばれもした
（サン＝サーンスの言）。艶笑譚も扱い、
観客の含み笑いや引き起こすので不肖
の娘なのである。

●パリの2大オペレッタ作曲家
（オッフェンバックとエルヴェ）

それでは、オペレットを発展させた
2人の作曲家を紹介。ひとりはドイ
ツのケルン出身のジャック・オッフェ
ンバック（1819～80）である。仏
政府の劇場規制で1幕ものの小品しか
許されなかった彼が、興行の成功で新
たなライセンスを獲得、2幕立ての大
掛かりな《地獄のオルフェ》（天国と地
獄）を発表すると（1858、ブフ＝
パリジャン劇場）、それが空前のヒッ
トを記録。あつという間に、時代の潮
流に乗ったのである。

そしてもう1人が、オッフェンバッ
クの好敵手エルヴェ（苗字のみの芸名、
1825～92）。エルヴェは年長のオ
ッフェンバックよりも先に活動を始め
たが、代表作《小ファウスト》（18
69、フォリ＝ドラマテイク劇場。グ



パリ・モンマルトル墓地のオッフェンバック像

ジャック・オッフェンバック

Jacques Offenbach
(1819～80)

ドイツ・ケルンに生まれ、フランス
で活躍した作曲家。ユダヤ人の家系
で、1833年、チェロ習得のため、
パリに赴く。50年、コメディ・フラン
セーズの指揮者となり、55年には
ブフ＝パリジャン劇場を立ち上げ、
魅力的な旋律と辛辣な風刺が特徴の
オペレッタを多数上演、ナポレオン
3世による第2帝政期のパリの街を
彩った。オペラ「ホフマン物語」を
未完のまま、パリで逝去。享年61。

文岸純信◎オペラ研究家
text by Suminobu Kishi



オッフェンバックのライバル、エルヴェ



エルヴェのオペレット「小ファウスト」の
楽譜カバー

ンバック旋風に煽られる形で、ウィー
ンの作曲家もオペレッタを作り始めた。

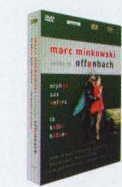
この流れの中、カール劇場と競合す
るアン・デア・ウィーン劇場の理事會
が、興行を活性化させるべく目をつけ
た作曲家がヨハン・シュトラウス2世
（1825～99）であった。既にワル
ツ王として一世を風靡していたシュト
ラウス2世は、舞台作品を書けという
要望には躊躇したという。音楽学者カ
ーナーによると、彼は、テキストに曲
をつける行為を「仕事として制約が多

い」と感じていたらしい。
しかし、そのシュトラウス2世に
「貴男もオペレッタを書いてみればど
うか？」と誘い水を与えたのが、オッ
フェンバックその人であった。音楽学
者ラムは、1864年に両者がウィー
ンで食事を共にした際に助言がなされ
たものと推測するが、もとはケルン生
まれオッフェンバックだけに、言葉
の問題もなく、シュトラウス2世との
意思疎通はやり易かったのだろう。

この対面の後、暫くの試行錯誤を経
て、シュトラウス2世は1871年2
月にオペレッタ《インディゴと40人の
盗賊たち》をアン・デア・ウィーン劇
場で発表、73年1月には《ローマの謝
肉祭》を同劇場で発表しかなりの成功
を得る。そして、74年4月に《こうも
り》が同じくアン・デア・ウィーン劇
場で初演され、ウィンナ・オペレッタ
の最高傑作として、歴史に名を刻んだ
のである。

●ウィーン・オペレッタの祖、
スッペ

なお、この《こうもり》初演の頃、
先述のカール劇場にはシュトラウス2
世の先輩格フランツ・フォン・スッペ
（1819～95）が陣取り、「ウィンナ・
オペレッタの祖」と称される大きな存
在感を示しながら、あつからんとし
た曲調で親しみやすい《美しきガラテ
ア》（1865）や《ボッカッチョ》（1



●オッフェンバック：
喜歌劇《天国と地獄（地獄のオルフェ）》
ナタリー・ドゥセ（ソプラノ）
ロラン・ナウリ（バス・バリトン）、ほか
マルク・ミンコフスキ（指揮）
リヨン歌劇場管＆合唱団、ロラン・ベリ（演出）
収録：1997年
（Arthaus）107506（DVD）※輸入盤



●レハール：喜歌劇《メリー・ウィドウ》
エリーザベト・カーレス（ソプラノ）
ペーター・エーデルマン（バリトン）、ほか
コンスタンティン・シェンク（指揮）
ブラティスラヴァ・フィル
マイケル・モラー（演出）
収録：1975年
（DG）0734437（DVD）
※輸入盤



●レハール：喜歌劇《クロクロ》
ジークリンデ・フェルドホーファー（ソプラノ）
ゲルト・フォーゲル（バリトン）、ほか
マリウス・ブルケルト（指揮）
フランツ・レハール管
パート・イシュル・レハール音楽祭合唱団
収録：2019年
（CPO）777 708-2（2CD）
※輸入盤



●ヨハン・シュトラウス2世：
喜歌劇《ジプシー男爵》
ヴォルフガング・ブレンデル（バリトン）
ジークフリート・イエルザレム（テノール）、ほか
クルト・アイヒホルン（指揮）
シュトゥットガルト放送響
アルトゥール・マリア・ラーベナルト監督
収録：1975年
（DG）0734437（DVD）※輸入盤

879)を世に送っていた。

一方、シュトラウス2世はそのままアン・デア・ウィーン劇場を根城とし、『こうもり』に加えて、オペレッタの枠を超えるドラマ性を有する『ジプシ1男爵』(1885)も発表した。ただし、スッペもシュトラウス2世も、それぞれの劇場の専属というわけではなく、たまには相手の縄張りで作を発表することも行っていた。

ちなみに、このスッペとシュトラウス2世の競合期を、オペラ史の観点からは、ウィンナ・オペレッタの「金の時代 Goldene Operettenära」と呼んでいる。これは、20世紀初頭からのフランス・レハール(1870~1948)の活躍ぶりを、オペレッタ界の第2の黄金期とみなして「銀の時代 Silberne Operettenära」と呼んだことに由来する。

●「銀の時代」の名作オペレッタ 『メリー・ウイドウ』ほか

この銀の時代では、レハールの代表作『メリー・ウイドウ』(1905)と、それに並ぶ人気作『ルクセンブルク伯爵』(1909)がアン・デア・ウィーンで初演され、カール劇場ではオスカー・シュトラウス(1870~1954)の『ワルツの夢』(1907)



アンドレ・メサジェ (1921年)

が大成功を収めた。

また、ハンガリー出身のエメリッヒ・カールマン(1882~1953)は、オペレッタ界第3のテアターたるヨハン・シュトラウス劇場で『チャールダーシュの女王』(1915)を初演。ハンガリーのリズムが醸し出す濃厚な地方色が特徴的なヒット作として、今日まで衰えぬ人気を誇っている。

かくのごとく、劇場が競い合うと業界は潤い、作曲家たちも鎬を削ってより良い作品を生み出す。言語も人種も違うパリでもウィーンでも、状況は全く同じであった。

現代のウィーンでは1898年開館のフォルクスオーパーが喜歌劇を一手に引き受けるが、19世紀のオペレッタ界を隆盛に導いたのは、パリでもウィーンでも、多くの劇場と作曲家の真つ当なライヴァル意識であった。しかしながら、この2都では、喜歌



メサジェの「ミシュ家の可愛い娘たち」のポスター
(1897年の初演時)



■メサジェ：喜歌劇『ミシュ家の可愛い娘たち』

ヴィオレット・ボルシ(メゾ・ソプラノ)
アンヌ＝オロール・コシェ(ソプラノ)、ほか
ピエール・デュムソー(指揮)
ロワール地方国立管
アンジェ・ナント・オペラ合唱団
収録：2018年
(Bru Zane) BZ-1034 (2CD) ※輸入盤



■「ウィーン、わが夢の街」オペレッタ&ヒット・ソングの魅力

(シュトルツ：「ウィーンは夜がいちばん美しい」/ジューズ・スキュー)「ウィーン、わが夢の街」、ほか全19曲
ヨナス・カウフマン(テノール)、ほか
アダム・フィッシャー(指揮)、ウィーン・フィル
収録：2019年
(ソニー) SICC-2159

劇が扱う題材の志向性が少しく違っている。先述のように、田舎っぽさを好まないパリでは、既存の権威に反発する気風が強く、オペレッタのステイジでも「有名どころを茶化す」シーン作りがしきりと行われた。

それに対してウィーン&独語圏のオペレッタは、もう少し柔らかな人情味を帯びるもの。『こうもり』は中年夫婦の浮気心を互いに赦して大団円となり、レハールの作では、大人の男女が互いの心の傷を癒やして再び結ばれる『メリー・ウイドウ』や、王子と踊り子が互いの立場を弁えた結果、身分違いの恋を諦める『ロシアの皇太子』(1927、ベルリン)、西欧と東洋の風習の違いが悲しい別れを呼ぶ『微笑みの国』(1929、ベルリン)といったように、「涙の痕」が心に滲む物語が好んで選ばれた。

実は、レハールのこの姿勢は、当時



レーナルド・アーン(1907年)

の音楽評論家たちからたびたび攻撃的になっていった。彼らの主張は、「喜歌劇なのだからカラッと笑わせろ」というものである。しかし、レハールはそれを黙殺。自分がより良い音楽を生み出せるテーマとして、涙交じりのプロットを選び続けた。我々はえてして、『メリー・ウイドウ』の甘美なメロディだけでこの作曲家を考えがちだが、レハールの心には、知られざる闘志が燃え盛っていた。

●メサジェとアーンのオペレッタ

ところで、レハールと同時代の作り手で、パリで成功していた人々といえは、先輩格のアンドレ・メサジェ(1853~1929)や、ベネズエラ生まれでバリトン歌手としても成功したレーナルド・アーン(1875~1947)になるだろう。この機に纏めて紹介しておきたい。

まず、メサジェはオペラ・コミックとオペレッタを並行して作曲。最近録



1923年初演時のアーンのオペレッタ「シブーレット」

音が出た『ミシュ家の可愛い娘たち』(1897、ブッフ・パリジャン劇場)など、持ち前の「素直な音楽美」(R・シュトラウスの辞)が満載の爽やかなオペレッタである。

物語は、血の繋がらない2人の娘が姉妹として育ち、実の親にもどちらがどちらか見分けられなくなるといった現実離れしたもの。しかし、娘たちのテーマソング(ブランシュ・マリとマ

リ・ブランシュ)の清々しさを頂点に、悩まず楽しめる佳品になっている。

一方のアーンのオペレッタでは、貴族の青年と村娘の恋愛話で、数年前にパリでも蘇演された『シブーレット』(1923、ヴァリエテ劇場)が最も有名だが、この『シブーレット』の2年後の作で、神童のパリ滞在時の淡い恋を描いた『モーツァルト』(1925、パリ、エドワード7世劇場)以降は、『Comédie musicale コメディ・ミュージカル』と銘打つ作品が大半になった。この『モーツァルト』の楽譜は驚くほどに薄いが、その理由は、コメディ・ミュージカルのスタイルが「セリフ部の分量が歌と同じ、もしくは多い」という構造を持つため。仏語の芝居中心で時折歌や音楽というのがこの様式の特徴になっている。

なお、このコメディ・ミュージカルが、オペラ史の観点からは「ミュージカル」の基になったと見なしている。映画が娯楽の主流になった20世紀前半では、歌劇場の舞台でも、筋運びをどんなに進めた方が客席の好みに叶ったのだろう。キャラクター同士がポンポンと歯切れよく対話しながら、たまにキヤッチーなメロディが出てきて耳を和ませる——こうした造りがパリでは主流になっていた。

●オペレッタの時代の終焉

なお、同時期のウィーンでは、レハ

ールが1924年にウィーンのビュルゲル劇場(現存せず)で初演した『クロクロ』によって、「カラッとした笑い」の方向性によって、舵が切り替わる。このオペレッタは、パリの踊り子クロクロと良い仲になったベルビニヤン市長が起す騒動を描くもの。妻に浮気がばれては大変と市長が慌てるさまが乾いた笑いを誘う。

しかし、その後のレハールは路線を元に戻し、先述の『微笑みの国』や『ロシアの皇太子』、大ヴァイオリニストとナポレオンの妹の悲恋もの『バガニ11』(1925、ヨハン・シュトラウス劇場)といった、しみじみとするオペレッタを書き続けた。

ただ、彼が最終作『ジュディッタ』をウィーン国立歌劇場でオペラとして初演して以来(1934)、ドイツ語圏の歌劇場で、オペレッタの新作があまり出てこなくなる。そこには勿論、大戦前の世の空気も影響したことだろう。

ただし、どんな流行でもどんな時代でも、後代の人が振り返る機会は必ず訪れるもの。日本で大人気の『エリザベート』はウィーン発祥のミュージカル、パリの名門歌劇場シャトレ座も近年はミュージカルの興行が主流だが、その客席からいずれ、オペレッタに目を向ける人が出てきてくれればと願う。マイクを通さぬ生の歌声とセリフ回しを大いに楽しみながら、「洒落た大人の笑い」を体感してみたい。

人気が高いオペレッタ、ヨハン・シュトラウス2世の「こうもり」(1874)は、日本でもすっかり年末の風物詩として定着した。男も女も、紳士もメイドも、みんなが自分の欲望を開放し、大騒ぎしたあげく、最後は、アハハと笑って終わりになる。その明るさが1年を締めくくるのにふさわしいとされる。

のだが。実は、このオペレッタは、たいへん陰惨な物語なのではないか。そう私には思えてならないのだ。順を追って説明しよう。

■酔った友人を放置してはいけない

まず、この話には、前史がある。フアルケ博士(鷹という意味だ)、アイ



「こうもり」の舞台より=ピッツバーグ・オペラ 2009年

ゼンシュタイン男爵(鉄石という名前だ)という男の友人ふたり。あるとき彼らは仮装パーティーでどんちゃん騒ぎをしたのだが、最後、酔いつぶれたフアルケをアイゼンシュタインは放置して帰ってしまった。フアルケはこうもりの仮装をしたままで、恥をさらしながら帰宅せねばならなかった(鷹という名を持つ人間が、こうもりのかつこうをしているのがよけいに可笑しいのである)。以来、フアルケはアイゼンシュタインへの復讐を虎視眈々と狙っていたのである。

酔った友人を放置してはいけない。現代ならば、何かあったら罪を問われる。しよせん、おふざけで起きたことを執念深く恨みに思っていない。人間性が疑われるし、野暮の骨頂でもある。まず、このオペレッタは、始ま



「チャールダーシュの女王」が初演されたウィーンのヨハン・シュトラウス劇場。今はない

実は悲しい オペレッタ

喜劇と悲劇の違いは、それを身をもって体験して苦悩するか、距離を取って愚かさを笑えるかの違いであらう。だとしたら、オペレッタとは、悲劇を遠くから眺めて喜劇へと読み替える、醒めた賢さなのかもしれない。

文 許光俊◎ドイツ文学
Text by Mitsutoshi Kyo

る前に、こういう問題がある。

さて、幕が開くと、アイゼンシュタインが役人を殴ったので、収監されると騒いでいる。軽妙な音楽に騙されてはいけない。男爵が役人を殴ったのだ。たとえば、現代の日本で国会議員や芸能人が役人を殴ったらどうなるか。たいへんなスキャンダルである。

■階級闘争の物語

このオペレッタは、一種の階級闘争の物語でもある。一番下にいるのは、小間使いのアデーレをはじめとする労働者。彼女たちは、階級で上位の男た

ちの性的な愛玩物となつて快適な生活を送るべく、劇場への出演を目指している(現代日本において、家柄や学校の成績に恵まれない者が、芸能界やスポーツ界やユーチューブでの成功を目指す構図と似ている)。

他方、男爵や博士たちは、日々に退屈して、刺激を求めている。男爵夫人ロザリンデも、いけないこととは知りつつ、不倫への誘惑を感じている。そうした彼ら以上に退屈しているのが、金持ちすぎて世界に飽きているオルロフスキー公爵である。腐敗した有産階級と呼ばれても仕方あるまい。

舌がよく回らない弁護士の名前はブリントという。盲目という意味の名である。ハンガリーの貴婦人に化けたロザリンデは、強く訛ったドイツ語を話す。2人の演技は笑いを誘う。だが、

吃音や訛りを笑うというのは、あまりよい趣味とは言えないのではないか。

結局、このオペレッタ全編は、金と権力を持つ人間、オルロフスキーの退屈しのぎの茶番でしかない。オルロフスキーにとっては、フアルケの自尊心も、アイゼンシュタイン夫婦の危機も、アデーレの階級上昇の夢も、しよせん下々の他人事、1日たてば忘れてしまう些末事にすぎない。

19世紀は、ヨーロッパが急速に豊かになって、「退屈」が普及し、「憂鬱」が流行した時代だった。「こうもり」には、それを恐れてむりやり笑う側面がある。

「すべてはシャンパンのせいだ」と酒に罪を着せて大団円の幕切れ。けれど、もちろん明日からも同じような日々が続くはずだ。それを無間地獄と呼ぶ。

■矛盾な作品名

シュトラウスには「ジプシー男爵」というオペレッタもある。いつからかジプシーという語をロマ族と言い換えるようになったNHKも、さすがにこれを「ロマ男爵」などとは呼ばぬであろう。乞食王子のようなもので、異質なものがむりやり一緒にされているのがミソだ。

フランツ・レハール(1870~1948)の「メリー・ウイドウ(陽気な未亡人)」(1905)も同様の矛盾

「ジプシー男爵」の舞台より



的な作品名を持つ。未亡人とは、喪服を着た悲しげなものである。まずタイトルで人目を引く。

ストーリー的にいささか似ているのがチャイコフスキーの「エフゲニ・オネーギン」(1879)だ。あちらは「今頃好きだと言われても遅いわ」という悲しい話である。他方、「メリー・ウイドウ」は、「今からでも遅くないよ」である。世の中がうまく回って、好き合う男女は結ばれる。逆に、周囲の状況次第では、そうはならなかったということだ。



「メリー・ウイドウ」のロンドン初演(1907年)は大成功を収めた。ハンナを歌ったリリー・エルジー(第3幕)

レハールには「微笑みの国」(1929)というオペレッタもある。といっても、ニコニコ嬉しい笑みを浮かべているわけではない。悲しみを微笑で覆い隠すという東洋の話である。

レハールとともに、「ウインナ・オペレッタの銀の時代」の立役者となったエメリッヒ・カールマン(1882~1953)は、ハンガリー出身である。もともと成功した「チャールダーシュの女王」も、チャールダッシュという民族的大衆的な踊りと、女王(と意識されているが、正確には侯爵夫人)という語の結びつきが目をひく。

この作品が書かれたのは1915年。第一次世界大戦が始まっていた。この戦争によって、オーストリア・ハンガリー二重帝国は消滅する。もしかした

ら、オーストリア・ハンガリーという結びつきもチャールダーシュ女王という組み合わせのごとくだったのかもしれない。

カールマンはほかに「サーカスの女王」「シカゴ公爵夫人」「アリゾナ・レディ」「ミス・アンダーグラウンド」といった、矛盾な作品名を好んだ。

■ひとが喜劇と思えば喜劇

喜劇とは、ひとが喜劇と思えば喜劇であり、悲劇はその逆ではなからうか。たとえば、シェイクスピアの代表的な悲劇『リア王』は、もうろくした老人がしでかす馬鹿げた事件と見なせば、喜劇に仕立てられるだろう。さる国での皇族の恋は、当人たちがすれば深刻な『ロミオとジュリエット』状態なのかもしれないが、一般大衆からすれば、単にのぼせ上った若気の至りにしか見えない。

ただ、喜劇と悲劇の違いは、それを身をもって体験して苦悩するか、距離を取って愚かさを笑えるかの違いであらう。だとしたら、オペレッタとは、悲劇を遠くから眺めて喜劇へと読み替える、醒めた賢さなのかもしれない。そして、シュトラウスの時代には、まだ笑いで悲惨を隠すことができたが、レハール、カールマンと時代を下るに従って、いかにも都合がよいハッピーエンドすら難しくなっていたのだ。た

派手な舞踏会場は姿を消したが、舞踏会はいまも開かれ、過去の熱気をよみがえらせている。
というより、過去の「栄光」をよみがえらせようとして、それに成功したのがいまのウィーンではないか。
半世紀のあいだに大帝国の首都はもう一度金ピカになった。

ウィーン、金色のワルツの都

過去の栄光を
よみがえらせた首都

文堀内修◎音楽評論家
text by Osamu Horuchi

ウィーンでワルツは聴こえない？

ウィーンはワルツの都である。
どこが？と思った。半世紀ばかり前の話だ。

市立公園には確かにヨハン・シュトラウス像があつて、ヴァイオリンを奏でている。だが像は黒ずんだ青銅色で、シュトラウスの頭は真っ白だ。鳩が糞を落とすにはもってこいの標的なものだから無理もない。もちろんいくら耳を澄ませても、シュトラウスが奏でるワルツの音は聴こえない。

フォルクスオペラは当時オペレッタとミュージカルが主の劇場だったが、「こうもり」だろうが「メリー・ウィドウ」だろうが空席がある。街はずれ

のオペレッタ映画を上映する映画館にも入るのは老人だけ。さすがに大晦日の国立歌劇場の「こうもり」と元旦のムジークフェラインの「ニューイヤー・コンサート」は盛況だが、客は地元の人ばかりだった。ウィーン・フィルは大晦日と元旦以外、ウィーン・ワルツを演奏せず、町のあちこちでワルツが聴こえる、なんてことはなかった。

だがある夏の夕方、市立公園裏手の川辺を通りかかり、薄暗がりの中、公演に面したクアサロンから聴こえる微かなワルツに合わせて踊る何組かを見た時、そうだ、ここはワルツの都だった、と気づいた。

寒さが厳しくなり、謝肉祭（カーニバル。四旬節の前の時期で、今季は11

月から2月まで）に入るころにはたくさんさんの舞踏会が開かれている。

話の種にオペラ座の舞踏会に行ってみるか、券を買いかけたことがある。スモーキング（「タキシード」）でもいいかと尋ねたら、「いいえ、フランク（「燕尾服」）をお召しください」と言われて断念した。話の種のために燕尾服を脱ぎ替えるわけにはいきませんからね。

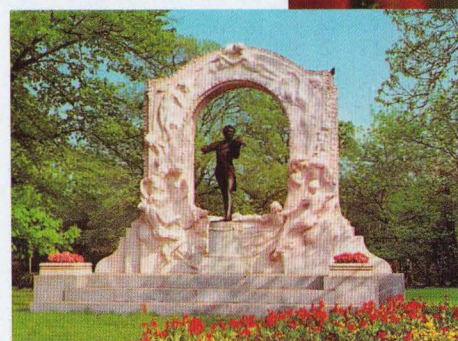
ずっと後になって、日本から取材に出かけた友人が「燕尾服を借りたんだけど、これがよく出来て、誰にでも合うように調節できるんだ」と教えてくれた。

今やピカピカの町ウィーン

時は移り、ウィーンはピカピカのワ



1921年、彫刻家エドムント・フォン・ヘルマーによって作られたヨハン・シュトラウス記念像（ウィーン市立公園）。元々、このヨハン2世像は金色だったが、35年に黒に塗られ、91年、再び金色に戻された



ルツの町になった。元旦のウィーン・フィル、ニューイヤー・コンサートは衛星中継され、世界で最も多くの人が聴くコンサートになっている。

オペラ座の舞踏会だって、毎年華やかなゲストが登場する催しとして世界中に知られている。開かれる舞踏会数は毎年1000を越え、オペレッタの人気は高まって、世界中に広がって、ファンが本拠地ウィーンを訪れている。でもそれは少し前までの話だ。コロ

ナのおかげで、ウィーンはいまワルツの町でも音楽の都でもなくなっている。ここでは昨日までの、そして来年ならぬ再来年の、ワルツと舞踏会の都を語ることにしよう。

まずウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートは、半世紀前はもっぱらコンサートマスターだったボスコフスキーが指揮し、ウィーンの人々に楽しませていたが、いまは人気指揮者が登場する華やかな催しとして、日本を含む世界中の人々に注目されている。2021年にも、リッカルド・ムーティ指揮で行われる予定になっている。大晦日には国立歌劇場をはじめウィーン中の劇場で「こうもり」が上演される。ムジークフェラインでは翌日、つまり元旦の午前11時から始まるニューイヤー・コンサートとまったく同じジルヴェスター・コンサートが、こちらは夜に開かれる。

無数に行われる謝肉祭の舞踏会

でも、ワルツは踊ってこそ、という人には、ホーフブルク宮殿で開かれる「皇帝舞踏会」がお勧めだ。大晦日の大騒ぎは、宮殿の大広間で踊りながらあるいはシュテファン寺院前で花火を見上げながらに限る。

ウィーンの謝肉祭（「ファッシング」）は11月11日に始まり、「灰の水曜日」の前日、つまり「謝肉祭の火曜」（2021年は2月16日）まで続く。この間山ほど舞踏会が開かれる。舞踏会カ



ウィーン国立歌劇場で毎年2月、灰の水曜日の前の木曜日に行われる大舞踏会「オペルンバル」

レンダーに載る名称で、主催者の見当がつく。

薬屋に猟師、花屋にアカデミーと、なんでもある。会場だってホーフブルク宮殿、市庁舎といろいろだ。ウィーン・フィルの「フィルハーモニーカー・バル」はムジークフェラインで、「ボンボン・バル」（お菓子屋さんですね）はコンツェルトハウスで開かれる。ウィーンの舞踏会の最高峰は謝肉祭最後の木曜日に開かれるオペルンバル。オペラ座舞踏会だ。会場は国立歌劇

場だが、2日がかりで装飾・改装される。客は5000人ほどで、スタッフを入れて7000人ほどで、夜を明かす。入場は20時半過ぎで、女性は「格式が高く長いドレス」、男性は「黒の燕尾服」でやってくる。昔は女性は深夜まで仮面をつけたが、いまは仮面なし。

舞踏会は22時にツィラー作曲のファンファレで幕を開ける。セレモニーのあと踊りの時間になる。あちこちで150人の音楽家が演奏するのはワルツばかりじゃない。でも24時には「こ

うもり」のカドリーユと決まっている。しめくくりはライムントのオペレッタ「妖精の国の娘、あるいは億万長者の農夫」からの「ほっそりした同朋たち」のワルツだ。お開きになるのは朝の5時だから、近くのカフェ（一番近いのはザッハーですね）で朝食をとる人も多い。通勤の人と夜会服の男女が交錯するのがウィーンの謝肉祭の朝というわけだ。

1815〜16年のウィーン会議が起源だというのが、オペラ座舞踏会の始まりは1877年、ヨハン・シュトラウス2世が宮廷歌劇場オーケストラを指揮した舞踏会が始まりとされる。帝国滅亡で途絶えたが1921年に再開され、第2次大戦のあとは56年に再開している。ウィーン・ワルツが世界を席巻した19世紀の半ば、ウィーンには「シユペール」や「新エリジウム」のような豪華な舞踏会場が林立して、市民全員が毎晩踊り回ったという（明治の日本も真似してはみたのだが鹿鳴館はほんの数年しかもたなかった）。

派手な舞踏会場は姿を消したが、舞踏会はいまも開かれ、過去の熱気をよみがえらせている。というより、過去の「栄光」をよみがえらせようとして、それに成功したのがいまのウィーンではないか。半世紀のあいだに大帝国の首都はもう一度金ピカになった。市立公園のヨハン・シュトラウス像も金ピカになり、耳を澄ませば黄金色のワルツが聴こえてきそう。ウィーンはワルツの都である。

ウィンナ・ワルツと指揮者の相性いろいろ

文 鈴木淳史
text by Atsufumi Suzuki

かつて演奏家には「職分」があった

作品のなかには、特定の演奏家だけがレパートリーにする「特殊な領域」がある。

たとえば、かつては、ブルックナー指揮者だの、マーラー指揮者だのといった「職分」があった。ヴァントやチエリビダツケなど、ブルックナーを得意とする指揮者は、マーラーには見向きもせず、といったように。そして、そういった垣根は、とりわけ最近のメジャー系といわれる指揮者にはあまり見受けられなくなった。

楽譜さえあれば、誰でもアブローチできるのがクラシック音楽の特徴だ。グローバル化などといった言葉が生まれるはるか昔から、そうした性質をもっていた音楽。固有性や特殊性が時代を経ることで薄れてくるのは当然といえるのかもしれない。

「適度なヌルさ」が必要な特殊音楽

そのなかで、19世紀のウィーンで生まれ一世を風靡したウィンナ・ワルツやポルカは、そのウィーンという土

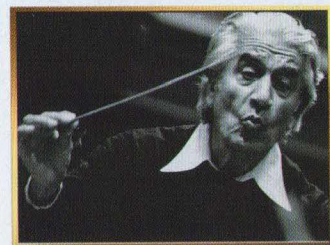
シュトラウス・ファミリーの音楽には、「ウィーンらしい」独得な拍の引き延ばしのほかに、軽快で力みがなく、あまり熱くなったり、冷やかであつても困る、適度なヌルさが求められる。だが一方で、指揮者の個性旺盛なアブローチや時代考証的演奏もありなのが、この一家の音楽なのである。

地柄ゆえに、特殊性を保っているようにみえる。その音楽が、世界各地の演奏家によって盛んに取り上げられていても、本場はやっぱりウィーンじゃないか、と云う風潮だ。

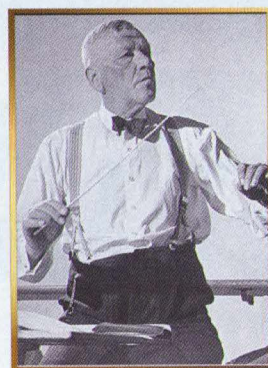
少なくとも、こういったものは、今やブルックナーやマーラーではちよつと考えられない。

シュトラウス・ファミリーの音楽には、「ウィーンらしい」独得な拍の引き延ばしのほかに、軽快で力みがなく、あまり熱くなったり、冷やかであつても困る、適度なヌルさが求められる。そういうスタイルは、おそらくはクレメンス・クラウスが作り出し、それをオーケストラ側が継承することで、伝統になったのではないか。

長年ニューイヤー・コンサートを振ったボスコフスキーは、オケ任せの自動運転状態だったし、「ヌルさ」のセンスがあるカラヤンには、相性が抜



セルジュ・チエリビダツケ (1912~96)
©2020 Ziarul Metropolis



ハンス・クナッパーツブッシュ (1888~1962)



■ヨハン・シュトラウス2世：喜歌劇「こうもり」序曲、ウィーンの森の物語、皇帝円舞曲、ほか
セルジュ・チエリビダツケ (指揮)
フランス国立放送管
収録：1973年
(Altus) ALT-295 (2CD)



■シュトラウス2世：ウィンナ・ワルツ、ポルカ & マーチ集
レナード・バーンスタイン (指揮)
ニューヨーク・フィル
収録：1965、67~70、71、75年
(ソニー) SICC-2183



■クレメンス・クラウス／ニューイヤー・コンサート 1951~54
クレメンス・クラウス (指揮)、ウィーン・フィル
収録：1951~54年
(Eloquence) 4827363 (2CD)
※Decca原盤



■ウィーンの休日～ヨハン・シュトラウス：ラデツキー行進曲、ウィーンの森の物語ほか
ハンス・クナッパーツブッシュ (指揮)
ウィーン・フィル
収録：1957年
(タワーレコード/ユニバーサル) PROC-1657
※Decca原盤

いるように示すセンスもあった。

「ウィーン・フィルと付き合いが深くても、ウィンナ・ワルツはちよつと…」という指揮者たち

一方、ウィーンのオーケストラをたびたび振り、この地と関係が深くても、シュトラウス・ファミリーの音楽にはさ

ほど関心を示さなかった指揮者もいる。古くは、シュミット・ロイツェル・シュテットがそうだった。いかにもドイツ音楽を真つ正面から取り上げる指揮者にとつて、あまり重要な音楽とは思えなかったのかも。

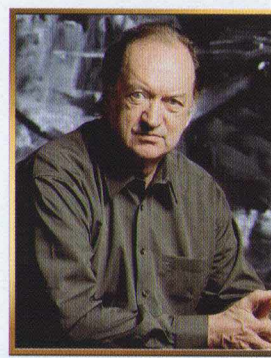
ジュリーニやショルティといった指揮者も、ウィンナ・ワルツとはちよつと縁遠い。彼らの場合、シュミット・ロイツェル・シュテットのケースとは異なり、独自の美意識がウィーン風のもの

と相容れなかったのかもしれない。バーンスタインは、1960年代後半から70年代にかけ、ニューヨーク・フィルとの1枚のシュトラウス作品集を録音している。ただ、さほど熱心に

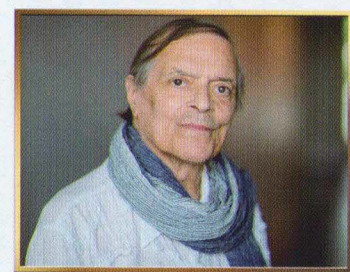
取り上げたという形跡はない。ウィーン・フィルとの深い結びつきにより、1992年のニューイヤー・コンサートの指揮を執ることが決定したとき、ラヴェルの「ラ・ヴァルス」をプログラムに入れたという提案、主催者は大いに困惑したという。結局、この演奏会の指揮は、バーンスタインの死によって、カルロス・クライバーが

「異形のウィンナ・ワルツ演奏」の魅力

本場という幻想は、必然的に異端をも生み出す。たとえば、クナッパーツブッシュがウィーン・フィルを指揮したシュトラウスの、重厚なロマンティズム。交響詩作品としてのシュトラウス作品に、



ニコラウス・アーノンクール (1929~2016)
©Marco Borggreve



ジョス・ヴァン・インマゼール (1945~)



■ニコラウス・アーノンクール／ヨハン・シュトラウスIIレコーディングス
ニコラウス・アーノンクール (指揮)
アムステルダム・コンセルトヘボウ管
ベルリン・フィル、ウィーン・フィル
収録：1986、87、94、98、99、2001年
(Warner) 2564622239 (7CD)



■ヨハン・シュトラウス2世：ワルツ、ポルカ集
ジョス・ヴァン・インマゼール (指揮)
アニメ・エテルナ
収録：1999年
(Zig-Zag Territoires) ZZT-020601

ない。

ほかには、ヴァイルよりしく退廃の傾向が香り高いクレンペラー、ドレスデンのオーケストラの響きを十二分に生かし、田舎風だがゴージャスなガラ

「時代考証型」の指揮者も「アーノンクール、インマゼール」

異端といえば、アーノンクールの時代考証型シュトラウスも忘れてはならない。コンセルトヘボウ管との最初の録音が出たときは、そのギクシャクとしたアーノンクール節が衝撃的だった。のちにベルリン・フィルとの録音で

は、アクの強さは残しつつも、「皇帝円舞曲」など、19世紀の交響詩の系譜にある作品ということを示した。演奏慣例を排してシンフォニックに演奏することで、ブラームスやワーグナーと同時代の音楽であることを。アーノンクールはモダン・オーケストラとの共演だったが、インマゼールがアニメ・エテルナを指揮して、ピリオド楽器を使つてのシュトラウス演奏に挑んでいる。これがまた色彩的で、ヴィヴィッドな躍動感。

そして、現在のニューイヤー・コンサートで披露されているシュトラウスの音楽が、良くも悪くも、20世紀の演奏様式のまま凝り固まってしまったことに気づかされる(今日の歌舞伎が明治初期のスタイルでフィックスしているように)。

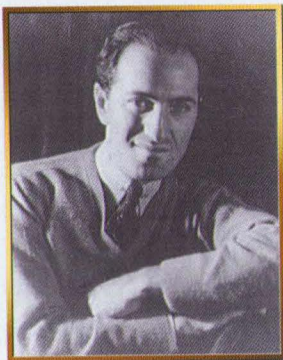
そのウィーンでのニューイヤー・コンサートは、アーノンクールの登場で伝統芸能からの脱却を図るのかわかっていたが、結局のところ有名指揮者が持ち回りで行う、高級な観光イベントとして定着してしまつた。声がかかる指揮者は、ウィンナ・ワルツを得意にしているわけでもなく、飾り物の役割が強い。主役は、もっぱらウィーン・フィルだからだ。

オペラーオペレッターミュージカル

オペラからオペレッタへ

オペレッタの発祥地はパリ。もと
もとオペラは王侯貴族の楽しみで、
一般大衆が触れることのできた音楽
劇は登場人物の数を限定した小規模
なものに限られていたが、19世紀も
半ばになりブルジョワ階級が勃興す
ると、王立の歌劇場以外にもくだけ
た音楽劇を上演することが許される
ようになった。ここで生まれたのが
オペレッタである。

オペレッタでいち早く成功したの
がジャック・オッフエンバック。オ
ペラ・コミックでチェロを弾く傍ら
音楽劇を作曲していたが、上演の機
会に恵まれなかったため、自ら政府
の公認を受けプフ・パリジャン座を



ジョージ・ガーシュウィン
(1898~1937)



コール・ポーター
(1891~1964)

オペラでは作曲家が創造者として君臨し、
生身の歌手が声だけで勝負するのに対し、
ミュージカルは最新技術を用い、
大衆の心に響くものを分業によって合理的に追求していく。

文 江藤光紀◎音楽評論家
text by Mitsunori Eto

興し、「地獄のオルフェ(天国と地獄)」
(1858)をはじめ自作を舞台にか
ける。作品は次々にヒット、その成
功を追うものも続出し、パリはオペ
レッタの一大地となる。

オペレッタの流行はさらに楽都ウ
ィーンへと飛び火する。先鞭をつけ
たのはメロドラマ(セリフや朗読な
どに音楽をつけたもの。安っぽい恋
愛劇のことではなく、クラシック音

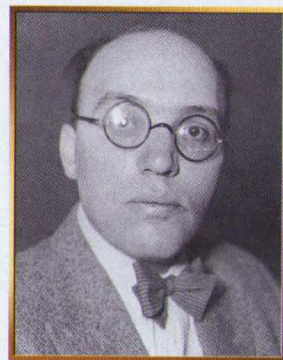
楽の立派な一ジャンルである)など
を手掛けていたフランツ・フォン・
スッペで、その成功に刺激されたの
がヨハン・シュトラウスⅡ世だった。
すでにワルツの名作の多くを世に
送っていたシュトラウスだったが、
1870年以降は「こうもり」(18
74)、「ヴェネツィア一夜」(18
83)、「ジプシー男爵」(1885)
などオペレッタの傑作を相次いで発
表して、ウィーンのオペレッタは黄
金期を迎えるのである。

オッフエンバックは作品に鋭い政
治風刺を込めたが、ウィーンのオペ
レッタにはそうした意識は希薄で、
そこにオーストリアハプスブルグ帝
国、そしてハプスブルク支配の終焉
を象徴する文化的な爛熟を讀むこと
もできよう。

ヨハン・シュトラウスⅡ世亡き後、
20世紀に入ってもオペレッタは作ら
れ、演じられた。「メリー・ウィドウ」
(1905)、「微笑みの国」(1929)

のフランツ・レハール、「チャールダ
ーシュの女王」(1915)のエメリ
ヒ・カールマンなどが有名だが、彼
らはワルツに代わってハンガリーや
ロマの音楽を取り込み、エキゾテ
ックな装いで人気を得た。

1930年代に活躍したオペレッ
タの作曲家は、当時登場したトーキ
ー映画にも楽曲を提供している。ト
ーキー映画の出現により、オペレッ
タ創作はその歴史的使命を終えた



クルト・ヴァイル
(1900~50)



リチャード・ロジャース
(1902~79)

見ることもできるだろう。

オペレッタからミュージカルへ

オペレッタから生まれたのがミュ
ージカルだが、その源流はロンドン
にある。パリやウィーンの流行に対
し、この国際都市ではサヴォイ劇場
が政治風刺を効かせた新作を上演し
ていた。ギルバート&サリヴァンの
コンビによる「ミカド」(1885)
は今日のレパートリーに残る傑作だ。
これに続いて世紀の変わり目に人
気を集めたのはエドワード期ミュ
ージカル・コメディと呼ばれる軽い音
楽劇で、これが後のミュージカルの
語源となったが、発展の主要な舞台
となったのはアメリカ、とりわけニ
ューヨークだった。

移民で成り立つアメリカには王侯
貴族が音楽劇を保護する歴史がな
かったため、当初は音楽を絡めた様々
なスタイルの舞台形式が乱立してい
た。オペレッタやミュージカル・コ
メディはヨーロッパの人気作を輸
入して上演する形が主流で、189

0年代が最も盛んだったが、第1次
世界大戦がはじまると旧大陸からの
新作の供給が途絶え、また敵国とな
ったドイツのオペレッタは敬遠され
下火になっていく。

代わって登場したのが国産のミュ
ージカル・コメディを作ろうとする
流れだった。ブロードウェイに劇場街
が形成されてくるのもこの頃である。

戦間期はまたジャズが一大流行し
たが、ジャズと音楽劇を結びつけた
のがジョージ・ガーシュウィンだ。
ヒットソングを連発した後、193

0年代にはミュージカル創作に本格
的に携わっていく。また「オクラホ
マ」(1943)、「サウンド・オブ・
ミュージック」(1959)のリチャ
ード・ロジャース、「キス・ミー・ケ
イト」(1948)のコール・ポータ
ーなど、戦後のブロードウェイをけん
引する才能が本格的にミュージカル
を発表し始めるのも30年代のこと。

さらにナチスの迫害を逃れてアメ
リカに渡ったクルト・ヴァイルのよう
な作曲家もここに加わる。「ストリー
ト・シーン」(1949)は、旧大陸

の本格的なオペラ作曲家がミュージ
カルに進出した結果、生まれた傑作だ。

オペラとミュージカルの違い

一般にオペラは芸術、ミュージカ
ルは娯楽とカテゴライズされること
が多いが、その理由は上演の目的も
さることながら、ミュージカルでは
PAなどの音響装置を積極的に用い
るとか、作曲家とアレンジャーの分
業が当たり前に行われていることな
ど、制作上の基本的な考え方の違い
が反映されているように思われる。

オペラでは作曲家が創造者として君
臨し、生身の歌手が声だけで勝負す
るのに対し、ミュージカルは最新技
術を用い、大衆の心に響くものを分
業によって合理的に追求していく。

そこには創作者側の葛藤もある。
メロディーメーカーとして有名だっ
たガーシュウィンは、正統な音楽教
育を受けなかったことをコンプレッ
クスに感じ、ラヴェルやストラヴィ
ンスキーに弟子入りしようとして断
られた逸話が有名だ。「ボーギーとベ
ス」のようなアメリカ初の本格的国
産オペラを書いたのも、ミュージカ
ルの社会的立場が高くなかったから
だろう。

バーンスタインも指揮と並んで、
「オン・ザ・タウン」(1949)、「ウ
ェストサイド・ストーリー」(1957)
などミュージカルでも成功したが、シ
リアスな音楽の作曲家として認めら

■ オッフエンバック:「天国と地獄」
トゥールーズ・キャピトル国立管弦楽団
ミシェル・ブラッソン(指揮)
(Warner) 0094639513352



■ シュトラウス2世:「こうもり」
ヘルマン・プライ(バス・バリトン)
ユリア・ヴァラディ(ソプラノ)
ルネ・コロ(テノール)
ルチア・ポップ(ソプラノ)、他
バイエルン州立管弦楽団
カルロス・クライバー(指揮)
(DG) 00028945776521



■ レハール:「メリー・ウィドウ」
ドナルド・グレイベ(テノール)
ゾルターン・ケレメン(バス)
テレサ・ストラータス(ソプラノ)
エリザベス・ハーウッド(ソプラノ)、他
ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
ヘルベルト・フォン・カラヤン(指揮)
(DG) 00028943571227



■ コール・ポーター・セレブレーション
ミュージカルと映画から、その名旋律を集めて
「エニシング・ゴーズ」「キス・ミー・ケイト」、他
ザールブリュッケン・カイザー・スラウテルン・
ドイツ放送フィルハーモニー管弦楽団
ドリアン・ウィルソン(指揮)
(SWR) SWR-19091CD

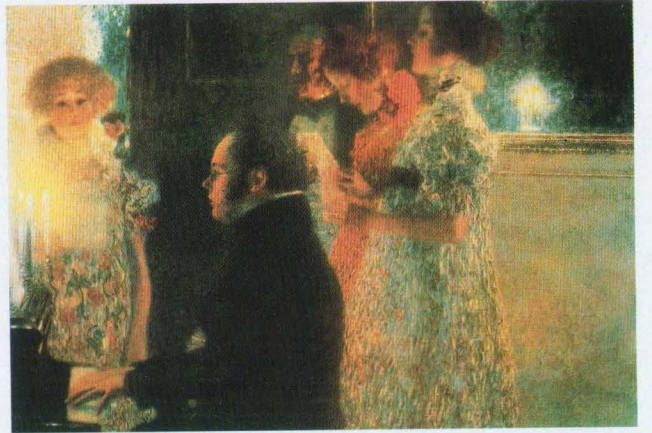


■ ベスト・オブ・ミュージカル
「サウンド・オブ・ミュージック」「マイ・フェア・レディ」、他
ブラハ・フィルハーモニー管弦楽団
ジェームズ・モーガン(指揮)、他
(Universal Classics) 00028948221202

れることに生涯こだわっていた。

オペラは過去の伝統芸能なのか?

善し悪しを単純に言うことはでき
ないが、ミュージカルでは新しいヒ
ット作が途切れていない一方、歌劇
場のレパートリーのほとんどが10
0年以上前に作られており、国や自
治体の補助を受けながら運営される
オペラの博物館化を心配する声があ
るのも事実である。しかしまた、歌
劇場は近年もアジア(中国、韓国、
台湾など)や中東・中央アジア(ド
バイ、オマーン、アスタナなど)な
ど世界各地でオープンしているのも
興味深い。オペラは特定の地域・時
代を超えて、文化のシンボルとして
普遍性を帯び、究極のドラマとして
これからも上演されていくだろう。



クリムトによって描かれたフランツ・シュベルト (1797～1828)

農民が踊っていた舞曲ドレーヤーやヴェラー、レントラー等を起源とするワルツを用いて創作活動に取り組んだのは、ウィンナ・ワルツの雄ヨハン・シュトラウス一家やヨーゼフ・ランナたちのみではない。ここではワルツに心を寄せた作曲家や作品を検証してみたい。

■ シューベルト「12のワルツ」 シヨパン ワルツ19曲

まずはシューベルトである。シューベルトは毎週のように行われていた近しい友人たちの音楽会シューベルト・アデーで「12のワルツ」、17のレントラー、9つのエコセーウ D145」や

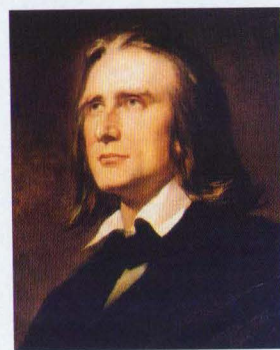
ウィンナ・ワルツ以外の ワルツを書いた作曲家

シヨパンのワルツには舞踊的なものと、ワルツの形式を借りて抒情詩的に結晶したものとの2つのパターンがあるが、いずれも優美な旋律線と精妙なハーモニー、そして高い芸術性を携えたエレガントな情調が湛えられている。

文 真嶋雄大◎音楽評論家
text by Yudai Majima



■リスト：メフィスト・ワルツ第1～3番、他
キット・アームストロング(ピアノ)
(ソニー・クラシカル) 88875163732

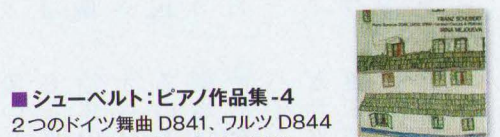


フランツ・リスト(1811～86)
ヴィルヘルム・フォン・カウルバッハ画
1856年

パンである。シヨパンは故国ポーランド由来、ともに3拍子の舞曲ポロネーズを16曲、マズルカを58曲書き上げ、ワルツについても19曲を遺している。しかしながらシヨパンのワルツは自らも語っているようにマズルカに近く、ウィンナ・ワルツとは一線を画す。

■ リスト「メフィスト・ワルツ」 ブラームス ワルツ集

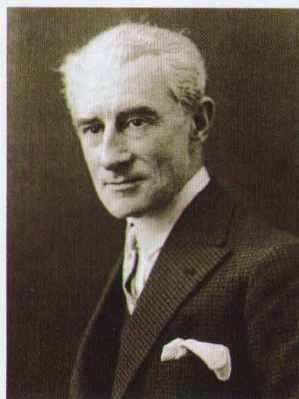
リストは、「メフィスト・ワルツ」とした作品を4曲遺した。もとよりファウスト伝説に強く惹かれていたリストが、ゲーテの「ファウスト」に基づく「ファウスト交響曲」を完成後、同郷の詩人レーナウによる長大な詩からインスピレーションを得て作曲したのが管弦楽曲「夜の行列」と「村の居酒屋の踊り」。その後者をピアノ独奏用に編曲したのが「メフィスト・ワルツ第1番」であり、書き上げたのは18



■シューベルト：ピアノ作品集-4
2つのドイツ舞曲 D841、ワルツ D844
12のドイツ舞曲(レントラー) D790
20のワルツ(最後のワルツ集)から5曲、他
イリーナ・メジュエワ(ピアノ)
(若林工房) WAKA-4171/72



■シヨパン：ワルツ全集
アリス＝紗良・オット(ピアノ)
(ユニバーサル) UCCG-1473



モーリス・ラヴェル
(1875～1937)



■ラヴェル：「ラ・ヴァルス」、他
フランソワ＝グザヴィエ・ロト(指揮)
レ・シエクル
(キングインターナショナル) KKC-6172



■ブラームス：
16のワルツ、「ハンガリー舞曲集」
アロイス&アルフォンス・コンタルスキー
(4手連弾)
(ユニバーサル) UCCG-6311



■チャイコフスキー：
「エフゲニー・オネーギン」より
「ボロネーズ」と「ワルツ」
レオポルド・ストコフスキー(指揮)
ロンドン・フィル
(Pentatone Classics) PTC-5186229
(SACD ハイブリッド)

60年、同時に4手ピアノ版も作られ、さらに編曲されたピアノ独奏版はバラフレーズのように展開する。
メフィストがヴァイオリンで弾くワルツに合わせ、人々が踊る様子を描いているが、超絶技巧が炸裂するヴィルトゥオージティに満ちており、その凄まじいエモーションとともに圧倒的な難曲として知られている。

ブラームスが作品39のワルツ集を書いたのは、1865年。その3年前からウィーンに移っていたブラームスは、その明るく自由な空気に触れ、16曲のワルツ集をまとめた。とは言えブラームスのワルツはJ・シュトラウスのような華やかなものではなく、シューベルトのレントラーのように古き良き時代を思わせる雰囲気を感じている曲やノクターンのような風趣の曲、またスラブの大地を思わせたり、ハンガリーの異国情緒に寄せた曲など実に多彩。当初は四手連弾用に作曲されたが、翌年ピアノ独奏用に編曲され、さらに没する年の1897年には2台ピアノ用に書き直された。とりわけ親しまれているのは変イ長調の第15曲であり、柔らかなで静謐な美しさに満ちている。

■ チャイコフスキー「エウゲニー・オネーギン」、ラヴェル「高雅で感傷的なワルツ」

ビゼーの「カルメン」に啓発を受けたチャイコフスキーは、プーシキンの「エウゲニー・オネーギン」を歌劇化

しようと、ロシア人の最も愛するこの歌劇を1878年に完成させた。プーシキンの原作は社会的矛盾の中で生きる人々に目を向けており、主人公オネーギンは厭世観に囚われながらも純粋な人として描かれているが、チャイコフスキーはむしろ純粋な愛を拒まれたタチヤーナの方に愛情を注いだ。
第2幕に置かれたのが、華麗なオーケストレーションを纏った「ワルツ」。チャイコフスキーは他にも、「くるみ割り人形」の「花のワルツ」をはじめ、「白鳥の湖」、「眠りの森の美女」、「交響曲第5番」第3楽章、「弦楽セレナード」第2楽章、「ワルツ・スケルツォ」など積極的にワルツを採り上げた。
続いてラヴェルである。ラヴェルはケクランらと1910年、新しい音楽の擁護と埋もれた才能の再発見を目的に独立音楽協会(SIM)を創設した。そのSIMの演奏会のために、翌年完成させたのが「高雅で感傷的なワルツ」である。ラヴェルは「シューベルトを手本に創作した」と述べており、実際にシューベルトの「34の感傷的なワルツ」と「高貴なワルツ」を意識しながら

らこの作品に對峙した。

さらにラヴェルは1920年、J・シュトラウスへのオマージュとして書き上げたのが、管弦楽のための舞踊詩「ラ・ヴァルス」。ヴァルスとはフランス語でワルツのこと。ラヴェルはこの作品を、ロシア・バレエ団の創設者デ・イアギレフに示したが、舞踊に不向きという理由でデ・イアギレフは拒否、以来2人は不仲になったという。

ラヴェル自身の解説に、「渦巻く雲の切れ目を通して、ワルツを踊る人々が垣間見える。1855年頃の皇帝の宮廷」とあるように、目眩めく色彩と官能の洪水が押し寄せる。後年、作曲者自身によってピアノ独奏用に編曲された。

■ レハール 「メリー・ウィドウ・ワルツ」

おおよそオペレッタの双壁は、ヨハン・シュトラウス2世の「こうもり」とレハールの「メリー・ウィドウ」で

ある。後者は裕福な未亡人ハンナとかつての恋人タニロとの恋物語。その終幕でタニロがハンナに改めて告白する二重唱が「唇は語らずとも」。この旋律は「メリー・ウィドウ・ワルツ」としても世界中で親しまれている。
また貧しい貴族と魅惑的なオペラ歌手が織り成すオペレッタ「ルクセンブルクのワルツ」もあるが、著名なのはワルツ「金と銀」、これは1902年に催されたメッテルニヒ侯爵夫人主催の舞踏会のために作曲された管弦楽作品。「金と銀」とはこの舞踏会のテーマであり、会場は一面金色と銀色に裝飾されていたという。
その他、クライスラーの「愛の悲しみ」、シヨスタコーヴィチの「2つのヴァイオリンのための5つの小品」の第4曲、ワルトトイフェル「女学生」、「スケーターズ・ワルツ」、イヴァノヴィチ「ドナウ河のさざなみ」、そしてハチャトゥリアンの劇音楽「仮面舞踏会」より「ワルツ」などが広く親しまれている。

ワルツは エンターテインメントか

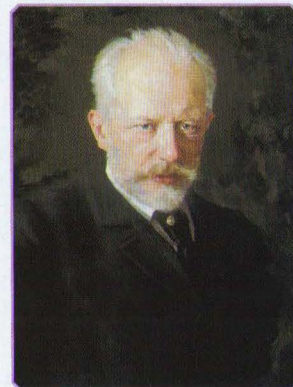
文 西原稔 桐朋学園大学名誉教授
text by Minoru Nishihara

ウィーンの人々にとってワルツは
エンターテインメントであり、
比類ない芸術なのである。

が鳴り響き、メッテルニヒ体制のウ
ィーンの人々はフランス革命を象徴
するこの音楽を用いたワルツに打ち
興じたのである。



フレデリック・ショパン
(1810～49)
ドラクロワ画



ピョートル・チャイコフスキー
(1840～93)
Nikolai Kuznetsov 画
トレチャコフ美術館蔵

人々の最大の娯楽ワルツ

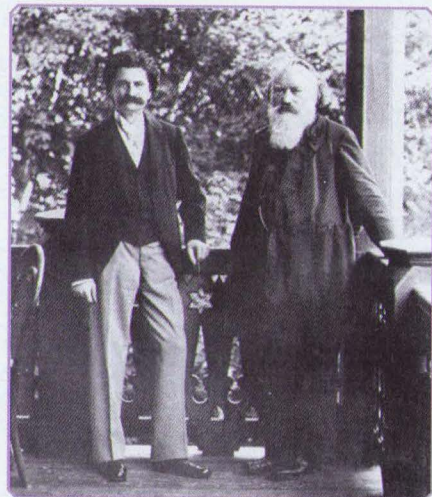
ワルツはまずもって舞踏会で楽し
く男女が手を取って優雅に踊りを楽
しむための音楽である。舞踏会では、
さまざまにペアを取り換えてワルツ
が踊られ、舞踏会はおそらく男女の
出合いの場でもあったのであろう。
ウィーンのオデオン舞踏場のような
高級志向のホールは別として、場末
のホールともなると、そこは何が起
こってもおかしくないところであっ
たらしい。

しばしばホールの2階は時間貸し
の部屋になっていて、人々はそこを
頻繁に利用したし、「ホールを仕切っ
ている高い食器戸棚の向こうを」瞥
すればたちまち、このダンスの歓楽
が差し向かいの楽しみに変わる様子
を手取るように見ることができた。
舞踏会場では、どのような音楽で
あってもワルツになった。ヨハン・
シュトラウス1世の作曲した「パリ・
ワルツ」ではコーダで何と、その当
時はウィーンでは発禁であったフラ
ンス国歌の「ラ・マルセイエーズ」

ワルツの芸術音楽への転機

このワルツに真の芸術性を与えた
のは第一にショパンである。ショパ
ンのピアノのためのワルツは、彼独
自の芸術音楽として洗練されたジャ
ンルに生まれ変わった。そこには舞
踏会での猥雑な雰囲気はいっさい含
まれていないどころか、ある面では
フランス音楽の透明な情感に満たさ
れている。彼のワルツには、ウィー
ンの舞踏場での騒々しい雰囲気はま
ったく感じられない。

彼のワルツの土台はウィーンの様



シュトラウス2世の親友だったヨハネス・ブラ
ーム (1833～97) 写真: Rudolf Krziwanek

る時に手本としたのはシェ
ーベルトのワルツである。
彼の「ワルツ集」はたしか
に芸術音楽であるが、ワ
ルツをそのほかの創作と明ら
かに区別していたように思
われる。

というのはその後作曲
されたワルツ集「愛の歌」
作品52a、ワルツ集「新愛
の歌」作品65aは、同時期
に作曲された「弦楽四重奏
曲」作品51や「交響曲第2番」作品
73とは比較にならないであらう。こ
れらのワルツ集は明らかにアマチュ
アの音楽の楽しみのために作曲され
た作品で、彼の中では他の作品創作
とははっきりと区別されていた。

チャイコフスキーとワルツ

チャイコフスキーは真にワルツを
愛した作曲家である。彼のバレエ音
楽「くるみ割り人形」の中で奏され
る「花のワルツ」ほど美しいワルツ
はない。彼はワルツとは銘打ってほ
しくないものの、ワルツをさまざま
な作品で用いている。そこから響いて
くるのは北国に生きるチャイコフス
キーのまばゆいばかりのウィーンの
宮廷舞踏会への理想なのではないだ
らうか。彼の創作ではワルツはエン
ターテインメントではない。彼は間違

ヨハン・シュトラウス2世と ワルツ

いなく芸術の真実をこの3拍子の舞
曲に託しており、バレエ音楽だけで
はなく、ピアノ作品「四季」の「12月」
にもワルツが取り入れられている。

ヨハン・シュトラウス2世は父を
上回って数多くのワルツを作曲した。

彼は自らが指揮者となって楽団を引
き連れて文字通りヨーロッパ大陸だ
けではなくロシアにも遠征し、大き
な喝さいを受ける。彼が偉大な音楽
家となったのは、自作のワルツなど
の舞曲で成功を収めたことによるだ
けではない。

彼はそれまでの舞踏会での踊りの
ための音楽であったワルツをふんだ
んに取り入れてオペレッタ「こども
り」を作曲する。シュトラウス2世
は「こどもり」に代表される一連の
オペレッタの作曲によってウィーン
の新しい音楽文化を創造したのである。
ヨハン・シュトラウスの「こども

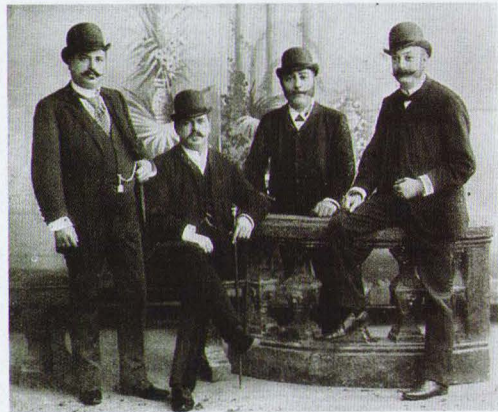


アルバン・ベルク
(1885～1933)
写真: Max Fenichel

り」が世界の音楽受容に与えた影響
は決定的であった。ヨーロッパの大
晦日は「こどもり」を観劇すること
なしには済まずことができないほど
に、彼のこのオペレッタは不滅の価
値を現在に至るまで誇っている。な
ぜこの作品はこれほどまでに人々を
魅了するのであろうか。その人気は、
そのほかのオペラを遥かに凌駕する
と言ってもよい。

前衛的な作曲技法を駆使している
わけでもなく、難しい形式を用いて
いるわけでもないこのオペレッタで
は序曲が始まることから、聴き手
をたちまちにして現実を忘れさせ、
夢の舞踏会の世界へと誘う。その最
大のしかけがワルツである。序曲で
奏される3拍子のリズムに誘われて
聴衆は現実を忘れ、舞台の上の仮構
の物語の世界へと誘われる。

このワルツの及ぼした影響は大き
かった。面白いことに、新ウィーン
楽派のシェーンベルクやベルク、ヴ
ェーベルンもこのワルツを愛し、彼
らはワルツを編曲し、ベルクはオペ
ラ「ヴォツェック」のなかで「居酒
屋のワルツ」を取り入れている。12
音技法の作曲家たちのワルツの編曲
は楽しさに満ちており、彼らはやは
りウィーンの人であることをよく示
している。ウィーンの人々にとって
ワルツはエンターテインメントであ
り、比類ない芸術なのである。



シュランメル兄弟たちのシュランメル四重奏団

ウィーンから生まれた音楽、 シュランメル音楽

ウィーン旧市内の地下は歴史的経緯から皆つながっていると聞いたことがある。ウィーンの音楽や音楽家も同じこと、多様でいて平等、互いにつながりがある。

シュランメル兄弟が始める

ウィーン固有の音楽と言えど、シュランメル音楽だ。19世紀後半に始まって今も盛ん、ウィーンの民俗音楽でポピュラー音楽だ。日本にもファンが多い。

ヨハンとヨーゼフのシュランメル兄弟(複数形でシュランメルン)が始めた。創始者の姓がジャンルの名前になっている。シュランメル音楽特有の楽器編成で演奏される音楽に、歴代のシュランメル音楽家たちやそのグループ(これらはシュランメル兄弟の末裔だ)から、やはり「シュランメルン」という)によって作曲されたレパートリー、これらの総体が「シュランメル音楽」だ。兄ヨハンは1850年、弟ヨーゼフは52年生まれ。両親は専門的な音楽教育を受けなかった街のクラリネット奏

者や歌手だったから、息子2人は音楽院に送ってゲオルク・ヘルメスベルガー11世らにヴァイオリンを学ばせた。1878年、兄弟は当時開発されて間もないコントラギターの弾き手と共に「ヌスドルフ三重奏団」を結成、かの地のホイリゲや宿屋や各種の催事で演奏を始めた。コントラギターは通常のフレット付き6弦ネックに低音を出せるフレットレスの9弦ネックを加えたダブルネックのギターで、ウィーンの楽器製作者が2世代をかけて開発・製作した。手が大きくないと弾きこなせない。もちろん兄弟のヴァイオリンもウィーン製だった。

三重奏団は自作にヨーゼフ・ランナーやシュトラウス父子のワルツやポルカやギャロップを演奏してたちまち引く手あまた、シュトラウスII世も聴いて絶賛の手紙を送った。ブラームスも

ファンのひとりだった。ダンスや歌い手のバックバンドにもなれば居酒屋やレストランのBGMにもなり、コンサートもできる。シュランメル音楽は最初から融通無碍だった。

皇太子の前で御前演奏

1884年には「甘い音色の木片」と称されるG管クラリネットが加わって四重奏団となった。兄弟が音楽家生活25年を迎えた86年から活動のクライマックス、同年末にハンス・リヒターが自らウィーン・フィルでの出演100回を記念するパーティーに四重奏団を招いて演奏を依頼すれば、翌年秋には狩りに出かけたルドルフ皇太子一行の前で御前演奏、兄ヨハンの代表作のマーチ《ウィーンはウィーン》はウィーンの歩兵第4連隊の軍楽隊で演奏

された。88年から翌年にかけてブダペストやドイツ各都市への演奏ツアーも行われた。

1890年代に入るとメンバーらの健康が悪化、テコ入れも兼ねてウィーン式のボタン式アコーディオン(「ハリーモニカ」という)が演奏に加わるようになった。しかし93年に兄ヨハンは95年には弟ヨーゼフが没して活動は終了。この頃にはシュランメル音楽はウィーンの音楽として市民権を得ていて、93年にはシカゴ万博のアトラクションとして演奏され、20世紀初めにはウィーンだけで数十のシュランメル音楽のグループが活躍していた。

シェーンベルクもシュランメル音楽が大好きで、影響の片鱗は「私的演奏家協会」の演奏会で披露されたシュトラウスのワルツの編曲に聴かれる(と個人的には考えている)。

ナチス体制下になっても「民族的」で飲みの場に欠かせないシュランメル音楽は制約や弾圧とは無関係、1944年にはシュランメル兄弟に四重奏団の活躍するコメディ映画まで作られた(YouTubeで視聴可能)。

ウィーン・フィルの楽団員が結成

戦後。シュランメル音楽の復興は早かった。「オーストリアは自由だ!」で名高いワイグル外相も大のシュランメル音楽好きだった。1964年にはウィーン・フィルの楽団員有志が現在の「フィルハーモニア・シュランメルン・ウィーン」を結成、世代交替しながら活動を続けている。昔から本業の後に場所を移してシュランメル音楽をやっていた団員はいたから(今もいるはずだ)、いわば裏芸からの昇格でもあった。シュランメル音楽の世界では「アカデミック・スタイル」とも呼ばれる(皮肉なニュアンスはない)、極めて洗練された演奏を聴かせて人気がある。

ヴァイオリン2人、コントラギター、G管クラリネット、ボタン式アコーディオンの5人が最大編成で、これに歌やヨーデルが付く。この編成はかなりオールマイティで、本来のレパートリーであるワルツ、ポルカ、マーチ等はもちろん、アレシジ次第で世界の音楽のほとんどが演奏できる。



フィルハーモニア・シュランメルン・ウィーン



ノイエ・ヴィーナー・コンツェルト・シュランメルン

ンメル音楽専門の音楽祭もある。3日間シュランメル音楽(とワイン)に浸ることのできる「ゲミュートリッヒ(心地よい)」な催しだ。シュランメル兄弟だけで数百曲の楽曲を残したから、レパートリーは無尽蔵にある。

秘曲の発掘に熱心なグループもあれば、アレシジと楽器の技量をフル稼働してワグナーやマーラーまで演奏する野心派、ジャズやポップスを手がけるグループもある。聴き手もミニアツクで、シュベルトのレントラーとランナーとシュトラウス父子のワルツについて、それぞれのリズムのニュアンスの差を教えてくれたりする。

ヴィーナーリートが歌えて一人前

歌手が歌うのはウィーン歌謡ことヴ

シュランメル・ヴァイオリン

ヨハン・シュランメル、ヨーゼフ・ランナー、ヨハン・シュトラウスII世の楽曲
フィルハーモニア・シュランメルン・ウィーン(シュランメル兄弟使用のヴァイオリンによる演奏)
(Paladino Music) PMR-56



ヴィンテージ

ヨハン+ヨーゼフ・シュランメル兄弟、カール・ミヒャエル・ツィーラー、ヨハン・シュトラウス父子の楽曲
フィルハーモニア・シュランメルン・ウィーン
(Extraplate) EX-5432



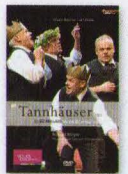
ツヴァンツィヒ(20)

ヨーゼフ・シュトラウス《ワルツ「天体の音楽」》
カッツェンベルガー、ミクラーシュ、他の楽曲
ノイエ・ヴィーナー・コンツェルト・シュランメルン
(Col Legno) COL-20430



タンホイザーを80分で(DVD)

ネストロイ&ピンダー オペラ・パロディ
《タンホイザーとヴァルトブルクの酒場の合戦》
ウィーン・フォルクスオーパー
ノイエ・ヴィーナー・コンツェルト・シュランメルン
(Phoenix Edition) PE-804 ※廃盤



ウィーンはウィーン

《ウィーンの辻馬車の歌》《ウィーンはウィーン》
《ウィーンの芸術家》、ほか
ハインツ・ホレチェック(歌)
ウィーン・シュランメル・アンサンブル、ほか
(カメラータ) 25CM-310



イーナーリート。《ウィーン、わが夢の街》に《ウィーンの辻馬車の歌》は有名だろ。ウィーンにオーストリア出身の歌い手は、ヴィーナーリートが歌

えて初めて一人前、国立歌劇場やフォルクスオーパーの歌い手たちの伝統芸でもある。昔なら断然エーリッヒ・クンツ、ハインツ・ホレチェック、アンゲリカ・キルヒシュラーガーも悪くない。ウィーン旧市内の地下は歴史的経緯から皆つながっていると聞いたことがある。ウィーンの音楽や音楽家も同じこと、多様でいて平等、互いにつながりがある。ウィーン・フィルがウィーン音楽として60年近くシュランメル音楽の演奏を続けているのはやはり先見の明を感じさせる。

つい最近になってからようやく多くのオーケストラが、ポピュラー音楽やゲームやアニメ等の音楽のコンサートに価値を見いだすようになったのだから。